



# 「長崎のしまに学ぶ — つながる とき・ひと・もの —」

平成29年度  
地(知)の拠点整備事業  
【最終年度 事業経過報告書】



# ごあいさつ

長崎県立大学 学長 太田 博道

文部科学省の支援による本学の地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）、「長崎のしまに学ぶ - つながる とき・ひと・もの - 」は、平成25年度にスタートしましたが、本年3月で5年が経過し、文科省の支援事業としては終了いたしました。今後は、本学独自の全学的プロジェクトとして継続することになります。

本プロジェクト通称「しまなび」というように、学生がPBL（Project-Based Learning：課題解決授業）により、長崎県内の7つの離島活性化のための課題を設定し、4泊5日のフィールドワークによって何らかの提案を行うことができるよう努力する、というのが活動の概略です。学生の能動的学修が地域のために少しでも役に立つことを願って立ち上げたプロジェクトです。「しまの課題」と一口で言っても様々なものがあり、島によっても異なります。住民の皆様の努力はもちろんのこと、行政、NPO等々が長いこと取り組んで解決し得ない課題に、ズブの素人の学生が授業の一環として取り組んで何ができるか、という疑問はプロジェクト提案の初めからありました。全学部の学生約700名が全員離島へ行くことがホントに可能なのか？天候が荒れたらどうするか？しまの住民の皆様にかえて迷惑かもしれない？想定外のトラブルがあったら？等々不安材料は次から次に出てきますし、やらない理由も山程ありましたが、とにかく手探りで、できることから始めようと決意してから、早くも5年が経ったことになりました。

PBLについては、多くの教員がそれ程慣れている訳ではなく、学生にとっても初めての経験と言って良いと思います。どこまで教員がリードすべきなのか、議論が拡散してグループの方針が決まらないのではないかと、積極的でない学生をどう扱うか等々の心配も数多くありましたが、教員の練習から始めて、何とか克服することができたと感じています。学生の熱心さも個人間で温度差はあるだろうが、これを良い経験として、その後の勉学や就職活動に活かしている者も少なくないように感じられます。

しまの皆様からどのくらい評価されているか、最も気になるところです。現段階で、幸いにいくつかのグループの活動は目に見える形で成果となりました。各しまの行政の方、コーディネーターの方の一方ならぬご指導、住民の皆様の暖かいご協力があった成果と言えます。一方、観光や名産品のPRに偏っている、同じことの繰り返しではないかというご批判も頂いています。年々変わる学生による活動を大学としての継続した取り組みというレベルまで上げ、その結果としての成果を産み出すことが今後の最大の課題であると考えています。

離島に限らず、現在の日本には、全体としても地方としても、難しい問題が多くあります。それでもより良い方向へ日本をリードできるのは活力ある若者以外にいません。そのような人材育成のために、今後ともこのプロジェクトに磨きをかけていきたいと思えます。

# 目次

I	事業概要	1
II	活動履歴	3
III	活動報告	
	1 COCプロジェクト推進本部	7
	2 COCプロジェクト連絡会議	10
	3 COCプロジェクト評価委員会	12
	4 各種取組	
	(1) 地域志向の教育	20
	(2) 地域志向の研究	47
	(3) 地域との連携	49
	(4) 教育の効果	66
	(5) eラーニングシステム等の構築	69
IV	参考資料	
	1 各種規程、各種会議委員名簿	75
	2 評価実施要領	84
	3 シラバス（平成29年度版）	87
	4 学長裁量教育研究費 応募要領	89
	5 「しま」のコーディネーター設置要綱	93
V	その他	95

# I

## 事業概要

「長崎のしまに学ぶ  
— つながる とき・ひと・もの —」

平成29年度  
地(知)の拠点整備事業  
【最終年度 事業経過報告書】





# I 事業概要

## 1 概要

### ●長崎のしまに学ぶ — つながる とき・ひと・もの — 【概要図】

#### 大学では

- 学長のトップマネジメントを強化し、大学の重要課題に的確かつ機動的に対応するために、重要課題毎のプロジェクトチームを編成し、大学改革を推進します。また、研究については学長の主導のもと、「しま」や長崎の地域課題を重点化します。
- 全学的にグローバルな視野をもち、かつ地域課題に主体的に取り組み解決できる人材育成を主眼とした地域志向のカリキュラム改革を行い、学部学科再編に取り組みます。授業方法にアクティブラーニングを取り入れ、主体的な学習を促すとともに、モバイルラーニングを導入し学習を支援します。
- フィールドワークの拠点として地域にサテライトキャンパスを設置し、出前講義、eラーニングにより生涯教育・地域協働の人材育成の拠点等としても活用します。



#### 地域では

- 教職員・学生が、全員地域に向かうことにより、交流人口の拡大や活性化に貢献します。
- 大学が地域を「つなげる」役割を果たすとともに、とき(伝統・文化)を理解し、ひと(住民・学生)もの(特産品等)の動きを活性化させ、地域課題の解決を図ります。
- 広域的な視点で諸課題の解決を図るとともに、成功した取組事例は県内の他地域に普及します。

## 2 組織体制

## ●COCプロジェクト推進体制

## COCプロジェクト推進本部

本部長：学長  
副本部長：副学長(COC担当)

(構成員)

- ・学長
- ・副学長
- ・学部長
- ・学生部長
- ・シーボルト校学生部長
- ・地域連携センター長
- ・教育開発センター長
- ・教務委員会委員長
- ・大学事務局長
- ・シーボルト校事務局長
- ・その他必要に応じて学長が指名する者

(業務)

- ①事業の実施に関する事
- ②事業の予算及び決算に関する事
- ③地域志向の教育及び研究に関する事
- ④地域との連携に関する事
- ⑤文部科学省への報告等に関する事
- ⑥COCプロジェクト評価委員会への報告に関する事
- ⑦その他事業に関する事

要望  
報告決定  
報告

報告

評価  
提言

## COCプロジェクト連絡会議

(構成員)

- ・推進本部副本部長
- ・連携協定等を締結している自治体が推薦する者 各1名
- ・企画広報課長
- ・シーボルト校総務企画課長
- ・その他議長が必要と認められた者

(業務)

- ①事業推進にかかる各自治体と大学間の連絡及び調整に関する事
- ②COCプロジェクト推進本部への要望や意見の取りまとめに関する事
- ③その他、本学と地域との連携を円滑に推進するために必要なこと

## COCプロジェクト評価委員会

(構成員)

- ・外部有識者 2名
- ・大学運営に関心を有する者であって、公募により選ばれた者 1名
- ・長崎県知事が推薦する者 1名
- ・連携協定等を締結している市長が推薦する者 1名
- ・学長の指名する教職員 若干名
- ・その他学長が必要と認められた者

(業務)

- ①事業内容の評価及び提言に関する事

## COCプロジェクト推進本部

## 地域志向の教育に関する部会

- ・「しまなび」プログラムに関する事
- ・地域を志向したカリキュラム改革に関する事
- ・eラーニングに関する事(システム構築を除く)

## 地域志向の研究に関する部会

- ・地域に関する研究の推進に関する事
- ・地域志向教育研究経費に関する事

## 地域との連携に関する部会

- ・地域における生涯教育(地域公開講座等)
- ・受託研究、共同研究等に関する事
- ・地域振興に関する事
- ・シンポジウム、報告会の開催に関する事

## 教育の効果に関する部会

- ・「しまなび」プログラムの教育効果の検証に関する事
- ・eラーニングシステムを利用した授業の教育効果の検証に関する事

## eラーニングシステム等の構築に関する部会

- ・eラーニングシステムの構築に関する事
- ・システムの維持・管理・運用・システムのカスタマイズ等に関する事
- ・コンテンツの開発等に関する事

# II

## 活動履歴

「長崎のしまに学ぶ  
— つながる とき・ひと・もの —」

平成29年度  
地(知)の拠点整備事業  
【最終年度 事業経過報告書】







## II 活動履歴

### 【活動履歴】

#### 平成29年度

#### 4月

- ・1日 学長裁量教育研究費の募集開始（新規教員）
- ・3～4日 学生オリエンテーション（アンケート実施）
- ・11日～「しまなび」プログラム 講義開始
- ・11日 第1回 COCプロジェクト推進本部会議
- ・20日 第1回 地域志向の教育に関する部会（全学教務委員会）
- ・29日 地域公開講座（五島市）  
「歩健学のすすめ ～もっと楽しくなるウォーキングの秘けつ～」

#### 5月

- ・16～17日 第1回 コーディネーター打合せ会
- ・19日 地域公開講座（新上五島町）  
「健やかに生きるための食事学」
- ・24日 第2回 地域志向の教育に関する部会（全学教務委員会）
- ・30～31日 学長裁量教育研究費 審査会

#### 6月

- ・1、8日 学長裁量教育研究費 審査会
- ・15日 地域公開講座（五島市）  
「健やかに生きるための食事学」
- ・22日 看護学科 しまの健康実習報告会
- ・28日 COCプロジェクト評価委員会
- ・29日 学長裁量教育研究費 審査結果通知

#### 7月

- ・5日 第3回 地域志向の教育に関する部会（全学教務委員会）
- ・7日 地域公開講座（宇久町）  
「歩健学のすすめ ～もっと楽しくなるウォーキングの秘けつ～」
- ・18日 第2回 COCプロジェクト推進本部会議
- ・21～23日 「しまなび」プログラム 成果の活用  
～ojika map. おぢかマップ（小値賀町）～
- ・25日 第1回 COCプロジェクト連絡会議

## 8月

- ~6日 「しまなび」プログラム 講義終了
- 10日 第1回 全学FD研修会  
「初年次教育の動向について」
- 22日~ 「しまなび」プログラム フィールドワーク 各班毎に随時実施
- 30日 第2回 全学FD研修会  
「ナンバリング」

## 9月

- 7日 地域との連携に関する部会
- ~23日 「しまなび」プログラム フィールドワーク 全班終了
- 23日 地域公開講座（宇久町）  
「歩健学のすすめ ~もっと楽しくなるウォーキングの秘けつ~」
- 24~27日 「しまなび」プログラム 成果の活用  
~農業体験ボランティア（小値賀町）~
- 25日 女性のキャリア支援等に関する講座（シーボルト校）  
「輝く女性のキャリアアップ術」

## 10月

- 9日 フィールドワーク学内発表会  
（国際社会学部・情報システム学部・看護栄養学部）
- 6、13日 フィールドワーク学内発表会（経営学部・地域創造学部）
- 12~16日 「しまなび」プログラム 成果の活用  
~ojika map. おちかマップ（小値賀町）~
- 14~15日 「しまなび」プログラム 成果の活用  
~壱岐カツサンドの実現化（長崎夢彩都）~
- 20日 第4回 地域志向の教育に関する部会（全学教務委員会）
- 27~28日 「しまなび」プログラム 成果の活用  
~カレンダー作成（宇久町）~

## 11月

- 3~4日 学園祭（佐世保校）
- 4~5日 学園祭（シーボルト校）
- 7日 第3回 COCプロジェクト推進本部会議
- 18日 地域公開講座（宇久町）  
「歩健学のすすめ ~もっと楽しくなるウォーキングの秘けつ~」

- 21日 第3回 全学FD研修会  
「初年次教育」
- 23日 COC事業総括シンポジウム
- 29日 第5回 地域志向の教育に関する部会（全学教務委員会）

## 12月

- 17日 地域公開講座（宇久町）  
「歩健学のすすめ ～もっと楽しくなるウォーキングの秘けつ～」
- 26日 第6回 地域志向の教育に関する部会（全学教務委員会）

## 平成30年1月

- 12～13日 「しまなび」プログラム 成果の活用  
～サイクリングマップの作成（新上五島町）～
- 13～14日 「しまなび」プログラム 成果の活用  
～観光写真集の作成、観光パンフレットの提案（宇久町）～
- 13～14日 「しまなび」プログラム 成果の活用  
～「和服で島内の散策」の提案（的山大島）～

## 2月

- 7日 第2回 COCプロジェクト連絡会議
- 22日 第2回 コーディネーター打合わせ会
- 27日 第7回 地域志向の教育に関する部会（全学教務委員会）

## 3月

- 1～2日 第4回 全学FD研修会  
「アクティブラーニングおよびルーブリック」
- 6日 第4回 COCプロジェクト推進本部会議
- 10日 地域公開講座（宇久町）  
「歩健学のすすめ ～もっと楽しくなるウォーキングの秘けつ～」
- 21日 「しまなび」プログラム 成果の活用  
～壱岐カツサンドの試験販売およびデータ収集（大阪）～
- 30～31日 「しまなび」プログラム 成果の活用  
～映画祭の開催（的山大島）～

## 平成25年度～平成29年度

	事業運営	「しまなび」プログラム（※1） 実績人数	報告会・意見交換会等
平成25年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・組織の体制作り</li> <li>・各種委員会の立上げ</li> <li>・推進本部会議（6回）</li> <li>・連絡会議（1回）</li> <li>・評価委員会</li> <li>・各種会議</li> </ul>	-	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キックオフシンポジウム（新上五島町）</li> </ul>
平成26年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・推進本部会議（6回）</li> <li>・連絡会議（2回）</li> <li>・評価委員会（1回）</li> <li>・各種会議</li> </ul>	（試行） 271名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対馬市、杵岐市、五島市で報告会</li> </ul>
平成27年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・推進本部会議（7回）</li> <li>・連絡会議（2回）</li> <li>・評価委員会（1回）</li> <li>・各種会議</li> </ul>	56グループ 602名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・しまの報告会（全体発表会）</li> </ul>
平成28年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・推進本部会議（3回）</li> <li>・連絡会議（2回）</li> <li>・評価委員会（1回）</li> <li>・各種会議</li> </ul>	48グループ 530名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・しまの報告会（全体発表会）</li> <li>・COC 中間評価</li> </ul>
平成29年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・推進本部会議（4回）</li> <li>・連絡会議（2回）</li> <li>・評価委員会（1回）</li> <li>・各種会議</li> </ul>	68グループ 707名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・COC事業総括シンポジウム</li> </ul>

※平成25年度～平成28年度の内容は各年度の年間活動報告書参照

## ※1 「しまなび」プログラムとは（詳細はP21以降参照）

「しまなび」プログラムとは、本県の「しま」（対馬、杵岐、五島、新上五島、小値賀、宇久、的山大島）を佐世保校、シーボルト校に次ぐ第3のキャンパスとして位置づけ、学生が主体的・実践的に学ぶPBL学習法（project based learning 課題解決型学習法）を導入するとともに、「しま」での体験を通じて、グローバルな視点を持つとともに、ローカルな視点で地域課題に取り組むことができる人材の育成を目的とした教育プログラムです。

本プログラムは全学必修科目で、講義科目「長崎のしまに学ぶ」（4～8月）と演習科目「しまのフィールドワーク（4泊5日）」（8～9月）の2つの科目から構成され、「しま」の課題等に対し、学生自身が解決策や対応方法を考えることで、課題発見力、分析力、積極性、協調性などの社会人として求められる能力を涵養します。

# III

## 活動報告

「長崎のしまに学ぶ  
— つながる とき・ひと・もの —」

平成29年度  
地(知)の拠点整備事業  
【最終年度 事業経過報告書】





# III 活動報告

## 1 COC プロジェクト推進本部

※P75～P78 参照

### 平成 29 年度

- 第 1 回 平成 29 年 4 月 11 日 (火) 16:20～18:10
  - 1. 審議事項
    - 平成 28 年度 COC プロジェクト事業評価報告書について
  - 2. 報告事項
    - COC プロジェクト評価委員会の開催について
    - 的山大島「しま」のコーディネーターの配置及び「しま」のコーディネーター設置要綱の改正について
    - 平成 28 年度決算について
    - 平成 29 年度予算および平成 29 年度計画について
  - 3. その他
  
- 第 2 回 平成 29 年 7 月 18 日 (火) 10:40～11:40
  - 1. 審議事項
    - COC 事業総括シンポジウム (11/23 開催) について
  - 2. 報告事項
    - 平成 29 年度「しまなび」プログラム実施計画について
    - 文科省フォローアップの報告について
    - COC プロジェクト評価委員会結果について
  - 3. その他





- 第3回 平成29年11月7日(火) 9:00~10:00
  1. 協議事項
    - COC 事業総括シンポジウム(11/23開催)について
      - ・ ちらし・ポスター、広報等について
      - ・ スケジュール詳細について
      - ・ 来賓予定者・申し込み状況について
  2. 報告事項
    - ・ 平成29年度「しまなび」プログラム実施について
    - ・ COC 事業の今後の流れ
  3. その他
  
- 第4回 平成30年3月6日(火) 9:00~10:00
  1. 協議事項
    - ・ COC 事業評価報告書(案)について
    - ・ COC 事業経過報告書(案)について
  2. 報告事項
    - ・ 平成29年度事業実績について(地域との連携に関する部会)
    - ・ 「しまなび」プログラム終了後における継続活動について
    - ・ COC プロジェクト評価委員会について
    - ・ 平成29年度予算執行状況について
  3. その他
    - ・ COC 事業の今後の体制について



## 平成25年度～平成29年度

	開催日
平成25年度	第1回 平成25年10月21日(月) 第2回 平成25年11月5日(火) 第3回 平成25年11月11日(月) 第4回 平成25年12月3日(火) 第5回 平成25年12月24日(火) 第6回 平成26年3月4日(火)
平成26年度	第1回 平成26年4月21日(月) 第2回 平成26年6月3日(火) 第3回 平成26年8月5日(火) 第4回 平成26年10月28日(火) 第5回 平成27年2月3日(火) 第6回 平成27年3月18日(水)
平成27年度	第1回 平成27年4月21日(火) 第2回 平成27年6月2日(火) 第3回 平成27年7月13日(月) 第4回 平成27年8月25日(火) 第5回 平成27年11月10日(火) 第6回 平成28年2月2日(火) 第7回 平成28年3月23日(水)
平成28年度	第1回 平成28年4月12日(火) 第2回 平成28年7月19日(火) 第3回 平成29年1月31日(火)
平成29年度	第1回 平成29年4月11日(火) 第2回 平成29年7月18日(火) 第3回 平成29年11月7日(火) 第4回 平成30年3月6日(火)

※平成25年度～平成28年度の内容は各年度の年間活動報告書参照

## 2 COCプロジェクト連絡会議

※P79～P81 参照

### 平成29年度

- 第1回 平成29年7月25日（火）13:00～14:30
  1. 平成29年度「しまのフィールドワーク」実施計画について
  2. COC事業総括シンポジウム（仮称）の開催について
  3. その他
    - コーディネーターの設置について
    - 学園祭への出店について
    - 地域に関する研究報告書の配布について
  
- 第2回 平成30年2月7日（水）13:00～14:30
  1. 地域との連携事業等について
  2. COC事業総括シンポジウムアンケート集計結果について
  3. 平成29年度「しまなび」プログラムの実施状況等について
  4. 平成30年度「しまなび」プログラムについて
  5. 「しまなび」プログラムのフィールドワークに対する要望事項について
  6. 平成30年度以降の連絡会議について
  7. その他



## 平成25年度～平成29年度

	開催日	
平成25年度	第1回	平成26年 3月18日(火)
平成26年度	第1回	平成26年 8月 6日(水)
	第2回	平成27年 2月18日(水)
平成27年度	第1回	平成27年 7月29日(水)
	第2回	平成28年 2月17日(水)
平成28年度	第1回	平成28年 7月27日(水)
	第2回	平成29年 2月17日(金)
平成29年度	第1回	平成29年 7月25日(火)
	第2回	平成30年 2月 7日(水)

※平成25年度～平成28年度の内容は各年度の年間活動報告書参照

～過去の連絡会議の様子～



### 3 COC プロジェクト評価委員会

※P82～P83 参照

#### 平成29年度

・平成29年6月28日（水）13：30～15：30

1. 開 会
2. 平成28年度長崎県立大学 COC プロジェクト事業評価【項目別評価】  
について
3. 平成28年度長崎県立大学 COC プロジェクト事業評価【全体評価】に  
ついて
4. 閉 会



平成 28 年度  
長崎県立大学COC事業評価報告書【全体評価】

※P84～P86 参照

1. 事業実施計画

平成 28 年度

実施4年目であり、本学が地域の地（知）の拠点として地域の課題解決への貢献を行うとともに、学生に対しては、地域の歴史、文化、社会・経済、医療・保健・福祉等をよく知り、また、積極性、創造性、協調性、倫理性及びコミュニケーション力などの学士力を身につける能動的な学びを提供することにより地域と学びの2つを両輪として、学長を中心とした学内の教育および組織改革を達成する。

2. 推進本部自己評価

平成 28 年度の事業実施計画と事業の実績及び成果を総合的に鑑みて目標を達成することができたか。

評点： III

判断理由

<事業の実績>

・地域の課題を学生が抽出し解決策を考える「しまなび」プログラムを、全学必修科目として経済学部、国際社会学部の学生に対して実施した。学生は事前の講義形式の授業でしまのことを学び課題を考えたとうえで実際にしまでのフィールドワークを行い、課題解決策をまとめた。フィールドワークの成果は地域住民の方と意見交換しながらまとめ、学内での発表や地域へ向けて発表し、地域の方と意見交換も実施した。このことにより地域との関係を深め今後の課題の抽出や解決方法、学生の活動への理解等についても双方の理解を進めることができた。

・グローバルな視野をもち、かつ地域課題に主体的に取り組み解決できるグローバル人材育成のため、学部学科再編を行った。

<事業の成果>

・「しまなび」プログラム(講義科目「長崎のしまに学ぶ」全 15 回、演習科目「しまのフィールドワーク」)を実施することにより学生が地域課題を考えフィールドワーク(4泊5日)を実施し、学内外に発表することにより学生の課題探究能力や問題解決力、発信力等を涵養することができた。さらに、学生のフィールドワークの成果を地域の方々へ発表し意見交換を行うことで研究成果の地域への還元につながり、大学や学生にとっても今後の研究・発表のテーマや方向性を確認することができた。また、学生の研究成果で実際に活用

できそうな素材については、地域の方とディスカッションを行い、具体的な活用方法等について検討を行った。また、学生のアクティブラーニングやPBL形式の授業をサポートするためのeラーニングシステムを昨年度の実施結果や学生の意見等を参考に更なる構築を進めた。これにより、効率的な授業運営や学生のユーザビリティに資することができた。

・平成28年4月より以下の学部、学科に再編された。それぞれの学部・学科のカリキュラムポリシーや人材育成方針に沿って、実学（現場）を重視した実践的な教育を行っている。

経営学部（経営学科、国際経営学科）

地域創造学部（公共政策学科、実践経済学科）

国際社会学部（国際社会学科）

情報システム学部（情報システム学科、情報セキュリティ学科）

看護栄養学部（看護学科、栄養健康学科）

### 3. 評価委員会評価

平成28年度の事業実施計画と事業の実績及び成果を総合的に鑑みて目標を達成することができているか。

評点：     III    

#### 判断理由及び意見

##### 項目別評価結果

	IV	III	II	I
1. 教育	3	4	0	0
2. 研究	1	5	0	0
3. 社会貢献	0	6	0	0
4. 全体	0	3	0	0
合計	4	18	0	0

・実施計画の項目別の評価結果については、「IV」が4項目、残りの18項目は「III」であった。

・特に、昨年以上に作りこまれたeラーニングシステム「manabie（マナビー）」を学生が使いこなし、学習効率が上がっていると見受けられ、一方的に情報を与えるのではなく、しらの課題を自ら考え、解決策や改善策をグループで考えていく中で、学生自身「気づき」も醸成されている。

・また、「学生の提案を実現するための、しま関係者と学生とのディスカッション実施」という実施計画に対し、一例として、五島でのフィールドワークを行った学生グループが、

かんころ餅パッケージ制作から長崎市の百貨店での催事イベントでの販売を行うまでに到達したことは、想定以上の成果であり大変評価できる。

- ・しまの健康実習報告会については、健康維持や病気などの予防にも繋がり、地元関係者等からも大変評価を受けているとのことであり、評価できる。
- ・平成 28 年度の活動については、順調に実施されており、全体評価としては自己評価どおり「Ⅲ」が適当である。

<平成 25 年度・26 年度>

評点： Ⅲ 年度計画を順調に実施している

<平成 27 年度>

評点： Ⅲ 年度計画を順調に実施している



# 平成28年度 長崎県立大学 COC 事業評価報告書

項目	事業の目的・必要性		平成28年度事業実施計画の内容	自己評価		委員会 評価	備考
	平成25～29年度	平成28年度		計画の進捗状況、成果及び評価の判断理由	得点		
1. 教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 産産・半産など特色ある県土をフィールドとした教養教育の質的充実と、応用能力・実践的能力を涵養する専門教育及び外国語教育を実施することで、真の学力を備えた専門職業人及び国際教養人を育成する。</li> <li>・ 全学的なカリキュラム改革と学部学科再編を含む教育課程の改革を行う。さらに、教育の質的転換を図るため講義科目にアクティブラーニングを導入し、課題解決型教育を実施することで、グローバルな視点を持ちかつ地域の課題を解決できるグローバル人材を育成する。</li> <li>・ 長崎関連の専門科目と連結した「長崎・しま」をキーワードとする全学教育科目を配列し、地域を学ぶ実践的な体験学習等を実施することで学生の課題解決能力や問題解決力を涵養する教育プログラム（「しま」体験教育プログラム）を全学生必修とする。</li> <li>・ 学部ごとに「しま」と地域の特徴をいかした教育課程を整備することで全学共通科目から専門科目へと切れ目なく地域を志向した履修モデルを構築する。</li> <li>・ 教職員が協力して入学時から卒業までの一貫した就業力育成教育を行うことにより、学生が希望する進路の実現に必要な知識・人能力を涵養する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「しまなび」プログラムの講義科目にPEL手法を導入することにより課題解決型授業を実践することで教育の質的転換にも資することができる。</li> <li>・ 28年度より再編する学部学科のカリキュラムをカリキュラムポリシーに基づき適切に実施する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「しまなび」プログラムに向けた事前学習、課題抽出、準備等</li> <li>・ 8月から9月、講義科目で各グループが準備した計画に基づきフィールドワークを行った。（学生530名、教員30名参加）フィールドワークは7つのしま（対馬、壱岐島、島田島、宇久島、小値賀島、中通島、福江島）で4～5日の日程で行い、4日目は報告会をしまで開催することにより、成果をわかりやすくまとめ発表する能力や地域の乃々との意見交換等により、学生のコミュニケーション力も身につけることができた。また、フィールドワーク活動時には地域のさまざまな立場や世代の方との交流により、地域活性化が図られた。さらに、10月には48グループを3つに分け、10/4、14、28で「しまなび」報告会を開催した。報告に向け、各グループで協議し、資料を作成する中で協働性や発信力、コミュニケーション力などを涵養することができた。</li> <li>・ 10月の発表会で学生の評価が高かったグループをしま毎に選抜して、12月に全体発表会を開催した。全体発表会は筑世高校とシーボルト校、フィールドワークを行った7つのしまを連携システムを確立して結び、しまの報告会を開催した。学生の評価を基に選抜された12グループは、これまでの発表資料や内容などをブラッシュアップして報告会に臨んだ。各発表ごとに参加者からの質疑が行われ、発表終了後は、しま関係者と意見交換会を行い、大変温かいご意見やアドバイスをいただいた。</li> <li>・ 学生の調査等の成果で実際に活用できそうなものについては、問題点や改善点などを関係者と協議し、実際に活動を開始した。なお、1つの成果として、五島でのフィールドワークを行った学生グループが、かんこる館パッケージを制作し、長崎県「五島の観光とよみ産品まつり」（開催期間2/28～3/6）にて、地元業者と連携・販売を実施することができた。このように発表会やしま関係者とのディスカッションを通して、社会人基礎力を醸成することができた。</li> <li>・ H27年度実施結果をもとに、eラーニングシステムの更なる改善を行うための開発を継続して行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前期に、「長崎のしまに学ぶ」（全15回）として「しまなび」プログラムの講義部分を実施した。実際にしまの関係者より、しまの概要やポイント等について説明いただき、学生はしまの状況をしっかり理解したうえで、課題の解決方法やフィールドワーク（4泊5日）の計画等に取り組んだ。6回目以降はグループワークが主体となり、PBL、ディスカッション、プレゼンテーションなどのアクティブラーニングを継続することで、知識の定着や課題解決能力や問題解決力を涵養することができた。また、授業内容の記録、出席管理、レポート提出、フィールドワークの計画決定等においては、本学で開発したeラーニングシステム「Imanable（イマナビ）」が学生の学習効率向上に大きく寄与した。</li> <li>・ 8月から9月、講義科目で各グループが準備した計画に基づきフィールドワークを行った。（学生530名、教員30名参加）フィールドワークは7つのしま（対馬、壱岐島、島田島、宇久島、小値賀島、中通島、福江島）で4～5日の日程で行い、4日目は報告会をしまで開催することにより、成果をわかりやすくまとめ発表する能力や地域の乃々との意見交換等により、学生のコミュニケーション力も身につけることができた。また、フィールドワーク活動時には地域のさまざまな立場や世代の方との交流により、地域活性化が図られた。さらに、10月には48グループを3つに分け、10/4、14、28で「しまなび」報告会を開催した。報告に向け、各グループで協議し、資料を作成する中で協働性や発信力、コミュニケーション力などを涵養することができた。</li> <li>・ 10月の発表会で学生の評価が高かったグループをしま毎に選抜して、12月に全体発表会を開催した。全体発表会は筑世高校とシーボルト校、フィールドワークを行った7つのしまを連携システムを確立して結び、しまの報告会を開催した。学生の評価を基に選抜された12グループは、これまでの発表資料や内容などをブラッシュアップして報告会に臨んだ。各発表ごとに参加者からの質疑が行われ、発表終了後は、しま関係者と意見交換会を行い、大変温かいご意見やアドバイスをいただいた。</li> <li>・ 学生の調査等の成果で実際に活用できそうなものについては、問題点や改善点などを関係者と協議し、実際に活動を開始した。なお、1つの成果として、五島でのフィールドワークを行った学生グループが、かんこる館パッケージを制作し、長崎県「五島の観光とよみ産品まつり」（開催期間2/28～3/6）にて、地元業者と連携・販売を実施することができた。このように発表会やしま関係者とのディスカッションを通して、社会人基礎力を醸成することができた。</li> <li>・ H27年度実施結果をもとに、eラーニングシステムの更なる改善を行うための開発を継続して行う。</li> </ul>	Ⅳ	Ⅳ	【評価委員会意見】 大変な取り組みをよく実施されている。学生もシステムを使いこなしており評価に値する。
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 長崎関連の専門科目と連結した「長崎・しま」をキーワードとする全学教育科目を配列し、地域を学ぶ実践的な体験学習等を実施することで学生の課題解決能力や問題解決力を涵養する教育プログラム（「しま」体験教育プログラム）を全学生必修とする。</li> <li>・ 学部ごとに「しま」と地域の特徴をいかした教育課程を整備することで全学共通科目から専門科目へと切れ目なく地域を志向した履修モデルを構築する。</li> <li>・ 教職員が協力して入学時から卒業までの一貫した就業力育成教育を行うことにより、学生が希望する進路の実現に必要な知識・人能力を涵養する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「しまなび」プログラムでPELを活用するため、学内教職員のスキルアップに向けたPELワークショップの実施。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 8/10、11 全学FD研修会として、「学生の動機づけを高める」をテーマに2日間開催された。教職員151名参加。また、分科会では、「しまなびプログラム」等における「PBL」を含むアクティブラーニングでの動機づけをテーマに議論を行い、その結果を参加者全員で共有した。</li> <li>・ 11/8 経営学部FD研修会として、「しまなびプログラムに関する意見交換及び今後の進め方の検討」をテーマに研修を行った。（教職員21名参加）</li> <li>・ 2/7 地域創造学部FD研修会として、「アクティブラーニングの理解と実践について」をテーマに研修を行った。（教職員30名参加）</li> <li>・ アクティブラーニングや課題解決型教育を目指していくうえで、教職員のPEL実践のスキルは不可欠である。昨年度より必修化した「しまなび」プログラムは講義科目においてPELを活用した授業として、多くの教職員がプログラムに関わるようになった。しまなびプログラム実施後に振り返りや改善点、意見交換等教職員に対するPELの研修を行ったことでPELの考え方や進め方のスキルアップが図られ、よりスムーズなプログラムの運営が可能となった。また各教員の専門科目等にもそのスキルを生かしていくことができるため、今後PELの専門科目への展開も期待できる。</li> </ul>	Ⅲ	Ⅲ	【評価委員会意見】 想定以上に先入部んだ事例があり、自己評価以上の評価に値する。
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 27年度の実施結果をもとに、eラーニングシステムの更なる改善を行うための開発を継続して行う。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ H27年度実施結果をもとに機能追加を行ったeラーニングシステムをH28年度に実運用した。H28年度の機能追加として、しまなびプログラム評価機能、発表会の閲覧と投稿機能、過去の成果閲覧機能、地域コーディネーターとの連携機能を搭載した。H28年度の学生530名の運用を踏まえた改善点をまとめ、H29年度につなげる。</li> <li>・ この2段階の実績から、成績評価の方法を『合格』、『不合格』の2段階評価から、eラーニングシステムを活用するA～F評価の導入に向けた検討を行い、H29年度より実施する。このことにより、学生のさらなる意欲向上が期待できる。</li> </ul>	Ⅳ	Ⅳ	【評価委員会意見】 先制からレベルアップし、継続的な着地点のイメージが付け動きやすさで繋がっており評価に値する。
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「しまなび」プログラムで活用するサテライトの選定、整備。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ フィールドワークにおける学生の活動拠点や教職員の待機場所として、7つのしまで計10か所のサテライトキャンパスを選定した。当初サテライトキャンパスは、学生のしまにおけるフィールドワークの拠点と地域住民の生涯学習の場としての機能を果たした点で選定した施設を想定していた。しかし、使用できるようにするためには多額の設備改善費用が必要であり、固定した施設では利便性がよくないことなどが判明したため、既存の会議室や公民館等を利用することとした。固定した施設より利便性の高い選定や適切な時期に弾力的に設定する方がメリットがあり、経費も抑えられ結果的に使いやすい拠点となっている。</li> </ul>	Ⅲ	Ⅲ	

項目	事業の目的・必要性		平成28年度事業実施計画の内容	自己評価		委員会 評価	備考
	平成25～29年度	平成28年度		計画の進捗状況、成果及び評価の判断理由	評価		
2. 研究	<ul style="list-style-type: none"> <li>長崎の地理的、歴史的特徴を踏まえた重点課題研究を指定し、研究課題の充実や重点課題研究への研究費配分など研究向上のための支援を行うことにより、地域の振興を推進することができる。</li> <li>地域が求める政策課題に関する研究に積極的に取り組み、提言を行う。</li> <li>教員が行う地域課題等の研究成果を教育に有効に活用し、教育の質向上に努める。</li> <li>地域社会へ多くの研究成果を積極的に還元するため、知的財産の創出・管理・技術移転への取組・支援体制を強化する。</li> <li>地域活性化や地域課題への対応のため、地域の企業、研究機関、自治体との交流を深めることにより、産学官連携を推進することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域振興の推進のため、長崎の地理的、歴史的特徴を踏まえた重点課題研究を継続して行う。研究成果については地域へ還元し、授業への活用も行う。</li> <li>大学と地域が連携して地域の課題を解決するため、地域からの受託研究や産学官連携の事業に積極的に前向き。</li> <li>「しま」が求める地域課題等を「しまなび」プログラムに適切に反映することにより、若者目線での解決策に繋がるような提言を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学長裁量教育研究費の公募、採択を行い、研究を実施する。</li> <li>包括連携協定を締結した自治体と共同研究、受託研究を実施する。</li> <li>公開講座</li> <li>看護学科しまの健康実習報告会</li> <li>重点課題研究報告書作成、地域との連絡会等により配付。</li> <li>事業経過報告書の作成。本事業での取組内容を地域に広く周知。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>4月、学長裁量教育研究費の公募を行い、審査会を開催のうえ14件、16,407千円が採択された。学長裁量教育研究費を本学教員に配分することで、地域課題の解決や政策提言につながった。また、本学の地域を志向した教育の還元につながるものとなり、各教員が地域に対する視野を広げ、研究成果を各々の授業に活用し、学生へ地域を志向した授業や卒論や修論の研究テーマに反映させることができた。</li> <li>包括連携協定を締結している佐世保市、平戸市、長与町、新上五島町と、共同研究、受託研究、連携事業を行った。地域との共同研究、受託研究等の実施により、地域の諸課題に対し地域と連携して解決を図ることができた。</li> <li>公開講座を春、秋に19講座実施し、1,778人の聴講者があった。うち5講座については難聴会場である新上五島町へ通訳講義システムを用いて配信を行った。公開講座を地域住民に向けて行っていくことにより、大学教員の研究や大学の取組みが地域に理解されていくこととなる。公開講座の受講者は年々増加傾向にあり、この取り組みを続けていくことによりCOCにおける地域での活動等に対して協力を得ることも繋がっていく。</li> <li>6月30日に看護学科しまの健康実習報告会を開催した。この報告会を実施することにより、学生がしまで実習した成果をまとめ、現地の実習で指導いただいた保健師、関係者に発表を行うことで、学生の課題探究能力や問題解決力が評価された。</li> <li>地域志向教育研究費の平成27年度成果報告を取りまとめた冊子を作成し、7月に県内各市町及び県関係機関に配付した。このことにより、地域の課題解決につながる研究の成果を地域に還元することができた。</li> <li>事業経過報告書を作成し、今年度の各事業についてとりまとめ、地域の乃や関係者へ配付した。このことにより、本学のCOC事業全体について理解が得られ、地域の皆様と連携して事業を進めていくことが可能となった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>III</li> <li>III</li> <li>III</li> <li>III</li> <li>III</li> <li>III</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>III</li> <li>III</li> <li>III</li> <li>IV</li> <li>III</li> <li>III</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li></li> <li></li> <li></li> <li>【評価委員会意見】健康維持や病児予防に繋がり、地元関係者等からも大変好評であり、自己評価以上の評価に値する。</li> <li></li> <li></li> </ul>

項目	事業の目的・必要性		平成28年度事業実施計画の内容	自己評価		委員会 評価	備考
	平成25～29年度	平成28年度		計画の進捗状況、成果及び評価の判断理由	評価		
3. 社会貢献	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域公開講座や学術講演会を開催することで、教育研究の成果を地域社会に還元する。</li> <li>高校生への出前講座や大学における模擬授業により高大連携を推進し、さらに地域の小中学生や高齢の方への出前講座・体験学習等の学修支援を行うことにより、生涯学習拠点機能を強化する。これらの実践にあたっては、遠隔システム(テレビ会議システム)を積極的に活用する。</li> <li>本事業により得られた知見を地域の自治体に提言することにより、地域再生・活性化に結び付ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学が持つ様々な知を、公開講座や地域公開講座等を通して、地域の住民に還元する。</li> <li>地域を志向した大学教員の研究成果や学生の「しまなび」プログラムによって得られた成果等については、報告書や現地への報告会等を通じて地域に還元し、大学教職員、学生、行政、地域住民等との連携を図りながら課題解決に向けた協力体制を確立する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>包括連携協定を締結した自治体と共同研究、受託研究を実施する。</li> <li>地域、本学学生、教職員による特産品開発、販売ルート開発等開発の協議</li> <li>「しまなび」プログラムの実施による地域住民との交流や地元高校等との連携した活動を行う。</li> <li>学際における地域と協働したブースの設置や地域同士のマッチングを目的とした活動を実施</li> <li>生活習慣病講座、女性キャリア支援講座等の開催</li> <li>「しまなび」プログラムの実施を踏まえ、今後の課題や地域からの要望等について学生の報告会等の機会を通して自治体や地域住民等との意見交換会等を行う。また、学生が提案した課題解決策や新商品等のアイディア、観光案内等を実践に活用するための協議を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新上五島町、佐世保市、長与町、平戸市と連携協定に基づき、共同研究・受託研究など連携事業に取り組んだ。このことにより、地域の人口減少対策、交通不便地区調査、マーケティング調査等の諸課題に対する情報分析のデータ提供、課題解決に向けた助言等を行った。</li> <li>・H29年度からの本格実施する佐世保市の特産品に係る販売促進の共同研究については、その事前準備として、教員の指導のもと学生が市場調査等の調査を実施した。学生が実際に現場で調査を行うことにより、市場が持つ課題や現状を把握することができたとともに、課題発見力、計画力、創造力などが醸成された。</li> <li>・「しまなび」プログラムにおいて、しまの地域住民や小学校、中学校、高校と連携してフィールドワークを実施した。しまのフィールドワークでは、地域の方や学校の生徒や先生方へインタビューやアンケートによる情報収集、また、共同してフィールドワークの課題に取り組みんでいく中で、問題を理解する力、そのうえで適切に表現する力、関係を構築する力などコミュニケーションに必要な力が身に付いた。今後はさらにしまの住民のご意見もより多く取り入れて、交流を深める方向で努力していきたい。</li> <li>・10月、11月に開催した学際において、計2市1町の地域が出席し、特産品の販売や地域のPRを行った。このことにより、学生や大学周辺の方々の地域に対する理解を深めることができた。また、大学職員や学生と協働することにより、今後の特産品開発をはじめとするお互いに協力が必要な事業へ向けより関係が深まった。</li> <li>・各地域において、生活習慣病予防の対策や食育等に関する講座を開催した。(計13回、参加者計728名)また、長与町において、7月20日に女性のキャリア支援等に関する講座を開催した。(参加者33名)このことにより、大学が持つ知識を地域社会に還元することができた。今後も地域の要望による講座等を引き続き開催していく。</li> <li>・学生のフィールドワークの成果で地域の課題解決等に活用できるものについて、フィールドワーク後も継続して、龍島の4島(福江島、善岐島、宇久島、的山大島)の方と学生を含めてディスカッションを行った。また、12月の全体発表会終了後に実施したアンケートでは、「報告内容は地域の課題解決の参考になりましたか?」の質問に対しては、回答者の7割以上から「参考になった」と回答が得られた。さらに、自治体や地域住民等と意見交換も実施した。(参加者:発表会場 大学2会場/112名、龍島漁業会館 8会場/74名)このように、意見交換会等を開催し、地域からの意見や要望を把握することにより、地域の課題に対応した事業展開が可能となった。さらに、各地域が抱える課題やその解決策について、地域間で情報共有を行うことができた。また、学生のフィールドワークの成果を実践に活用するために、学生としまの方を含めたディスカッションを継続して行い、意見や要望も取り入れた成果物が実際に活用できる見込みとなった。</li> </ul>	III	III	

項目	事業の目的・必要性		平成28年度事業実施計画の内容	自己評価		委員会 評価	備考
	平成25～29年度	平成28年度		計画の進捗状況、成果及び評価の判断理由	評価		
4. 全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>本学における事業の推進体制を整備し、地域との連携やグローバル人材育成のためのカリキュラム改革を実施することにより、地域を志向する教育改革や学長をトップとするガバナンス改革を推進することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学部学科再編や学校教育法改正の機会を捉えた学長をトップとするガバナンス体制をより充実させる。</li> <li>補助期間終了後の事業継続体制の構築を検討する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>COCプロジェクト推進本部(学長を中心とした学内意思決定機関)の開催。学内における本事業の進捗や各取組の報告をうけ、改修点等の検証や重要事項の決定を行う。</li> <li>COCプロジェクト連絡会議(大学と各自治体との連絡調整機能)の開催。地域との取組事例を定期的に報告し、広く周知を図るとともに、地域の要望等を聞き取り、連携の展開に関して検討を進める。</li> <li>COCプロジェクト評価委員会(事業内容の評価・提言の機能)の開催。地域との取組内容や教育改革の進捗状況等について審査を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成28年度は、COCプロジェクト推進本部を3回開催し、重要事項の決定や各取組からの事業報告による情報の共有を行った。COCプロジェクト推進本部については、学長を中心とし、副学長、学部長、事務局長、学内関係委員会委員長を委員とすることで、トップダウン型の迅速な意思決定が可能となった。また、学部、学内委員会への伝達もスムーズになり、より事業効果を高めることができた。</li> <li>・7月と2月にCOCプロジェクト連絡会議を開催した。COC事業における地域からの要望や意見の取組、大学側から地域へ依頼等を行った。情報を常に共有し事業を円滑に進めるためのコミュニケーションづくりの場として重要な会議となっている。COCプロジェクト連絡会議を設置することで、地域が持つ課題や要望等をすみやかに取り入れ、また、地域より適切な活動場所の提供やアドバイスを受けることが可能となった。学生のフィールドワークにおける活動への理解や地域課題の設定に関する相互理解が深まることにより、地域を志向する様々な取り組みを円滑に進めることができた。</li> <li>・平成27年度分のCOC事業における事業評価報告書を作成し、評価委員会の開催に向け準備を行った結果、5/12の開催となった。過半数の外部委員からなる評価委員会を設置することで、事業の進捗の透明性が担保され、より効果の高い事業の検討・実施が可能となる。昨年の評価委員会からの評価やご意見については平成28年度評価を受ける際に生かしていく。</li> </ul>	III	III	

## 平成26年度～平成30年度

	開催日
平成26年度	平成26年 4月25日(金)
平成27年度	平成27年 6月 4日(木)
平成28年度	平成28年 5月12日(木)
平成29年度	平成29年 6月28日(水)
平成30年度	平成30年 4月末開催予定

※平成26年度～平成28年度の内容は各年度の年間活動報告書参照

～過去の評価委員会の様子～



## 4 各種取組

### (1) 地域志向の教育

地域志向の教育に関する部会では、「しまなび」プログラムを担当した。

#### 平成 29 年度

##### <「しまなび」プログラム>

- 学部 2 年生（国際社会学部のみ 1 年生）を対象に実施  
フィールドワーク一覧・・・・・・・・資料 1 (P27)

##### <学内発表会>・・・・・・・・資料 2 (P33)

- 佐世保校：平成 29 年 10 月 6 日（金）、13 日（金）
- シーボルト校：平成 29 年 10 月 9 日（月）

##### <シンポジウム>

- 「しまなび」プログラムの未来に向けて ー長崎のしまに学ぶー  
平成 29 年 11 月 23 日（木）開催・・・・・・・・資料 3 (P34)
- 「しまなび」プログラムの成果の活用について・・・・・・・・資料 4 (P42)

＜「しまなび」プログラム＞

※P87～P88 参照

「しまなび」プログラムは、講義科目「長崎のしまに学ぶ」と演習科目「しまのフィールドワーク」から成り立っている。

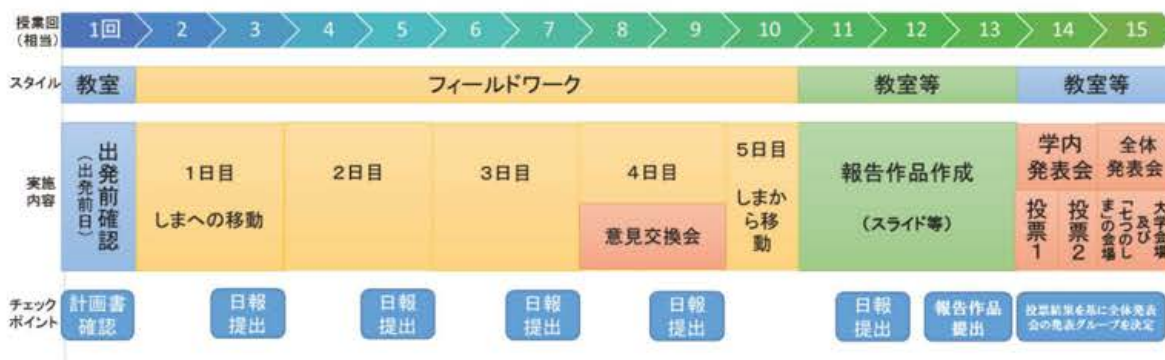
「しまなび」プログラム 年間スケジュール



講義科目「長崎のしまに学ぶ」



演習科目「しまのフィールドワーク」



## ・「長崎のしまに学ぶ」 第1回講義

平成 29 年 4 月 11 日からスタートし、中島特任教授が、プログラムの目的及び概要、今後のスケジュール等に関する説明を行い、本プログラムで活用するeラーニングシステム（manabie）の操作方法等についての説明を行った。



・「長崎のしまに学ぶ」 第2～8回講義

第2～4回講義では、県下の「しま」についての学習、過去の「しまなび」プログラムの報告作品の視聴等を行い、学生がフィールドワークを実施する「しま」を決定した。

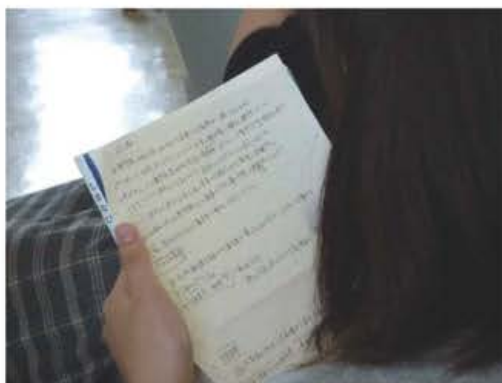
第5回講義では、「しま」ごとに分かれて、関係者から「しま」の現状について学び、第6～8回講義では、テーマについて意見交換、達成目標・達成方法の検討をグループごとに行った。





## ・「長崎のしまに学ぶ」 第9回講義 中間発表Ⅰ

第9回講義では、manabie で作成した基礎計画書の内容をグループごとに発表した。発表内容は、スクリーンに放映させ、視聴後に質疑応答も行った。



・「長崎のしまに学ぶ」 第10～14回講義

manabie で作成した基礎計画書を基に、計画をさらに具体的なものにするため、フィールドワークの目的や手段などの具体策を検討し、実施計画書を作成した。

また、フィールドワークの対象者や実施場所を確定させ、行程等全てにおいて行動が可能な最終計画書を作成した。



## ・「長崎のしまに学ぶ」 第15回講義 中間発表Ⅱ

中間発表Ⅰと同様に、最終計画書の内容について、パワーポイント等を使用し、各グループでプレゼンテーションを行った。

また、アンケートの方法や現地での移動手段、調査協力者等に対するアポイントなどの最終確認を行い、各グループのフィールドワークにおける最終計画書の作成が完了した。



## ・フィールドワーク一覧

資料 1

## 対馬市

	日程	テーマ	指導教員	学生数
1	8/29 ~ 9/2	島の伝統文化を継承しPRすることで沢山の人を呼び込む。	関谷 融	10名
2	8/29 ~ 9/2	漁業、遺産、食文化を体験した上でのPR	荻野 晃	11名
3	9/5 ~ 9/9	島の魅力を発見する。	松崎 なつめ	12名
4	8/22 ~ 8/26	郷土料理のPR	綱 辰幸	11名
5	8/22 ~ 8/26	体験型観光業	綱 辰幸	11名
6	9/12 ~ 9/15	SNSの利用を通して産業を盛り上げ、若者を呼び込む。	代田 義勝	11名
7	9/12 ~ 9/15	対馬の自然環境を観光資源として捉え、環境保全や新たなスポットの発見を通じて観光客増加を図る。	代田 義勝	11名
8	9/19 ~ 9/23	対馬の季節ごとに楽しめる伝統文化の魅力を伝えるとともに来島者数の増加	津久井 稲緒	11名
9	9/19 ~ 9/23	第1次産業の体験型観光を通じ、SNSで発信していく	津久井 稲緒	11名
			小計	99名



## 吉崎市

	日程	テーマ	指導教員	学生数
1	8/29 ~ 9/2	気軽に吉崎にいきたくなる観光ツアーの作成	松田 健	11名
2	8/29 ~ 9/2	観光客を増やす	下野 孝文	11名
3	9/19 ~ 9/23	SNSで食文化や観光地についてアピールする。	稲垣 佳映	11名
4	8/22 ~ 8/26	吉崎を一つの教育材料にする	鳥丸 聡	11名
5	8/22 ~ 8/26	略奪産業	鳥丸 聡	10名
6	9/5 ~ 9/9	長く滞在してもらおう新しい観光プランを考えることで、消費額を増やし、吉崎の観光消費額と観光客増加の一助とする	尹 清洙	10名
7	9/5 ~ 9/9	ツアー開発 吉崎の店舗で使えるフリーパスの作成	尹 清洙	10名
8	9/12 ~ 9/15	魅力を生かした商品開発	長濱 幸一	9名
9	9/12 ~ 9/15	修学旅行のプラン作り。	長濱 幸一	9名
10	9/12 ~ 9/15	(観光)産業を発展させ、雇用を創出し、人口の流出を止める。	谷澤 毅	8名
11	9/12 ~ 9/15	移住しやすい環境作り	谷澤 毅	10名
12	9/19 ~ 9/23	吉崎の活性化のため、観光客増加を目指し実体験を踏まえた上で交通に関する問題解決策を講じる。	奥山 忠裕	11名
13	9/19 ~ 9/23	ターゲット(年代、目的)を絞った情報発信をする。	奥山 忠裕	11名
			小計	132名



## 五島市

	日程	テーマ	指導教員	学生数
1	8/29 ~ 9/2	空き家等を宿泊施設として利用し、対象別に体験ツアーを提案する。	片山 徹也	11名
2	8/29 ~ 9/2	五島の体験事業の情報の充実・発信	大塚 一徳	11名
3	9/5 ~ 9/9	五島で行う婚活ツアー・ブライダルの提案	飛奈 卓郎	12名
4	9/12 ~ 9/15	名産品と観光ツアー	金村 公一	11名
5	9/12 ~ 9/15	移住希望者のためのツアーモデルコースの提案	吉田 恵理子	12名
6	8/22 ~ 8/26	五島で娯楽体験、第三次産業の活性化	石田 和彦	10名
7	8/22 ~ 8/26	五島をよく知るツアーの計画	石田 和彦	9名
8	8/29 ~ 9/2	環境	車 相龍	10名
9	8/29 ~ 9/2	現地の人達との交流を通して五島の伝統や文化を実際に体験する。そうして得た、例えば郷土料理などの情報をSNS等で世界に発信することにより五島の魅力を伝えてさらなる観光客の増加につなげていきたい。	車 相龍	10名
10	9/5 ~ 9/9	島留学でインターンシップや体験を通して五島の発信、PRする	石田 聖	9名
11	9/5 ~ 9/9	既存の観光ルートの改善、もしくは新たな観光ルートの提案等。また、それによる観光客数増加	石田 聖	8名
12	9/12 ~ 9/15	若者をターゲットとした、五島の魅力を舌で目で感じられる情報発信	鶴指 眞志	11名
13	9/12 ~ 9/15	アニメやマンガ、ドラマの聖地巡礼のツアー作り。	鶴指 眞志	11名
			小計	135名



## 新上五島町

	日程	テーマ	指導教員	学生数
1	8/29 ~ 9/2	しまのさるくコース作成	竹部 隆昌	11名
2	8/29 ~ 9/2	若者向けの旅の提案	立石 憲彦	12名
3	9/19 ~ 9/23	新上五島の文化を活かした観光プランを提案しよう！	久木野 憲司	11名
4	8/22 ~ 8/26	島内の若者を中心に聞き取り調査をし、島に必要としているものを知る。 調査を通して、減少の原因を知る。 私たちが作った提案書を市役所の方にプレゼンする 島民の気持ちを知るために島の若者がしていることを体験してみる。	田村 善弘	11名
5	8/22 ~ 8/26	新上五島にある郷土の魅力を発見し、郷土料理をつくって味わえる等の「体験型プログラム」を作成・提案。島外の人へPRし、来島者数を増加させる。	田村 善弘	9名
6	9/5 ~ 9/9	写真スポットの作成の提案をし、そこからしまの活性化の一役を担う。	有馬 弥重	10名
7	9/5 ~ 9/9	若者をターゲットにした『体験型』ツアー	有馬 弥重	10名
8	9/5 ~ 9/9	新上五島の文化の保存と教会の活用・発展	中村 貴治	11名
9	9/5 ~ 9/9	特産品のPRで新上五島町の活性化	中村 貴治	10名
10	9/12 ~ 9/15	星空観察、景色(海、山)	四本 雅人	11名
11	9/12 ~ 9/15	サイクリングを軸とした食べ物、写真スポット、教会、お寺などを加えたコース分けしたマップをつくる。	四本 雅人	9名
			小計	115名



(小値賀町)

## 小値賀町

	日程	テーマ	指導教員	学生数
1	9/5 ~ 9/9	テーマ①観光の実態調査 テーマ②島内での食文化、食生活の調査 テーマ③情報や物資の遅延調査	金谷 一朗	11名
2	9/19 ~ 9/23	小値賀をNo.1の島に -どうしたら小値賀にたくさんの方が訪れ、満足してもらえるか-	古場 一哲	12名
3	8/22 ~ 8/26	漁業体験を通して郷土料理を作るワークショップ 観光客に聞いた実際の観光プランの調査、発信 移住者に実際の日常生活の調査、発信	宮崎 明人	9名
4	8/22 ~ 8/26	不足している交通の便を補い、地元の人にも観光客にも活用しやすく、環境にも優しい新たな交通手段を提案する。	宮崎 明人	9名
5	8/29 ~ 9/2	景観の保持、ごみ問題の解消、対策の提案 (日常のごみ問題・漂着ごみ問題)	黒木 誉之	9名
6	8/29 ~ 9/2	島の魅力を動画におさめ、多くの人に情報発信する。	黒木 誉之	9名
			小計	59名

## 宇久町

	日程	テーマ	指導教員	学生数
1	8/29 ~ 9/2	宇久の写真集を作ろう	吉光 正絵	12名
2	9/5 ~ 9/9	宇久島の知名度アップ	青木 研	11名
3	9/12 ~ 9/15	観光客を呼び込むための取り組み	穴田 啓晃	11名
4	9/12 ~ 9/15	「宇久島を『郷土』という観点からPRする」	富永 美穂子	12名
5	8/22 ~ 8/26	宇久の森林や海を活用した観光産業をつくる。	大田 謙一郎	10名
6	8/22 ~ 8/26	宇久島の特産品や観光をPRして島の知名度をあげる。	大田 謙一郎	9名
7	8/29 ~ 9/2	宇久の環境の良さをPRする。	馬場 晋一	9名
8	8/29 ~ 9/2	魚の商品開発で宇久のPR	馬場 晋一	10名
			小計	84名



的山大島

	日程	テーマ	指導教員	学生数
1	8/29 ~ 9/2	的山大島の魅力発見と発信	和田 一哉	12名
2	8/29 ~ 9/2	魅力を見つけ、発信する	有田 大作	12名
3	8/22 ~ 8/26	私たちのグループは「産業」という領域であるため、産業の視点から大島の魅力発信、そして産業が継続できる環境を作れるようにすることが私たちのテーマである。	青木 圭介	10名
4	8/22 ~ 8/26	イベントを通して、島にいる人たちが住み続けたいと思えるような島作りや、島内外に住む人々が参加したいと思うようなイベントを提案し実行したい。	青木 圭介	10名
5	9/12 ~ 9/15	伝統行事、自然	橋本 優花里	10名
6	9/12 ~ 9/15	SNS・ネットメディアを活かした観光、漁業と農業の推進→改善	橋本 優花里	9名
7	9/19 ~ 9/23	イベントを通して的山大島と平戸市との交流を深める。	鴻上 喜芳	10名
8	9/19 ~ 9/23	島民の幸福度をたかめる	鴻上 喜芳	10名
			小計	83名

合計(68グループ)	707名
------------	------



(宇久町)



## ・学内発表会

資料2

開催日：佐世保校 平成29年10月6日（金）、13日（金）  
シーボルト校 平成29年10月9日（月）

中島特任教授の挨拶に続き、今年度実施した「しまなび」プログラムについて、全グループが現地での調査結果や研究成果について報告を行った。



## ＜シンポジウム＞

資料3

### ・「しまなび」プログラムの未来に向けて ー長崎のしまに学ぶー

開催日：平成29年11月23日（木）13時00分～17時10分

場 所：(大学会場) 佐世保校：新館講義棟 3階 506 教室  
 シーボルト校：中央棟 1階 M103 講義室  
 (「しま」会場) 対馬：対馬市交流センター 3階 1～3 会議室  
 壱岐：壱岐の島ホール 大会議室  
 五島：五島市役所 3階第1 会議室  
 新上五島：新上五島町役場 3階F 会議室  
 小値賀：小値賀町役場 3階 会議室  
 宇久：宇久地区公民館 大会議室  
 的山大島：大島支所 2階大島村公民館 会議室

参加者：688名（COCプロジェクト評価委員会委員、大学生、高校生、行政関係、一般、本学教職員）

## 【次 第】

1. 開会のあいさつ／太田博道学長
2. 来賓代表あいさつ  
平野博紀氏（文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室長）
3. 主旨説明
4. 「しまなび」プログラムに参加して自分がどのように変わったか  
ー経験した学生が語る成果と課題についてー（※1）
5. 今年度の「しまなび」活動報告（※2）  
佐世保校6グループ、シーボルト校4グループによる報告
6. 「しまなび」プログラムの未来に向けて
7. 表彰式・閉会のあいさつ／太田博道学長

（※1）一経験した学生が語る成果と課題について一

【佐世保校】

- 地域政策学科 4年 國分 大樹（平成 27 年度しまなび参加） 壱岐市 PR ポスター
- 地域政策学科 3年 増田 千春（平成 28 年度しまなび参加） 大島カルタ
- 経済学科 3年 堀 拓真（平成 28 年度しまなび参加） 壱岐カツサンド

【シーボルト校】

- 国際社会学科 2年 岡本 裕里子（平成 28 年度しまなび参加） かんころ餅パッケージ
- 国際社会学科 2年 宮崎 香帆（平成 28 年度しまなび参加）  
学生団体値賀女（ちかじょ）」の立ち上げ
- 国際社会学科 2年 岸川 葵（平成 28 年度しまなび参加）  
学生団体値賀女（ちかじょ）」の立ち上げ

（※2）今年度の「しまなび」活動報告

- 1 大学生インターンシッププロジェクト（五島 15）
- 2 Let's go to 新上五島  
～大学生が作るサイクリングマップ～（新上五島 18）
- 3 小値賀革命  
～小値賀観光革命と小値賀空き家革命～（小値賀 13）
- 4 UKU はじめてのふおとぶっく（宇久 1）
- 5 レジャーで知ろう！的山大島のトレジャー（大島 1）
- 6 宇久のいいところ便りお届けします。（宇久 3）
- 7 Ah! 山 Oh! 島  
～そそり立つ絶壁 そそられる大島 そそがれた愛情～（大島 2）
- 8 修学旅行で集客 UP!!  
～壱岐の魅力発見隊～（壱岐 16）
- 9 #つしまみれ（対馬 13）
- 10 宇久の自然を生かした取り組み（宇久 13）

●シンポジウムの様子



文部科学省大学改革推進室 平野室長



佐世保校会場



シーボルト校会場



佐世保校～経験した学生～



シーボルト校～経験した学生～



対馬会場



壱岐会場



五島会場



新上五島会場



小値賀会場



宇久会場



大島会場



学長賞授与（佐世保校）



学長賞授与（シーボルト校）



佐世保校会場から見える各会場の様子



各会場の様子

文部科学省 地(知)の拠点大学による地方創生推進事業  
COC事業総括シンポジウム

文部科学省  
地(知)の拠点

# 「しまなび」プログラムの未来に向けて —長崎のしまに学ぶ—

「しまなび」プログラムとは、長崎県の「しま」(対馬、壱岐、五島、新上五島、小値賀、宇久、的山大島)を佐世保校、シーボルト校に次ぐ第3のキャンパスとして位置づけ、学生が「しま」に飛び込み、「しま」の自然・歴史・人々との触れ合いを通じて、「しま」の魅力や課題解決策を「しま」の人々と考えるとともに、社会人基礎力を涵養することを目的とした教育プログラムです。

**開催日時**

平成29年

**11月23日(木・祝)**

13:00~17:10 受付12:20~

**入場無料**

**要申込**

**開催場所**

**(大学会場)**

佐世保校:新館講義棟3階506教室  
シーボルト校:中央棟1階M103講義室

**(「しま」会場)**

対馬:対馬市交流センター 3階1~3会議室  
壱岐:壱岐の島ホール 大会議室  
五島:五島市役所 3階第1会議室  
新上五島:新上五島町役場 3階F会議室  
小値賀:小値賀町役場 3階会議室  
宇久:宇久地区公民館 大会議室  
的山大島:平戸市大島支所  
2階大島村公民館会議室

大学会場と「しま」会場は、双方向対話が可能  
テレビ授業システムにより回線を繋ぎます。



しまの商店街での焼き取り調査



海女さんへのインタビュー



外国人観光客に対してアンケート



カフェ(ソトノマ)での取材



木工組江(三兄弟工房)での撮影



小学生とカルタ作成



行政との意見交換



博覧館内での調査結果のまとめ

主催:長崎県立大学  
後援:長崎県・佐世保市・平戸市・対馬市・壱岐市・五島市・小値賀町・新上五島町

〈ウラ〉

**次第**

13:00~	開会のあいさつ／太田博道学長
13:10~	来賓代表あいさつ／平野博紀氏 (文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室長)
13:20~	主旨説明
13:25~	「しまなび」プログラムに参加して自分がどのように変わったか ～経験した学生が語る成果と課題について～
13:55~	今年度の「しまなび」活動報告
16:25~	「しまなび」プログラムの未来に向けて (進行：長崎県立大学地域連携センター 中島洋特任教授)
16:55~	表彰式・閉会のあいさつ／太田博道学長

**申込み方法** 締切：平成29年11月17日(金)

- ホームページ・・・専用のページからお申込みください。  
[http://sun.ac.jp/coc/symposium\\_entry/](http://sun.ac.jp/coc/symposium_entry/)
- 電話・・・下記フォームの項目について電話にてお伝えください。  
0956-47-5856
- FAX・・・下記フォームにご記入の上、送信をお願いします。  
0956-47-8047



上のQRコードよりスマートフォンからお申込みできます。

フリガナ 氏名	所属(任意)	TEL又はEメール	希望会場

- ※定員になり次第締め切らせていただきます。
- ※個人情報、本事業以外に使用いたしません。
- ※上記次第については予定であり、変更の可能性があることをご容赦ください。

**【お問い合わせ】**

長崎県立大学 佐世保校 企画広報課 企画広報グループ  
〒858-8580 佐世保市川下町123  
TEL：0956-47-5856 FAX：0956-47-8047  
E-mail：kikaku@sun.ac.jp





## 〔意見交換会及び現地会場アンケートでの主な意見〕

## ①フィールドワークに対する評価

- ・観光面における学生による意見・提案はITを活用することによるものが多くあった。離島の生活、移住者の声、住民と移住者との関係、改善など生活に基づいたものの違い、課題、特性についての分析も必要かと思う。
- ・結果的に外の人間からの視点・観点が大きな割合で入りこんでしまっていると感じる。活動や考えとして、それ自体は良いと思うので、内からの視点（住民自治や地域経営など）であったり、様々な面から多角的にみられればよいと思う。
- ・単発的な提案もアイデアの豊かさという面ではよいが、継続的な提案があってもいいのではないと思う。事前の調査が不十分であるように思う。来てからではなく来る前にどれだけ調べているかで、島にきてからの時間の費やし方が違ってくる。
- ・地域課題解決や人間形成を育む能力が、この事業を通して得られていると思う。
- ・長崎県立大学に合格できたら、地域の現状を知り長崎に貢献できる力をしまなびプログラムで身に付けていきたい。

## ②学生発表に対する評価

- ・提案だけで終わらずに、それをどうやったら実行できるかまで考えて活動してほしい。または、まずはしっかりどっぷり「体験する」ことを重視し、その中での気づき・感想をしっかりまとめ、自分はその体験をどう活かすのかを考える発表にしてほしい。
- ・学生の発表は、各しま一つずつぐらいでよい。
- ・パワーポイントのスライドショーで見切れる場面もあったので、事前のチェックを細かく行うことで、より発表がよいものになるのではないかと思う。
- ・話し方がとても上手で、高校生の私と大きな差があるなと思った。また、私も先輩方のようになりたいと感じ、より一層長崎県立大学の学生になりたいと強く感じた。

## ③フィールドワークに望むこと

- ・企画提案に留まらず、財源確保や企画実践などトライしながら、内容の充実を図っていただきたい。
- ・学生が学び感じた点はとてもよいプログラムだと思うが、学生のジレンマを解決するためにも、またフィールド側へのメリットのためにもフィールドでの成果（数値化できるもの）がほしい。
- ・短期間ではあるが、一定の成果をまとめることが必要となるので、よく頑張っていると感じた。提案いただいた内容を継続的に事業展開できるような仕組みがあればと感じた。

- ほとんどが観光向けの発表だが、もっと農業・漁業を見学・体験などをして新しい企業おこしのヒントになるような提案が欲しいと思う。

#### ④今後の改善要望

- 大学生として求められる社会調査のレベルを確保するため、事前学習の中で調査手法等を習得してほしい。
- 早い段階からの学生とコーディネーター・アドバイザー（自治体職員・地元住民等）との連携が望ましいと思う。その為には FW 前だけの連絡だけでは足りないので、できるだけ早く FW のテーマを決定することが必要になってくるのではないか。
- 事前の研修を深め、より一層活動内容を深めて、実践実行いただければと思う。
- 今年同じ繰り返しにならないように、各島の報告をベースにして、次にどのような内容について、問題解決に一步踏み込んだ取組みとしてどのように展開していくのかを明確にしたうえで取り組んでいてもらいたい。

#### ⑤その他

- 学生の自主的かつ自由な発想が重要であると思う。そのような中、地域の関与、支援のあり方が密接すぎず離れすぎずが難しいさじ加減と思う。
- 調査・発表・提供で終わらず、卒業後も何かの形で「しま」のことを考えていただければいいと思う。
- 学習とは授かるだけではなく、自ら進んで学んで作り上げることも必要。人とコミュニケーションをとることで、人間は成長していく。このような学習は人材育成のためにとっても重要。学生だけでなく島の人も同じく成長していく。これからも継続をお願いしたい。
- 多元中継が可能など、本県の特性を考えた場合、大きな可能性を感じる。

・「しまなび」プログラムの成果の活用について

資料 4

1 目的

「しまなび」プログラムにおいて学生が提案したもので、「しま」での活用が期待できるものについて「しま」の関係者と協議し活用策を考える。

2 協議概要

①小値賀町（小値賀島民と作った ojika map. おぢかまっぷ）

※平成 28 年度「しまなび」実施

【協議月日】 平成 29 年 7 月 21 日（金）～23 日（日）

平成 29 年 10 月 12 日（木）～16 日（月）

【協議者】 本学学生（5 名）、県立北松西高校生 1・2 年生（12 名）

【製作部数】 約 1,000 部

【配布先】 県内大学

【設置場所】 九州商船ターミナルカウンター、フェリー船内



## ②平戸市的山大島（「和服で島内の散策」の提案）

【協議月日】 平成 30 年 1 月 13 日（土）～14 日（日）

【協議者】 本学学生（2 名）、大島まちづくり協議会



## ③宇久町（カレンダー作成）

【協議月日】 平成 29 年 10 月 27 日（金）～28 日（土）

【協議者】 本学学生、宇久町観光協会

【製作部数】 400 部

【配布先】 宇久町島内、宇久町観光協会との関係機関等



④宇久町（観光写真集の作成、観光パンフレットの提案）

- 【協議月日】 平成30年1月13日（金）～14日（日）
- 【協議者】 本学学生、宇久町観光協会
- 【製作予定部数】 300部
- 【完成予定日】 平成30年3月末
- 【配布先】 宇久町島内、宇久町観光協会との関係機関等

⑤平戸市的山大島（映画祭の開催）

- 【協議月日】 平成30年3月30日（金）～31日（土）
- 【協議者】 本学学生、大島まちづくり協議会
- 【今後の予定】 平成30年3月 開催に向けて準備

⑥新上五島町（サイクリングマップの作成）

- 【協議月日】 平成30年1月12日（金）～13日（土）
- 【協議者】 本学学生、新上五島町役場関係者



### 3 その他

- ①吉崎市（吉崎カツサンドの実現化） ※平成 28 年度「しまなび」実施  
 栄養健康学科とのコラボで、「吉崎産品を用いた商品による地域活性化プロジェクト」として、本学のやるばいプロジェクトに採択された。

【日程】平成 29 年 10 月 14 日（土）～15 日（日）

【場所】長崎夢彩都 1 日限定 20 食を用意して、実験販売を行い、40 食すべてを完売。

※平成 30 年 3 月 21 日（水）大阪にて試験販売予定



- ②小値賀町（農業体験ツアーのプランの提案） ※平成 28 年度「しまなび」実施  
 平成 29 年度実施に向けて、学生団体「値賀女（ちかじょ）」の立ち上げ、学生が計画案を作成（農業体験を主としたボランティア）

【日程】平成 29 年 9 月 24 日（日）～27 日（水）

【場所】小値賀町 農業体験ボランティア（にんにくの定植作業）を実施

※平成 30 年 3 月 再度、現地での体験を予定



- ③五島市（島内でのインターンシップの提案）

【日程】平成 30 年 1 月

【場所】五島市 現地との意見交換

平成25年度～平成29年度

	名称	対象学生	参加人数	学内発表会	全体報告会	成果の活用
平成25年度	「しま体験教育プログラム」	-	-	-	・キックオフシンポジウム(12/22開催 新上五島町)	-
平成26年度	「しま体験教育プログラム」	試行	271名	-	・対馬市(12/6) 五島市(1/24) 杵岐市(1/25) にて報告会開催	-
平成27年度	「しまなび」プログラム	経済学部2年生 国際情報学部1年生	56グループ 602名	経済学部(10/23) 国際情報学部(10/27)	・しまの報告会(12/19開催)	・五島市 ブックレット協議 ・杵岐市 ポスター協議 ・小値賀町 リーフレット協議
平成28年度	「しまなび」プログラム	経済学部2年生 国際社会学部1年生	48グループ 530名	経済学部(10/14、 10/28) 国際社会学部(10/4)	・しまの報告会(12/27開催) ・COC 中間評価	・五島市 かんころ餅パッケージ協議、販売 ・宇久町 観光パンフレットの作業の参加等 ・小値賀町 協議、学生団体「値賀女(ちかじょ)」の立上げ ・的山大島 お弁当包み紙の提供 ・杵岐市 ポスター贈呈式 杵岐カツサンドの実現化 ・五島市 ブックレット贈呈式
平成29年度	「しまなび」プログラム	学部2年生 (国際社会学部のみ 1年生)	68グループ 707名	佐世保校 (10/6、10/13) シーボルト校 (10/9)	・COC事業総括シンポジウム(11/23開催)	・小値賀町 ojika map おちかマップの作成 農業体験ボランティア ・宇久町 カレンダーの作成 観光写真集の作成 観光パンフレットの提案 ・的山大島 「和服で島内の散策」を提案 映画祭の開催 ・新上五島町 サイクリングマップの作成 ・杵岐市 杵岐カツサンドの実現化 ・五島市 島内でのインターンシップの提案

※平成25年度～平成28年度の内容は各年度の年間活動報告書参照

## (2) 地域志向の研究

※P89～P92 参照

### 平成29年度

地域志向の研究に関する部会では、学長裁量教育研究費について、応募要領を策定し、平成29年3月24日（新規教員：4月1日）付けで全教員に対し募集を行った。

- ・募集期限 平成29年4月21日（金）～28日（金）
- ・審査会開催 平成29年5月30日（火）～6月8日（木）
- ・審査結果通知 平成29年6月29日（木）

その結果、申請件数29件のうち22件を採択し、平成29年6月29日付けで関係する教員に対し通知を行った。

※採択した22件の一覧は、次ページ別表のとおり

### 平成25年度～平成29年度

	費目	申請件数	採択件数
平成25年度	地域志向教育研究費	4件	3件
平成26年度	地域志向教育研究費	11件	5件
平成27年度	地域志向教育研究費	8件	7件
平成28年度	学長裁量教育研究費	15件	14件
平成29年度	学長裁量教育研究費	29件	22件

※平成25年度～平成28年度の内容は各年度の年間活動報告書参照



(平成 29 年度 学長裁量教育研究費 研究課題一覧)

研究領域		代表者		研究課題
		所属	氏名	
「離島」に関する研究	共同	情報システム	金谷一朗	離島の世界遺産における「祈り」のデジタルアーカイブ
	個人	地域創造	松尾晋一	離島探検の基礎的研究
		地域創造	田村善弘	離島地域におけるエシカル消費に関する研究
「長崎の地域課題」に関する研究	共同	経営	宮地晃輔	地域中小企業の経営計画・管理会計システムの活用実態解明と経営改善への接続に関する研究－長崎県中小企業の競争力向上への貢献－
		看護栄養	片穂野邦子	分子標的薬治療に伴う有害事象が生じた肺がん患者の生活体験
		看護栄養	木村チツル	新総合事業移行による地域包括ケアシステム構築に関する研究
		看護栄養	久佐賀眞理	行政におけるひきこもりの包括的支援体制構築に関する研究（長与町との連携事業申請）
		看護栄養	堂下陽子	精神障害をもちながら子育てをする利用者に対する訪問看護師の支援体制の構築
		看護栄養	平野かよ子	長崎県下の市町村合併後の保健師の活動体制のあり方に関する研究 その3：壱岐市
	個人	地域創造	石田聖	長崎県における主権者教育定着に向けた基礎的研究
		地域創造	奥山忠裕	地方部における労働需要・供給調査に基づく需要ギャップ解消施策に関する研究
		地域創造	黒木誉之	市民自治・市民協働と地域ガバナンス－災害対応を中心として－
		地域創造	鶴指眞志	長崎県における地域公共交通に関する研究
		地域創造	鳥丸聡	長崎県北地域における新規事業のフォローアップと課題発掘
		国際社会	森田均	地域社会における高度交通システム構築からメディア論へ新たな研究手法をもたらす試み
		看護栄養	大塚一徳	地域での認知症への理解を深めるための普及・啓発講座におけるワーキングメモリの査定が高齢者の記憶の自己効力感に及ぼす影響
		看護栄養	高崎亜沙奈	特定行為看護実践に関する看護師の認識－地域医療に焦点を当てて－
		看護栄養	高比良祥子	肝疾患看護に携わる外来看護師のケアの臨床知に関する研究
		看護栄養	竹内昌平	インフルエンザの感染症週報データのさらなる活用を目指した研究
		看護栄養	竹口和江	企業外労働衛生機関の保健師の保健活動に関する研究
		看護栄養	中村鈴子	島における保育所（園）における感染予防対策に関する健康教育の効果
		看護栄養	田中一成	長崎県産農産物の機能性解明に関する研究

### (3) 地域との連携

地域との連携に関する部会では、本学と地域の連携協定等に基づき、地域との連携事業や生涯学習などを通じた社会貢献を行った。

<しまにおけるコーディネーター>・・・・・・・・・・資料 1 (P50)

<サテライトキャンパス・大学の情報発信>・・・・・・・・・・資料 2 (P53)

<地域との連携事業>

・共同研究、受託研究、連携事業の実施・・・・・・・・・・資料 3 (P54)

<公開講座・地域公開講座等の開催>

・公開講座の開催・・・・・・・・・・資料 4 (P55)

・地域公開講座の開催・・・・・・・・・・資料 5 (P56)

・女性のキャリア支援等に関する講座・・・・・・・・・・資料 6 (P58)

<研究成果の還元>

・平成 28 年度地域志向教育研究における報告書の作成・・・資料 7 (P59)

<特産品等のアピール>

・学園祭への出店・・・・・・・・・・資料 8 (P60)

<特産品の共同開発>・・・・・・・・・・資料 9 (P62)

<各機関との連携協定>・・・・・・・・・・資料 10 (P63)

<COC 連絡会議の開催>

・7/25 第 1 回 COC 連絡会議開催

・2/7 第 2 回 COC 連絡会議開催

## ＜しまにおけるコーディネーター＞

資料 1

※P93～P94 参照

「しまなび」プログラムに基づく科目の履行に際して、学生の活動を支援し充実を図るために、平成27年度より設置した。平成28年度については、フィールドワーク実施グループ数の増加が予測されるため、コーディネーター設置箇所にも宇久町を追加し、さらに今年度については、平戸市（大島村）を追加した。

### （1）委嘱期間

2年間

### （2）コーディネーター

地区	氏名	職歴等
対馬	川口 幹子	（現）一般社団法人MIT職員
五島	橋口 明敏	（元）五島市役所職員
壱岐	原田 登志子	（元）壱岐市役所職員
新上五島	明石 仁	（元）新上五島町立上五島中学校校長
宇久 （平成28年度より）	柄本 富美雄	（元）佐世保市宇久行政センター職員
小値賀	中尾 敏昭	（元）小値賀町雇用創造協議会事業推進員
的山大島 （平成29年度より）	小川 健太	（現）平戸市地域おこし協力隊

## (3) 打ち合わせ会

平成29年度

- 第1回 平成29年5月16日(火)～17日(水)
  - ① 本年度の「しまなび」プログラムの概要説明
  - ② 本年度の実施に関するコーディネーターへの要望事項説明
  - ③ manabieの操作法の演習
  - ④ 意見交換
  - ⑤ 今後の予定の確認



- 第2回 平成30年2月22日(木) 11:45～14:00
  - ① 本年度の「しまなび」プログラムの概要説明
  - ② 本年度のmanabieに対する改善点
  - ③ コーディネーターからの要望聴取
  - ④ 来年度の「しまなび」プログラムの概要説明
  - ⑤ 意見交換
  - ⑥ 今後の予定の確認



平成27年度～平成29年度

	開催日	
平成27年度	第1回 第2回	平成28年 1月12日(火) 平成28年 3月28日(月)
平成28年度	第1回 第2回	平成28年 5月17日(火)～18日(水) 平成28年11月22日(火)
平成29年度	第1回 第2回	平成29年 5月16日(火)～17日(水) 平成30年 2月22日(木)

※平成27年度～平成28年度の内容は各年度の年間活動報告書参照

～過去の打ち合わせ会～



## ＜サテライトキャンパス・大学の情報発信＞

資料2

### ・サテライトキャンパスの設置について

フィールドワーク期間中における学生の活動拠点や教職員の待機場所としてサテライトキャンパスを設置した。

地区	サテライトキャンパス	現地での意見交換会会場
対馬	対馬市役所1階会議室	対馬市役所1～2階会議室
壱岐	壱岐市文化ホール 石田農村環境改善センター	壱岐市文化ホール 石田農村環境改善センター
五島	旧バラモンネット館	旧バラモンネット館
新上五島	有川総合文化センター	有川総合文化センター
小値賀	離島開発総合センター娯楽室	離島開発総合センター娯楽室
宇久	宇久行政センター	宇久行政センター
的山大島	大島村公民館会議室	大島村公民館会議室

### ・大学の情報発信について

各地区の学生が集まる場所等に、大学案内、各種広報誌等を収納したパンフレットスタンドを設置し、本学の情報を容易に入手できる環境を整備した。

地区	場所
対馬	対馬市交流センター
壱岐	壱岐市役所、壱岐文化ホール
五島	五島市役所、バラモンネット館
新上五島町	有川総合文化センター
小値賀町	小値賀町役場

## ＜地域との連携事業＞

資料3

## ・佐世保市

学科	担当教員	事業名
経営学科	大田 謙一郎	長崎県立大学との連携による1億農産物振興事業に係る共同研究（※①）
経営学科	宮地 晃輔	佐世保工業会との連携による人材育成事業の構築に係る共同研究（※①）
実践経済学科	烏丸 聡	平成29年度次世代創業者育成プログラムの共同研究（※①）

## ・平戸市

学科	担当教員	事業名
経営学科	津久井 稲緒	平戸式生活モデル調査研究（※②）
—	—	平戸観光応援隊設置事業

## ・長与町

学科	担当教員	事業名
看護学科	中尾 八重子 山澄 直美	健康ポイント制事業推進にかかる助言
—	—	英語による長与町国際コミュニケーション活動（通称：NICE）
看護学科	久佐賀 眞理	心にタッチ！（ひきこもりや自殺予防対策）
栄養健康学科	田中 一成	長崎県農産物・加工食品臨床試験コンソーシアム共同研究にかかる治験者募集
—	—	健康ながよ21推進専門委員会推進委員等募集

※①：共同研究

※②：受託研究

（※①、※②以外は連携事業）

## ＜公開講座・地域公開講座等の開催＞

資料 4

### ・公開講座の開催

日程 (土)	時間	開催場所	テーマ	学科	講師	佐世保校	シーボルト校	新上五島町	受講者計
4月	29日	13:30～ 14:30 【連携会場】 シーボルト校	ASEAN3か国の市場の現在（いま）を読み解く ～ベトナム、タイ、インドネシアの日系企業幹部のインタビュー調査を通して～	国際経営	江崎 康弘 教授	78名	39名	開講なし	117名
			グローバル化の中の人材育成		曹 鋒 毅 准教授	79名	34名	開講なし	113名
5月	13日	13:30～ 14:30 【連携会場】 佐世保校	農業を変える情報通信技術	情報システム	有田 大作 教授	53名	87名	開講なし	140名
			最先端IT技術が開く新しい文化の扉 ～エジプトのピラミッドから長崎の教会群まで～		金谷 一朗 教授	49名	77名	開講なし	126名
5月	20日	13:30～ 14:30 【連携会場】 佐世保校	C型慢性肝炎患者の語りから学ぶもの	看護	高比良 祥子 准教授	38名	65名	開講なし	103名
			自死遺族の語りから考える ～レジリエンスを促進するものとは～		濱田 由香里 講師	38名	68名	開講なし	106名
6月	3日	13:30～ 14:30 【連携会場】 佐世保校 新上五島町	やわらかい米食パンについて	栄養健康	樋口 才二 教授	45名	93名	3名	141名
			からだに必要なビタミンの働き		山口 純寛 助教	43名	91名	3名	137名
9月	23日	13:30～ 14:30 【連携会場】 シーボルト校 新上五島町	生活に役立つ心理学	公共政策	橋本 優花里 教授	82名	38名	5名	125名
			市民参加手法の最前線		石田 聖 講師	70名	23名	4名	97名
9月	30日	13:30～ 14:30 【連携会場】 佐世保校	インターネット被害未然防止講座	情報セキュリティ	C.ソムチャイ 教授	35名	48名	開講なし	83名
			歴史上の未解決言語と人工知能		山口 文彦 教授	30名	40名	開講なし	70名
10月	7日	13:30～ 14:30 【連携会場】 シーボルト校	長崎県経済の基幹産業「造船業」の今と未来	経営	宮地 晃輔 教授	59名	35名	開講なし	94名
			インフラ関連企業の高信頼性組織と安全文化 ～原子力発電所を事例に～		四本 雅人 准教授	44名	30名	開講なし	74名
10月	14日	13:30～ 14:30 【連携会場】 シーボルト校	地域資源としてのエネルギーの活用を考える	実践経済	芳賀 昌隆 講師	46名	32名	開講なし	78名
			地域交通を考える ～交通経済論の視点から～		鶴指 眞志 講師	40名	32名	開講なし	72名
11月	11日	13:30～ 14:30 【連携会場】 佐世保校	芥川龍之介から通話局件へ	国際社会	下野 孝文 教授	32名	68名	開講なし	100名
			FinTechで変わる?! ～お財布のヒモを誰が握るのか～		河又 貴洋 准教授	36名	53名	開講なし	89名

合計	897名	953名	15名
総計	1865名		



## ・地域公開講座の開催

資料5

各地域において、生活習慣病予防の対策や食育等に関する講座を開催した。

期日	場所	テーマ	講師	参加者
H29.4.29	五島市中央公園 市民体育館	歩健学のすすめ ～もっと楽しくなる ウォーキングの秘けつ～	西村 千尋 (公共政策学科教授)	28名
H29.5.19	新上五島町 石油備蓄記念会館	健やかに生きるための 食事学	武藤 慶子 (栄養健康学科教授)	137名
H29.5.29	佐世保市 相浦地区公民館	たのしいウォーキング講座	西村 千尋 (公共政策学科教授)	22名
H29.6.15	五島市上大津町 住民センター	健やかに生きるための 食事学	武藤 慶子 (栄養健康学科教授)	15名
H29.6.30	佐世保市 相浦地区公民館	歩健学のすすめⅡ ～もっと楽しくなる ウォーキングの秘けつ～	西村 千尋 (公共政策学科教授)	37名
H29.7.1	佐世保市 九十九地区公民館	健康で長生きするための 食生活	田中 一成 (栄養健康学科教授)	134名
H29.7.7	佐世保市 宇久地区公民館	歩健学のすすめ ～もっと楽しくなる ウォーキングの秘けつ～	西村 千尋 (公共政策学科教授)	53名
H29.7.7	佐世保市 江上地区公民館	食事による生活習慣病の 予防	田中 一成 (栄養健康学科教授)	143名
H29.7.31	佐世保市 日宇地区公民館	健康で長生きするための 食生活	田中 一成 (栄養健康学科教授)	85名
H29.8.25	平戸市中部公民館	がんを予防するための 食生活	田中 一成 (栄養健康学科教授)	103名
H29.9.20	平戸市田平町 中央公民館	健やかに生きるための 食事学	武藤 慶子 (栄養健康学科教授)	22名
H29.9.23	佐世保市 宇久地区公民館	歩健学のすすめ ～もっと楽しくなる ウォーキングの秘けつ～	西村 千尋 (公共政策学科教授)	8名
H29.10.20	佐世保市中央保健 福祉センター	子供の食生活の現状と 課題について	石見 百江 (栄養健康学科講師)	99名
H29.11.8	佐世保市針尾地区 公民館	がんを予防するための 食生活	田中 一成 (栄養健康学科教授)	41名
H29.11.15	長与町 働く婦人の家	健康づくりのための 運動とは	飛奈 卓郎 (栄養健康学科准教授)	19名

期日	場所	テーマ	講師	参加者
H29.11.18	佐世保市 宇久地区公民館	歩健学のすすめ ～もっと楽しくなる ウォーキングの秘けつ～	西村 千尋 (公共政策学科教授)	14名
H29.11.20	佐世保市 中央公民館	健康づくりのための 運動とは	飛奈 卓郎 (栄養健康学科准教授)	80名
H29.11.24	佐世保市 相浦地区公民館	健康で長生きするための 食生活	田中 一成 (栄養健康学科教授)	33名
H29.11.26	長与町 青葉台公民館	健康で長生きするための 食生活	田中 一成 (栄養健康学科教授)	36名
H29.12.17	佐世保市 宇久地区公民館	歩健学のすすめ ～もっと楽しくなる ウォーキングの秘けつ～	西村 千尋 (公共政策学科教授)	6名
H30.1.17	老人福祉センターやす らぎ荘(佐世保市)	健康づくりのための 運動とは	飛奈 卓郎 (栄養健康学科准教授)	19名
H30.2.7	未来創造館 COLAS 平戸	健康で長生きするための 食生活	田中 一成 (栄養健康学科教授)	17名
H30.3.10	佐世保市 宇久地区公民館	歩健学のすすめ ～もっと楽しくなる ウォーキングの秘けつ～	西村 千尋 (公共政策学科教授)	7名

【参加者計 1158名】

## ・女性のキャリア支援等に関する講座

資料6

日 時：平成29年9月25日（月）13：20～15：40

場 所：シーボルト校中央棟 M103 講義室

内 容：自己分析演習等を交えながら、仕事への取り組み方、自分の見つめ方、  
女性リーダーとしての目標設定などについて学ぶ。

テーマ：女性活躍推進セミナー「輝く女性のキャリアアップ術」  
～職場で個性を活かして充実した毎日を送る仕事術～

講 師：(株)B-GROOW 代表取締役 空 直美 氏

主 催：中小企業大学校直方校

参加者：約60名



## ＜研究成果の還元＞

資料 7

平成 28 年度における学長裁量教育研究費重点課題研究のうち、「離島」及び「長崎の地域課題」に関する平成 28 年度研究成果報告を取りまとめた冊子を作成し、県内各市町及び県関係機関に配布した。

	研究代表者		研究課題
	所属※	氏名	
離島	情報システム	金谷 一朗	バーチャル世界遺産の構築
	地域連携センター	中島 洋	「しまなび」プログラムにおけるコーディネーター（地域住民）を活用した学びの仕組みの開発
長崎の地域課題	看護栄養	平野 かよ子	長崎県下の市町村合併後の保健師の活動体制のあり方に関する研究
	地域創造	奥山 忠裕	地方創生事業を対象とした移住施策の有効性に関する研究
	看護栄養	田中 一成	長崎県産物を用いて製造した発酵茶の機能性表示食品としての届出への取り組み
	経営	三戸 浩	長崎県における地域資源活用のための経営者ならびに人材育成に関する研究
	国際社会	山田 健太郎	長崎市の観光に関連づけたプロジェクト型外国語学習の可能性と問題点
	情報システム	有田 大作	ブックマーク機能付き圃場ウォークスルーシステムの開発
	地域創造	鶴指 眞志	長崎県における地域公共交通に関する研究
	看護栄養	大塚 一徳	ワーキングメモリ機能の査定を取り入れた認知症への理解を深めるための認知症普及・啓発講座の教育システム設計・開発・運用
	経営	宮地 晃輔	佐世保市における「進化的海洋クラスター再構築」のための課題
	国際社会	松尾 晋一	島原本光寺常盤資料館と観光

※平成 28 年度当時の所属

## <特産品等のアピール>

資料 8

### ・学園祭への出店

日 時：平成 29 年 11 月 3 日（金）～11 月 4 日（土）

場 所：佐世保校 鷗祭

テーマ：「+One」（プラスワン）

日 時：平成 29 年 11 月 4 日（土）～11 月 5 日（日）

場 所：シーボルト校 SUNFESTA

テーマ：「PALETTE」

	市町	出店内容
佐世保校 鷗祭	平戸市	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平戸和牛串、ちゃんちゃん焼きの販売。</li> <li>・平戸観光応援隊の募集、平戸観光パンフレット配布。</li> </ul>
	新上五島町	<ul style="list-style-type: none"> <li>・五島手延うどん茶屋及びうどん（乾麺・関連商品等）販売。</li> </ul>
シーボルト校 SUN FESTA	五島市	<ul style="list-style-type: none"> <li>・五島牛カレーの販売。</li> <li>・かんころ餅や椿油など五島特産品の販売。</li> </ul>
	長与町	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長与で採れた果物のジャム、ドレッシング、クッキーなどの販売。</li> </ul>

〈鵬祭出店模様〉



〈SUNFESTA 出店模様〉

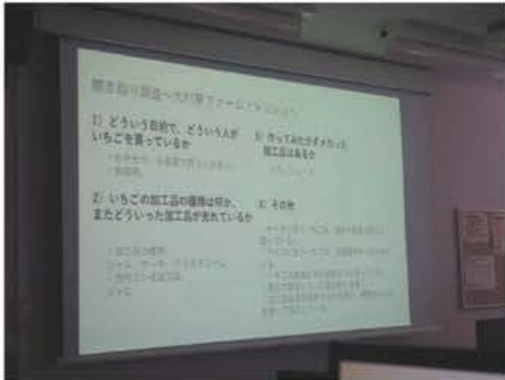


＜特産品の共同開発＞

資料9

佐世保市との連携による「1億農産物振興事業に係る共同研究—いちごの市場概況とそれを踏まえた提案—」について、関係機関との協議をおこない、聞き取りやアンケート調査を実施した。

また、研究結果の報告会を平成29年7月19日（水）に開催した。



「しまなび」プログラムにおいては、地域の特産品に関する以下の取り組みがあった。

グループ	出発日	テーマ
五島4	9/12	特産品に特化したマップ
宇久12	8/22	特産品のパッケージ作成 オリーブではじめるグリーンアイランド
壱岐15	9/12	産業の直接関係者によるマーケティングの研究・実施
新上五島16	9/5	島外にあまり知られていない特産品のPR (くじら・あご・切干大根)

## 〈各機関との連携協定〉

資料 10

平成 29 年度

## 「長崎県立大学と長崎県教育委員会との連携・協力に関する協定」

- ・ 締結日：平成 29 年 4 月 14 日（金）
- ・ 相手方：長崎県教育委員会
- ・ 目 的：相互の資源を活用することで、県内の教育充実、地域社会への貢献及び人材の育成等に寄与することを目的とする。

## 「長崎県立大学と日本貿易振興機構（JETRO）との包括的な連携推進に関する協定」

- ・ 締結日：平成 29 年 4 月 25 日（火）
- ・ 相手方：独立行政法人日本貿易振興機構（JETRO）
- ・ 目 的：文化、産業、教育、学術等の分野で相互に連携し、人材教育面、産学連携面、学術研究面等での国際的な展開を推進し、長崎県及び同県内各地域の発展と人材の育成に寄与することを目的とする。

## 「長崎県公立大学法人とダナン市人民委員会外務局との包括連携に関する協定」

- ・ 締結日：平成 29 年 9 月 26 日（火）
- ・ 相手方：ベトナムダナン市人民委員会外務局
- ・ 目 的：相互の教育・文化の振興や人材の育成などに取り組み、国際交流の進展及び地域社会の発展に寄与することを目的とする。

## 「九州西部地域大学・短期大学連合産学官連携プラットフォームに関する協定」

- ・ 締結日：平成 29 年 10 月 26 日（木）
- ・ 相手方：長崎国際大学、長崎大学、長崎純心大学、長崎外国語大学他
- ・ 目 的：大学等が資源の集中化や共有、並びに有効活用を行って大学教育の改革を進めるとともに、地方公共団体や地域経済界と連携して、活気と魅力ある地域社会を創出し、持続的発展が可能な地域とするための知的活動の拠点として機能し、地域社会との連携・交流や、大学等の教育研究の活性化に資することを目的とする。



「大学共同利用機関法人自然科学研究機構と長崎県公立大学法人とのクロスアポイントメント制度に関する協定」

- ・ 締結日：平成 29 年 12 月 15 日（金）
- ・ 相手方：大学共同利用機関法人自然科学研究機構
- ・ 目的：双方の教育研究の活性化を図ることを目的とする。

「長崎県立大学と佐世保工業高等専門学校、熊本高等専門学校及び沖縄工業高等専門学校との情報セキュリティに係る連携協力に関する協定」

- ・ 締結日：平成 30 年 1 月 30 日（火）
- ・ 相手方：佐世保工業高等専門学校、熊本高等専門学校及び沖縄工業高等専門学校
- ・ 目的：サイバー攻撃関連情報の共有、情報セキュリティ関連の教育コンテンツに関する意見交換、共同研究の検討などを行うために、相互の資源を活用することにより、情報セキュリティ人材の育成等に寄与することを目的とする。

「長崎県公立大学法人長崎県立大学と公立大学法人首都大学東京東京都立産業技術高等専門学校との情報セキュリティに係る連携協力に関する協定」

- ・ 締結日：平成 30 年 3 月 27 日（火）
- ・ 相手方：公立大学法人首都大学東京東京都立産業技術高等専門学校
- ・ 目的：サイバー攻撃関連情報の共有、情報セキュリティ関連の教育コンテンツに関する意見交換、共同研究の検討などを行うために、相互の資源を活用することにより、情報セキュリティ人材の育成等に寄与することを目的とする。

## 平成25年度～平成29年度

	締結日	相手方	詳細
～平成25年度	平成 19 年 11 月 2 日	新上五島町	包括連携に関する協定
	平成 22 年 4 月 7 日	佐世保市	包括連携に関する協定
	平成 23 年 11 月 28 日	長与町	包括連携に関する協定
平成25年度	平成 25 年 9 月 20 日	平戸市	包括連携に関する協定
	平成 26 年 2 月 6 日	五島市	包括連携に関する協定
	平成 26 年 2 月 18 日	杵岐市	包括連携に関する協定
	平成 26 年 2 月 21 日	対馬市	包括連携に関する協定
	平成 26 年 3 月 26 日	小植賀町	包括連携に関する協定
平成26年度	-	-	-
平成27年度	平成 27 年 12 月 17 日	㈱親和銀行、 (株)ふくおかフィナンシャルグループ	産学連携の協力推進に関する協定
	平成 28 年 2 月 4 日	長崎県市町村 行政振興協議会	包括連携に関する協定
	平成 28 年 3 月 11 日	相浦警察署 時津警察署	安全、安心なまちづくりに関する協定
	平成 28 年 3 月 24 日	松浦市	包括連携に関する協定
	平成 28 年 3 月 31 日	長崎新聞社	包括的連携協力に関する協定
平成28年度	平成 28 年 4 月 1 日	長崎県	地方創生に係る連携に関する協定
	平成 29 年 1 月 24 日	長崎県、長崎県警察、 長崎県商工会議所連合会、 長崎県商工会連合会、 長崎県中小企業団体中央会、 公益社団法人長崎県産業振興財団、 一般社団法人長崎県情報産業協会、 西日本電信電話㈱長崎支店、 ㈱ラック、トレンドマイクロ㈱、 長崎大学、長崎総合科学大学、 佐世保工業高等専門学校	長崎県サイバーセキュリティに関する 相互協力協定
	平成 29 年 3 月 24 日	佐々町	包括連携に関する協定
平成29年度	平成 29 年 4 月 14 日	長崎県教育委員会	連携・協力に関する協定
	平成 29 年 4 月 25 日	独立行政法人 日本貿易振興機構（JETRO）	包括的な連携推進に関する協定
	平成 29 年 9 月 26 日	ハトナムダナン市人民委員会外務局	包括連携に関する協定
	平成 29 年 10 月 26 日	長崎国際大学、長崎大学、長崎純心 大学、長崎外国語大学他	産学官連携プラットフォーム に関する協定
	平成 29 年 12 月 15 日	大学共同利用機関法人 自然科学研究機構	クロスアポイントメント制度 に関する協定
	平成 30 年 1 月 30 日	佐世保工業高等専門学校、 熊本高等専門学校及び 沖縄工業高等専門学校	情報セキュリティに係る連携協力 に関する協定
	平成 30 年 3 月 27 日	公立大学法人首都大学東京 東京都立産業技術高等専門学校	情報セキュリティに係る連携協力 に関する協定

※平成25年度～平成28年度の内容は各年度の年間活動報告書参照

## (4) 教育の効果

教育の効果に関する部会では、本学教職員のPBLスキル向上のため、専門の講師を招いたワークショップを実施した。

### 平成29年度

#### 1. 全学FD研修会

開催日：平成29年8月10日（木）

テーマ：「初年次教育の動向について」

講師：同志社大学社会学部教育文化学科 山田 礼子教授

玉川大学教育学部教育学修支援課 山崎 千鶴課長

長崎国際大学教育基盤センター副センター長 小川 由起子教授

鹿児島大学総合教育機構高等教育研究開発センター

伊藤 奈賀子准教授

参加人数：157名



#### 2. 全学FD研修会

開催日：平成29年8月30日（水）

テーマ：「ナンバリング」

講師：熊本大学教育統括管理運営機構 川越 明日香准教授

参加人数：82名



### 3. 全学FD研修会

開催日：平成 29 年 11 月 21 日（火）

テーマ：「初年次教育」

講師：サウスカロライナ大学 Jennifer R. Keup 教授

参加人数：132 名



### 4. 全学FD研修会

開催日：平成 30 年 3 月 1 日（木）～2 日（金）

テーマ：「アクティブラーニングおよびルーブリック」

講師：コクヨ株式会社ファニチャー事業本部 TCM 事業部

教育バリューチーム 西日本営業開発グループ 松本 毅氏

教育開発センター長 橋本 優花里教授

参加人数：108 名



## 平成26年度～平成29年度

	開催日	参加人数	テーマ
平成26年度	平成 26 年 6 月 10 日	30名	「産学協同PBL講座」の実践報告
	平成 26 年 6 月 20 日	23名	地域活性化とPBL授業について
	平成 26 年 8 月 7～8 日	111名	しま体験教育プログラム実施に向けてのPBL授業の研修
平成27年度	平成 27 年 11 月 10 日	33名	「長崎のしまに学ぶ」について
	平成 27 年 12 月 7 日	16名	「長崎県のしまのフィールドワークについて」
	平成 27 年 12 月 17 日	12名	「域学連携の事例と方法ー社会的創発を生むプラットフォームの探求」
	平成 28 年 2 月 23 日	26名	「次年度のしまナビプログラムの実施に向けて」
平成28年度	平成 28 年 8 月 10～11 日	151名	「学生の動機づけを高める」
	平成 28 年 11 月 8 日	21名	「しまナビに関する意見交換及び今後の進め方の検討」
	平成 29 年 2 月 7 日	30名	「アクティブラーニングの理解と実践について」
平成29年度	平成 29 年 8 月 10 日	157名	「初年次教育の動向について」
	平成 29 年 8 月 30 日	82名	「ナンバリング」
	平成 29 年 11 月 21 日	132名	「初年次教育」
	平成 30 年 3 月 1～2 日	108名	「アクティブラーニングおよびルーブリック」

※平成26年度～平成28年度の内容は各年度の年間活動報告書参照

## (5) eラーニングシステム等の構築

eラーニングシステム等の構築に関する部会では、eラーニングシステム（モバイルラーニングシステムを含む）の運用において、環境を整備し、フィールドワーク等で実際に使用しながら、必要に応じて機能改善や追加・修正等を実施した。

<eラーニングシステム運用>・・・・・・・・・・資料1

<eラーニングシステム機能改善>・・・・・・・・・・資料2

<事例調査>

しまでの学習環境の調査を行った。

- ・平成29年7月～9月 各しまでのタブレット使用についての検証実施  
（モバイルネット環境および、サテライトキャンパスの設備等の調査）

<eラーニングシステム（manabie）ログイン画面>



<eラーニングシステム (manabie) 運用>

資料 1

教室での講義やしまのフィールドワークで活用できる環境を構築し、講義科目「長崎のしまに学ぶ」、演習科目「しまのフィールドワーク」において、manabieとしての運用は、3年目を迎えた。

(1)「長崎のしまに学ぶ」における manabie システム

The screenshot shows the main interface of the manabie system. At the top, there is a navigation bar with 'manabie' and a 'ログアウト' (Logout) button. Below this is a menu with options: '講義科目' (Lecture Subject), '演習科目' (Seminar Subject), '教科書' (Textbook), 'しま紹介' (Shima Introduction), '学生発表' (Student Presentation), and 'NOTE'. The main content area displays a calendar for the month of April 2015. The calendar is organized into two main sections: '個人実習' (Individual Practice) and 'グループ実習' (Group Practice). Under '個人実習', there are columns for '自己確認' (Self-check), 'まとめ報告' (Summary Report), '課題' (Assignment), and '社会人基礎力' (Social Basic Skills). Under 'グループ実習', there are columns for 'まとめ報告' (Summary Report) and 'ミーティング' (Meeting). A red box highlights the dates from April 7th to April 11th, with an orange callout bubble pointing to it that says 'この4つを提出する。' (Submit these 4).

The screenshot shows the '自己確認' (Self-check) page. At the top, there is a navigation bar with 'manabie' and a 'ログアウト' (Logout) button. Below this is a title bar with '自己確認' and a 'ログアウト' (Logout) button. The main content area is titled '講義 第1回' (Lecture 1st Session) and contains the following text: '授業の内容の「理解度」を自己確認する。高い・低いは 成績に影響しないので正直に答えて、提出する。' (Check your understanding of the lecture content. High or low scores do not affect your grade, so answer honestly and submit.) Below this is a section for '自己確認' (Self-check) with a sub-instruction: '本講義の内容を自己確認で確認して下さい。' (Please confirm the content of this lecture with self-check.) There are four radio button options: '①- 完全に理解できた' (I completely understood), '②- 理解できた' (I understood), '③- 部分的にしか理解できなかった' (I could only understand partially), and '④- 全く理解できなかった' (I could not understand at all). Below these options is a table with 5 rows and 5 columns. The first column is '確認事項' (Check items), and the other four columns are for the radio button options. The rows are: 1. 「しまなび」プログラムとは (概要) (What is the 'Shimabibi' program (overview)), 2. 「しまなび」プログラムの科目における位置づけと科目構成 (Positioning and subject structure of the program's subjects), 3. 実学教育科目区分「しまに学ぶ」の概要 (Overview of the practical education subject category 'Shima ni Manabu'), 4. 実学教育科目区分「しまに学ぶ」の概要 (Overview of the practical education subject category 'Shima ni Manabu'), 5. その他学習法とは (Other learning methods).

The screenshot shows the 'まとめ報告' (Summary Report) page. At the top, there is a navigation bar with 'manabie' and a 'ログアウト' (Logout) button. Below this is a title bar with 'まとめ報告' and a 'ログアウト' (Logout) button. The main content area is titled '講義 第1回' (Lecture 1st Session) and contains the following text: '今日の授業の内容を 自分なりにまとめて報告する。「指示文」にそって答えて 提出する。' (Summarize and report on today's lecture content in your own words. Answer according to the instructions and submit.) Below this is a section for 'まとめ報告' (Summary Report) with a sub-instruction: '本講義において学習したものを、なぜ高崎国立大学が「しまなび」を実施するのか、あなたの考えをまとめて、各自報告してください。' (Report on what you learned in this lecture, why Nagasaki National University implements 'Shimabibi', and your thoughts on it.) Below this is a large text input area. At the bottom, there is a section for '関連資料' (Related materials) with a link to '本講義の資料' (Lecture materials). At the very bottom, there are three buttons: 'キャンセル' (Cancel), '下書き保存' (Save draft), and '提出' (Submit).

manabie 課題

講義第1回

今日の授業を ふまえて 自分なりに考えて提出する。  
次の授業で使うので毎回ちゃんと考えてくること。

課題 提出のし方

項目1  
「しなび」プログラムを通して自分自身が行ってみたいことをまとめて下さい。  
(真実の対応は考えず、特定のしなびでなくてもかまいません)

項目2  
項目1でまとめたことについて、その理由を記入して下さい。

manabie 社会人基礎力確認

講義第1回

今の自分の考えで答えて下さい。はい・いいえの2択です。  
結果の高い・低いには成績に影響しないので正直に答えて下さい  
(結果は第12回に出ます)。

社会人基礎テスト

問題	はい	いいえ
1 チームから期待される以上のことを、主体的に行うことができる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
2 チーム全体の取り組みの進み具合を確認し、チームに貢献できる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
3 収集した情報を客観的な立場で分析し、課題点を指摘できる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
4 感情が乱れる状況にあっても、落ち着いてこなしていくことができる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
5 誰からでも信頼される人間関係を維持し、継続できる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
6 課題に対し、計画を立てて進めることができる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
7 個人的な苦悩を全力でサポートでき、チームのやる気を喚起できる。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

## (2) 教室におけるタブレット活用環境





<eラーニングシステム機能改善>

資料 2

(1) 「しまなび」プログラム評価機能

「長崎のしまに学ぶ」「しまのフィールドワーク」において、成績評価の教職員用画面を改善した。



(2) 地域コーディネーターとの連携機能

しまごとに配置される地域コーディネーターが、地域内での交渉や各種申請などについても円滑に行えるように専用画面を改善した。



実施計画書																												
タイトル(題目)	ちよっと寄ってみんね！「美しい自然と人の温かさに触れられる島、おぢか」																											
テーマ選定の理由(根拠)	「世界一美しい村同盟」に加入している程の美しい村の、景観の保持を島外から新たにになにか提案できないかと考えたから、小値賀が、人口減少に逆行した生活ごみの増加や、漂着ごみによる海や海岸の環境・景観の破壊という二つの問題を抱えているから。																											
テーマ	景観の保持、ごみ問題の解消、対策の提案(日常のごみ問題・漂着ごみ問題)																											
しまにとつての意味	景観の保持に対して、島外から見た観光客目線の保つべき景観がどのようなものかを知ることができ、島民の声にも触れつつ、景観の保持についての新たな提案を受けることができる。ごみ問題の解消、対策の提案に対して、日常のごみ問題、漂着ごみ問題を別として、島外の意見を取り入れることができる。ボランティアの募集に関しても、参加する側の意見を行くことができ、既存のボランティア活動の強化や、新たな活動の提案にも繋がる。																											
これまでとの相違点・新規性	景観の保持に関して、景観の情報発信についての提案は見られるが、保持そのものに対する提案はあまり見ない。新規性があると感じる。ごみ問題に関して、まずごみに触れる発表を見受けない。ごみの対策に関する新たな提案を行いたい。																											
到達目標	<div style="border: 1px solid red; padding: 5px; display: inline-block;"> <b>入力した具体策の内容が表示</b> </div>																											
1	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>空き家をワークショップ、船庫の庫、カフェとしての転用、公共の場など、人が集まる場所へ活用する。 すなわち、島民の方同士や島外からの観光客、移住者の方たちとのコミュニケーションのための場所の提供をして、人の温かさに触れられる地域コミュニティのサポートをする事。</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p>1.1 空き家の現状のデータを収集する。</p> </div> </div>																											
<table border="1" style="width: 100%;"> <thead> <tr> <th colspan="3">具体策</th> </tr> <tr> <th colspan="3">どのようなことを(内容)、どんな手段、だれに(対象)、どこで(場所)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1.1.1</td> <td>内容</td> <td>情報収集</td> </tr> <tr> <td>1.1.1</td> <td>手段</td> <td>FW(実施)前 聞き取り</td> </tr> <tr> <td>1.1.1</td> <td>対象</td> <td>行政の方</td> </tr> <tr> <td></td> <td>場所</td> <td>小値賀町役場</td> </tr> <tr> <td></td> <td>主担当</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>副担当</td> <td></td> </tr> <tr> <td colspan="3" style="text-align: center;">+ 具体策の追加</td> </tr> </tbody> </table>		具体策			どのようなことを(内容)、どんな手段、だれに(対象)、どこで(場所)			1.1.1	内容	情報収集	1.1.1	手段	FW(実施)前 聞き取り	1.1.1	対象	行政の方		場所	小値賀町役場		主担当			副担当		+ 具体策の追加		
具体策																												
どのようなことを(内容)、どんな手段、だれに(対象)、どこで(場所)																												
1.1.1	内容	情報収集																										
1.1.1	手段	FW(実施)前 聞き取り																										
1.1.1	対象	行政の方																										
	場所	小値賀町役場																										
	主担当																											
	副担当																											
+ 具体策の追加																												
<small>基礎計画書を修正</small>																												

**本講義における具体策の入力項目の説明**

具体策 達成方法1.1 空き家の現状のデータを収集する。 未取組 ▾

内 容	情報収集		
内容の詳細	役場の人に空き家件数や空き家の利用率などを聞く。		
手 段	FW(実施)前 ▾	聞き取り ▾	
対 象	行政の方		
場 所	小値賀町役場	解説1参照 <span style="border: 1px solid blue; padding: 2px;">地図から入力</span>	
住 所	長崎県北松浦郡小値賀町笛吹郷2376-1	TEL	0959-56-3111
主 担 当	▾	副 担 当	▾ なし ▾ なし ▾
別添資料	<span style="border: 1px solid orange; padding: 2px;">新規</span> <span style="border: 1px solid orange; padding: 2px;">選択</span> 空き家利用率調査結果 ⊗ 空き家件数調査結果 ⊗		

解説3参照

解説1	具体策の場所名、住所が自動的に取得でき、同時に表示・入力できます。	入力法①参照
解説2	個々の具体策の主担当・副担当のメンバーが表示されます。 主担当・副担当は責任を持って最後まで取り組みます。	
解説3	アンケートの文案、聞き取り項目等を作成するのに活用します。 ドキュメントはワード的な、スプレッドシートはエクセル的な、スライドはパワポ的な活用ができます。 グループの誰でも閲覧、作成することができます。	入力法②参照

**本画面における具体策の入力項目の説明**  
(コメント欄を活用することでの、学生・コーディネーターとの相互の連絡方法を含む)

コーディネーター手配  依頼 解説 1 参照 解説 5 参照 未対応

協力者 ⇒ (要) 【氏名: 役場総務課 連絡先: 0959-56-3111】

実施許可 ⇒ (要) 解説 2 参照

料金 ⇒ (無) 解説 3 参照

**コメント**

コーディネーターに依頼する場合は、依頼したい内容をコメント欄に入力し必ず送信すること。

2018年01月22日 2時33分【小磯真Cコーディネーター】 新着

空き家調査においては、役場総務課 へ連絡してください。連絡が終わったら、その旨こちらのコメントで連絡ください。 解説 4 参照 横村 (既) 小島 (未)

<b>解説 1.</b> (重要)	具体策に関して、その対応をコーディネーターに依頼するか、どうかを選択し、依頼する場合は「依頼」をチェックします。 依頼する場合のみコーディネーターは対応します。 コーディネーターに依頼したい内容を学生のコメント欄に入力し、必ず送信すること。
<b>解説 2.</b> (重要)	コーディネーターが協力者・実施許可・料金について「要」「不要」を指示します。「要」の場合は、実施月日、場所、内容などのアがを急いで確定させます。 (アがの確定には、直ちに取り組みことが重要です。)
<b>解説 3.</b> (重要)	コーディネーターへ「しま」市町職員・先生から、この具体策についてのコメントが表示されます。学生は返信できます。 コーディネーターへ「しま」の市町職員・先生との相互の連絡にはコメント欄を活用します。 コーディネーターへ依頼したい内容を学生のコメント欄に入力し、必ず送信すること。
<b>解説 4.</b>	グループのリーダー・副リーダー、この具体策の担当・副担当の名前が、コメントの下に表示されていますので、リーダー・副リーダー・担当・副担当コメントを必ず読み、「既読」の表示にします。 状況に応じて、学生は返信でき、コーディネーターへ「しま」の市町職員・先生との相互の連絡に活用します。
<b>解説 5.</b>	依頼に対してコーディネーターが未対応または対応中の場合、「未対応」対応完了した場合、「対応完」と表示されます。

**具体策の取り組みが完了したとき**

具体策 達成方法1.1 空き家の現状のデータを収集する。 解説 6 参照 未取組

内容 情報収集

**解説 6.** (具体策に関して) アがの確定など学生は取り組むべき事項が完了するまで取り組み、完了後に「取組完」の表示にします。  
なお、実施計画書画面の「S 未取組」「S 取組完」の表示は、このボタンとリンクしています。

**学生、コーディネーターの対応状況の確認について**

**解説 7.** 学生側の取り組み状況が表示されます。それぞれの具体策への取り組みが完了するまで行ないます。まだ取り組んでいない場合、取り組みの途中は「S 未取組」と表示されます。取り組みが完了した場合は、「S 取組完」と表示されます。

**解説 8.** (具体策に関する) 学生からの依頼に対するコーディネーター側の対応状況が表示されます。まだ対応していない場合、対応している最中は「C 未対応」と表示します。対応が完了した場合は、「C 対応完」と表示します。コーディネーターとしての対応が必要ない場合、できない場合は「C 対応不要」と表示します。

**解説 9.** 学生にコーディネーター・市町職員から発信されたコメントのうち、学生が確認して(読んで)いない数が表示されます。コメントは具体策画面のコメント欄(下部欄)に表示されています。

# IV

## 参考資料

「長崎のしまに学ぶ  
— つながる とき・ひと・もの —」





# IV 参考資料

## 1 各種規程、各種会議委員名簿

※P7～P12 参照

長崎県立大学COCプロジェクト推進本部規程

〔平成25年10月1日  
規程第27号〕

改正 平成27年3月24日規程第73号

改正 平成28年3月23日規程第34号

(目的及び設置)

第1条 文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に採択された「長崎のしまに学ぶ 一つながる とき・ひと・もの」(以下「事業」という。)を全学をあげて強力で推進するため、長崎県立大学にCOCプロジェクト推進本部(以下「推進本部」という。)を設置する。

(業務)

第2条 推進本部は、次の各号の業務を行う。

- (1) 事業の実施に関する事
- (2) 事業の予算及び決算に関する事
- (3) 地域志向の教育及び研究に関する事
- (4) 地域との連携に関する事
- (5) 文部科学省への報告等に関する事
- (6) COCプロジェクト評価委員会への報告に関する事
- (7) その他事業に関する事

2 前項の業務について、本学が定める他の規程と重複する場合は、この規程が優先するものとする。

(組織)

第3条 推進本部の本部員は、次に掲げる者をもって組織する。

- (1) 学長
- (2) 副学長
- (3) 学部長
- (4) 学生部長
- (5) シーボルト校学生部長
- (6) 地域連携センター長

- (7) 教育開発センター長
- (8) 教務委員会委員長
- (9) 大学事務局長
- (10) シーボルト校事務局長
- (11) その他必要に応じ学長が指名する者

一部改正[平成 27 年規程第 73 号]

(本部長)

第 4 条 推進本部に本部長を置き、学長をもって充てる。

- 2 本部長は、推進本部の業務を総理する。

(副本部長)

第 5 条 推進本部に副本部長を置き、副学長（COC 担当）をもって充てる。

- 2 副本部長は、本部長を補佐し、本部長に事故があるときはその職務を代行する。

一部改正[平成 27 年規程第 73 号、平成 28 年規程第 34 号]

(推進本部会議)

第 6 条 推進本部会議は、本部長が招集し、その議長となる。

- 2 推進本部会議は、本部員の 3 分の 2 以上の出席により成立する。
- 3 推進本部会議の議事は、出席者の過半数で決し、可否同数のときは、本部長の決するところによる。

(部会)

第 7 条 推進本部が決定した本事業の実施にかかる業務について、具体的に内容を検討するため、部会を置くことができる。

- 2 前項に規定する部会の名称及び業務を行う組織等については、次の表に掲げるとおりとする。

部会名	業務を行う組織等
地域志向の教育に関する部会	教務委員会
地域志向の研究に関する部会	副学長（研究担当）
地域との連携に関する部会	地域連携センター
教育の効果に関する部会	教育開発センター
e ラーニングシステム構築部会	学長が指名する教職員

- 3 各部会は、審議内容等について随時推進本部へ報告するものとする。

(関係部局等の協力)

第8条 推進本部は、業務の遂行上必要があるときは、関係部局に対し、教職員の出席や資料の提出など必要な協力を要請することができる。

2 前項の要請があった場合等、関係部局は推進本部に積極的に協力しなければならない。

(事務)

第9条 推進本部の事務は、事務局企画広報課において行う。

(補則)

第10条 この規程に定めるもののほか、推進本部の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、平成 25 年 10 月 1 日から施行する。

附 則(平成 27 年 3 月 24 日規程第 73 号)

この規程は、平成 27 年 4 月 1 日から施行する。

附 則 (平成 28 年 3 月 23 日規程第 34 号)

この規程は、平成 28 年 4 月 1 日から施行する。



## 委員一覧

名称	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	所属・役職等	担当
議長	太田 博道	太田 博道	太田 博道	太田 博道	太田 博道	学長	本部長
委員	-	-	正木 基文	-	-	学長特別補佐	副本部長
委員	古河 幹夫	古河 幹夫	古河 幹夫	古河 幹夫	古河 幹夫	副学長	(※平成28年度より 地域志向教育部会)
委員	正木 基文	正木 基文	平野 かよ子	平野 かよ子	平野 かよ子	副学長	地域志向研究部会 (※平成28年度より 副本部長兼任)
委員	伊藤 憲一	伊藤 憲一	伊藤 憲一	-	-	副学長	地域志向教育部会
委員	石川 雄一	石川 雄一	石川 雄一	三戸 浩	三戸 浩	経済学部長 (平成28年度より 経営学部長)	
委員	-	-	-	綱 辰幸	綱 辰幸	(平成28年度より) 地域創造学部長	
委員	庄山 茂子	庄山 茂子	上村 俊彦	村上 雅通	村上 雅通	国際情報学部長 (平成28年度より 国際社会学部長)	
委員	-	-	-	永野 哲也	永野 哲也	(平成28年度より) 情報システム学部部長	
委員	大曲 勝久	大曲 勝久	大曲 勝久	田中 一成	田中 一成	看護栄養学部長	
委員	谷澤 毅	谷澤 毅	谷澤 毅	谷澤 毅	谷澤 毅	学生部長	
委員	大塚 一徳	大塚 一徳	松本 幸子	大曲 勝久	大曲 勝久 下野 孝文	シーボルト校 学生部長	
委員	森田 茂樹	森田 茂樹	森田 均	森田 均	森田 均	地域連携 センター長	地域連携部会
委員	矢野 生子	矢野 生子	神保 充弘	橋本 優花里	橋本 優花里	教育開発 センター長	教育効果部会
委員	-	-	大塚 一徳	大塚 一徳	大塚 一徳	学長指名	eラーニングシステム 構築部会
委員	-	-	中島 洋	中島 洋	中島 洋	学長指名	
委員	百岳 敏晴	百岳 敏晴	百岳 敏晴	百岳 敏晴	百岳 敏晴	大学事務局長	
委員	梶原 敏彦	梶原 敏彦	梶原 敏彦	梶原 敏彦	平川 高裕	シーボルト校 事務局長	

## 長崎県立大学COCプロジェクト連絡会議規程

〔平成25年10月1日〕  
規程第28号

## (目的及び設置)

第1条 文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」に採択された「長崎のしまに学ぶ 一つながる とき・ひと・ものー」（以下「事業」という。）における本学と地域との連携を円滑に推進するため、長崎県立大学にCOCプロジェクト連絡会議（以下「連絡会議」という。）を設置する。

## (業務)

第2条 連絡会議は、次の各号の業務を行う。

- (1) 事業推進にかかる各自治体と大学間の連絡及び調整に関すること
- (2) COCプロジェクト推進本部（以下「推進本部」という。）への要望や意見のとりまとめに関すること
- (3) その他、本学と地域との連携を円滑に推進するために必要なこと

## (組織)

第3条 連絡会議の委員は、次に掲げる者をもって組織する。

- (1) 推進本部副本部長
- (2) 連携協定等を締結している自治体が推薦する者 各1名
- (3) 企画広報課長
- (4) シーボルト校総務企画課長
- (5) その他議長が必要と認めた者

## (任期)

第4条 前条第2号及び第5号に掲げる委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

- 2 前項の規定にかかわらず、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

## (議長)

第5条 連絡会議に議長を置き、推進本部副本部長を充てる。

- 2 議長は、連絡会議の業務を総理する。
- 3 議長に事故があるときは、あらかじめ議長の指名する委員がその職務を代行する。

## (会議)

第6条 連絡会議は、議長が招集する。

- 2 連絡会議は、委員の3分の2以上の出席により成立する。
- 3 連絡会議の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

## (事務)

第7条 連絡会議の事務は、シーボルト校事務局総務企画課において行う。

## (補則)

第8条 この規程に定めるもののほか、連絡会議の運営に関し必要な事項は、別に定める。

## 附 則

この規程は、平成 25 年 10 月 1 日から施行する。

## 委員一覧

名称	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	所属・役職等
議長	正木 基文	正木 基文	正木 基文	平野 かよ子	平野 かよ子	長崎県立大学 副学長
委員	小村 利之	浦上 達也	坂本 剛	福田 三千年	福田 三千年	長崎県 企画振興部 地域振興課 参事 (平成26年度より、地域づくり推進課 参事) (平成29年度より、地域づくり推進課 企画監)
委員	中島 勝利	東 隆一郎	東 隆一郎	中尾 健一	中尾 健一	佐世保市 企画部 政策経営課 課長
委員	岡部 輝幸	岡部 輝幸	岡部 輝幸	鴨川 恵介	鴨川 恵介	平戸市 市長公室 企画課 課長 (平成26年度より、総務部 地域協働課 課長) (平成29年度より、総務課 課長)
委員	二宮 照幸	一宮 努	一宮 努	荒木 静也	阿比留 裕史	対馬市 地域再生推進本部 副本部長 (平成26年度より、しまづくり戦略本部 新政策推進課 課長) (平成28年度より、しまづくり推進部 市民協働・交通対策課 課長) (平成29年度より、しまづくり推進部 次長)
委員	石尾 正彦	谷口 実	谷口 実	谷口 実	谷口 実	杵岐市 企画振興部 政策企画課 課長
委員	久保 実	久保 実	久保 実	久保 実	大賀 義信	五島市 市長公室 室長 (平成29年度より、総務企画部 政策企画課 課長)
委員	松浦 篤美	久保平 敏弘	久保平 敏弘	荒木 隆	荒木 隆	長与町 企画振興部 企画課 課長 (平成28年度より、企画財政部 政策企画課 課長)
委員	-	中川 一也	中川 一也	中川 一也	前田 達也	小値賀町総務課 課長
委員	石田 信明	石田 信明	小柳 哲也	小柳 哲也	小柳 哲也	新上五島町 総合政策課 課長
委員	松下 邦広	松下 邦広	政野 誠一郎	政野 誠一郎	政野 誠一郎	長崎県立大学 企画広報課 課長
委員	濱口 孝	濱口 孝	川原 光次	川原 光次	川原 光次	長崎県立大学 シーボルト校 総務企画課 課長

## 長崎県立大学COCプロジェクト評価委員会規程

〔平成25年10月1日  
規程第29号〕

## (目的及び設置)

第1条 文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」に採択された「長崎のしまに学ぶ 一つながる とき・ひと・ものー」(以下、「事業」という。)の取組内容を評価するため、長崎県立大学にCOCプロジェクト評価委員会(以下「評価委員会」という。)を設置する。

## (業務)

第2条 評価委員会は、次の業務を行う。

- (1) 事業内容の評価及び提言に関すること

## (対象期間)

第3条 事業の評価対象期間は、毎年4月1日から翌年3月31日までとする。ただし、平成25年度においては、10月1日から翌年3月31日までとする。

## (組織)

第4条 評価委員会の委員は、次に掲げる者とし、学長が委嘱する。

- (1) 外部有識者 2名
- (2) 大学運営に関心を有する者であつて、公募により選ばれた者 1名
- (3) 長崎県知事が推薦する者 1名
- (4) 連携協定等を締結している市町長が推薦する者 1名
- (5) 学長の指名する教職員 若干名
- (6) その他学長が必要と認めた者

## (任期)

第5条 前条に掲げる委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

- 2 前項の規定にかかわらず、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

## (委員長)

第6条 評価委員会に委員長を置き、委員の互選により選任する。

- 2 委員長は、業務を総理し、委員会を代表する。
- 3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長の指名する委員がその職務を代行する。

(実施要綱の策定)

第7条 評価委員会は、事業の内容評価に当たり、実施要綱を策定し、運営を管理する。

(委員会)

第8条 委員会は、委員長が招集し、その議長となる。

2 委員会は、委員の過半数の出席により成立する。

3 委員会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(事務)

第9条 評価委員会の事務は、事務局総務課において行う。

(補則)

第10条 この規程に定めるもののほか、評価委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、平成 25 年 10 月 1 日から施行する。

#### 委員一覧

名称	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	所属・役職等
議長	菊森 淳文	菊森 淳文	菊森 淳文	菊森 淳文	菊森 淳文	公益財団法人 ながさき地域政策研究所 所長
委員	鈴木 勇次	鈴木 勇次	鈴木 勇次	鈴木 勇次	鈴木 勇次	諫早市美術・歴史館 館長
委員	今村 英文	今村 英文	今村 英文	今村 英文	今村 英文	なんでんすつとたい津和崎 代表
委員	小坂 哲也	小坂 哲也	小坂 哲也	小坂 哲也	松尾 信哉	長崎県 総務部 学事振興室長 (平成27年度からは 学事振興課 課長)
委員	中島 勝利	中島 勝利	中島 勝利	中島 勝利	中島 勝利	佐世保市 企画部 部長
委員	阿部 律子	阿部 律子	阿部 律子	石川 雄一	鳥丸 聡	長崎県立大学 経済学部 教授 (平成28年度からは 地域創造学部 教授)
委員	村上 雅通	村上 雅通	村上 雅通	河口 朝子	河口 朝子	長崎県立大学 国際情報学部 教授 (平成28年度からは 看護栄養学部 教授)

## 2 評価実施要領

※P13～P18 参照

### 長崎県立大学 COC プロジェクト評価実施要領

平成 27 年 3 月 18 日

#### 1. 趣旨

長崎県立大学 COC プロジェクト評価委員会（以下「評価委員会」という。）が行う「長崎のしまに学ぶ ― つながる とき・ひと・もの ―」（以下「事業」という。）の事業評価を適切に行うため、評価の実施に関し必要な事項を定める。

#### 2. 評価の目的

評価委員会が行う評価及び提言は、自主的な事業運営の見直し及び改善を促し、もって事業の質の向上、事業運営の効率化及び透明性の確保に資することを目的とする。

#### 3. 評価の基本方針

- (1) 事業評価は、5か年の事業実施計画の達成に向けた業務の進捗状況及び事業実施による成果を確認する観点から行う。
- (2) 事業評価は、長崎県立大学 COC プロジェクト推進本部（以下「推進本部」という。）の自己評価に基づくものとする。

#### 4. 事業評価の実施方法

事業評価は、推進本部の自己評価に基づき作成する事業評価報告書により実施する。

#### 5. 事業評価実施スケジュール

事業評価は事業実施期間中に4回開催する。

- (1) 2年目までの実績についての評価を平成 27 年 4 月に実施
- (2) 3年目の実績についての評価を平成 28 年 4 月に実施
- (3) 4年目の実績についての評価を平成 29 年 4 月に実施
- (4) 5年目の実績及び5か年実績についての評価を平成 30 年 4 月に実施

#### 6. 推進本部の自己評価

##### (1) 事業評価報告書の作成にかかる留意事項

推進本部は次の事項に留意し、年度計画における実施計画の項目ごとに、業務の推進状況等について事業評価報告書に記載する。

- ①できる限り客観的な情報・データを用いて具体的に記載するよう留意する。
- ②当該事業の取組の実績が年度計画で定めた計画どおり進められていない場合は、その理由及び次年度以降の取組みの見通しを併せて記載する。
- ③特筆すべき事項等があれば次により記載する。
  - ・年度計画には記載していないが、力を入れて取り組んでいるもの
  - ・その他、評価委員会に報告すべき状況など
- ④必要に応じて、関連資料を添付する。なお、評価委員会は評価を行うにあたり、必要と認められた資料について、追加資料の提出を求めることができる。

## (2)項目別評価

推進本部は、年度計画の記載事項ごとに、業務の進捗状況を次に掲げる年度計画の項目別評価基準に基づき、4段階で自己評価するとともに、できるだけ客観的なデータに基づき、その業務を行ったことによる成果も踏まえ、業務の実施状況及び自己評価の判断理由を記載する。

また、推進本部の判断により年度計画の記載項目を複数まとめて自己評価することができるものとする。

評価	年度計画の項目別評価基準
Ⅳ	年度計画を上回って実施している
Ⅲ	年度計画を順調に実施している
Ⅱ	年度計画を十分に実施していない
Ⅰ	年度計画を実施していない

## (3)全体評価

推進本部は、年度計画の項目別評価を踏まえ、事業全体における目標の達成状況、進捗状況を総合的に評価する。

## (4)自己評価結果の評価委員会への報告

推進本部は、各年度の自己評価結果について、原則として翌年度の4月10日までに評価委員会に報告するものとする。

## 7. 評価委員会による評価

### (1)推進本部による自己評価の検証

評価委員会は、推進本部から報告を受けた事業評価報告書及び必要に応じて求める追加資料の提出を受け、業務の実績等を確認のうえ、推進本部の自己評価を検証する。

### (2)項目別評価

評価委員会は、推進本部の自己評価の検証を踏まえ、年度計画の記載事項ごとに、業務の進捗状況を年度計画の項目別評価の評価基準に基づき、4段階で評価する。

なお、推進本部の自己評価と評価が異なる場合は、その理由を付記する。

### (3)全体評価



評価委員会は、年度計画の項目別評価を踏まえ、事業全体における目標の達成状況、進捗状況を総合的に評価する。

また、改善すべき事項があれば付記する。

(4) 事業評価結果の推進本部への通知

評価委員会は、事業評価結果を推進本部に通知する。

8. 評価結果の反映

(1) 評価委員会から事業評価結果の通知を受けた推進本部は、結果を関係部局に伝達する。

(2) 評価結果がⅠ又はⅡで、改善を求められた事項については、関係部局の委員が中心となって、部局での改善計画を立案し可及的速やかに改善を行う。

9. 評価結果の公表

事業評価結果については大学ホームページに掲載する方法により公表する。

10. その他

この要領については、事業評価の実施結果等を踏まえ、必要に応じ、評価委員会の協議を経て見直すことができるものとする。

## 3 シラバス（平成29年度版）

※P21～P33 参照

担当者職・氏名	教授（特任） 中島 洋		
科目名	長崎のしまに学ぶ		
授業概要とテーマ	長崎県の離島（しま）について主体的に学び、しまにおけるフィールドワークのテーマを設定し、フィールドワークの実施計画の立案等に、学生同士や地域コミュニティと協働して取り組むことにより、自立的・積極的な学びの姿勢を身につける。		
到達目標	①長崎県の離島（しま）の現状を理解し、特徴や課題を発見することができる。 ②フィールドワークの具体的実施計画をテーマ、手段、手法を系統立てて立案できる。 ③与えられた課題に対して主体的に取り組むことができる。 ④グループワークにおいて、他者の意見を尊重し、自分の考えをまとめ発言することができる		
授業計画	回	主題	授業内容
	1.	ガイダンス	①「しまに学ぶ」科目群の説明と当該科目の位置づけ②PBLによる授業③社会人基礎力④e-ポートフォリオ⑤授業マニュアルについてのガイダンス
	2.	県下の「しま」について	①県下における「しま」の概要の把握と理解（長崎県地域振興部の職員による「しま」の現状についての講話）
	3.	フィールドワークの全体像について	①過去における「しまなび」プログラムの報告作品の視聴を通じて、フィールドワークの全体像を理解②グループ編成法の理解
	4.	フィールドワークを行う7つの「しま」について	①フィールドワークを行う7つの「しま」ごとの概況をビデオを通じて視聴し、理解②フィールドワークを行うしまの希望調査（グループ編成の手続き）
	5.	フィールドワークを行う「しま」についてコーディネーターとの連携	①7つのしまごとに「しま」の概要の把握と理解（各しまの市町職員による「しま」の現状についての講話）②コーディネーターとの連携法の理解（各しまのコーディネーターとの意見交換）
	6.	グループワーク①	①フィールドワークのグループ編成②フィールドワークのテーマについての意見交換（KJ法活用）③グループとしてのテーマの原案の決定
	7.	グループワーク②	①フィールドワークのテーマの決定②到達目標の検討③フィールドワーク実施時期の検討と決定
	8.	グループワーク③	①テーマに対する到達目標の決定②達成方法の決定③テーマ・到達目標・達成方法の決定④中間発表の準備
	9.	中間発表Ⅰ グループワーク④	①中間発表Ⅰ②テーマ・到達目標・達成方法の修正③テーマに関して収集した情報の提示と確認、分担
	10.	グループワーク⑤	①実施計画書の作成②アンケート・聞き取りについての検討
	11.	グループワーク⑥	①実施計画書の作成②アンケート・聞き取りについての検討
	12.	グループワーク⑦	①実施計画書の作成（完成）②アンケート等についての検討
	13.	グループワーク⑧	①最終計画書の作成②アンケート・聞き取りについての検討
	14.	グループワーク⑨	①最終計画書の作成（完成）②アンケート等についての検討
	15.	中間発表Ⅱ グループワーク⑩	①最終計画書を用いた中間発表Ⅱ②最終計画書の修正 ③アンケート・聞き取り内容の決定④計画の最終確認・調整
成績評価の基準 成績評価の方法	A（秀）…90～100点、B（優）…80～89点、C（良）…70～79点、D（可）…60～69点 F（不可）…59点以下 2/3以上の出席が必要、ポートフォリオを使った全課題の提出、課題の提出状況、グループワークでの成果物の優秀度、ピアレビューによるグループワークにおける貢献度、を点数化する。		
テキスト	長崎のしまに学ぶテキスト（デジタル版）、実施マニュアル、e-ラーニング配信教材		
参考文献	「旅する長崎学」（長崎文献社）、市勢要覧、町勢要覧、長崎の離島（長崎県）		
科目のキーワード	PBL、しま、e-ポートフォリオ、グループワーク		
授業の特徴	①PBL（project based learning 課題解決型学習法）で実施する。 ②1グループ10名程度で構成する。 ③e-ポートフォリオを活用する。		
関連科目	「しまのフィールドワーク」		
履修上の注意等 （履修条件等）	「しまのフィールドワーク」の履修には、本科目の修得が必要である。		

担当者職・氏名	教授（特任） 中島 洋		
科目名	しまのフィールドワーク		
授業概要とテーマ	長崎県の離島（しま）の現状について、しまにおけるフィールドワークを通して体感するとともに、自らが考えたテーマについて主体的、実践的な活動を行い、その結果を報告書としてとりまとめ、発表する。		
到達目標	①しまでのフィールドワーク、インタビューやアンケート等を通して得た情報と、「長崎のしまに学ぶ」で収集した資料などを合わせて、課題を発見し分析することができるようになる。 ②しまでのフィールドワークについて主体的に取り組むことができる。 ③チームでの活動において、自分と周囲の人々や物事との関係性を理解することができる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1.	事前打ち合わせ (グループワーク)	フィールドワーク実施前日にグループで集まり、全日程の確認、調整、打ち合わせを行う
	2.	フィールドワーク 1 日目	しまへ移動し、計画書に沿ってグループ毎に活動
	3.	フィールドワーク 1 日目	しまへ移動し、計画書に沿ってグループ毎に活動
	4.	フィールドワーク 2 日目	計画に沿ってグループ毎に活動
	5.	フィールドワーク 2 日目	計画に沿ってグループ毎に活動
	6.	フィールドワーク 3 日目	計画に沿ってグループ毎に活動
	7.	フィールドワーク 3 日目	計画に沿ってグループ毎に活動
	8.	フィールドワーク 4 日目	(午前) 計画に沿ってグループ毎に活動、活動報告会の準備 (午後) 活動法公開・意見交換会の実施
	9.	フィールドワーク 4 日目	(午前) 計画に沿ってグループ毎に活動、活動報告会の準備 (午後) 活動法公開・意見交換会の実施
	10.	フィールドワーク 5 日目	フィールドワーク活動のまとめ、移動
	11.	フィールドワーク 5 日目	フィールドワーク活動のまとめ、移動
	12.	最終報告書の作成① (グループワーク)	フィールドワークの結果を基にした最終報告書を作成するため、役割分担等を確認し、作成を開始する。同時に発表会の準備も開始する。
	13.	最終報告書の作成② (グループワーク)	引き続き最終報告書作成及び発表会の準備を行う。
	14.	最終報告書の作成③ (グループワーク)	最終報告書を完成させる。模擬発表を行う。
15.	発表会 I  発表会 II	最終報告書により数グループごとにプレゼンテーションを行い、相互に評価する 各グループのプレゼンテーションを manabie で視聴し、相互に評価する	
成績評価の基準 成績評価の方法	A (秀) …90～100 点、B (優) …80～89 点、C (良) …70～79 点、D (可) …60～69 点 F (不可) …59 点以下 2/3 以上の出席が必要、ポートフォリオを使った全課題の提出、課題の提出状況、グループワークでの成果物の優秀度、ピアレビューによるグループワークにおける貢献度、を点数化する。		
テキスト	長崎のしまに学ぶテキスト(デジタル版)、実施マニュアル、e-ラーニング配信教材		
参考文献	「旅する長崎学」(長崎文献社)、市勢要覧、町勢要覧、長崎の離島(長崎県)		
科目のキーワード	しま、フィールドワーク		
授業の特徴	①1 グループ 10 名程度で 4 泊 5 日のフィールドワークを行う(8 月中旬～9 月) ②e-ポートフォリオを活用する ③報告書を作成する。(9 月) ④発表会で報告を行う(10 月及び 11 月)		
関連科目	「長崎のしまに学ぶ」		
履修上の注意等 (履修条件等)	「長崎のしまに学ぶ」を履修していること ・フィールドワーク実施時期は、次の 6 週のうちのいずれかで 4 泊 5 日で実施する。荒天等により予定が変更になる場合がある。 第 1 週 8 月 21 日(月)～26 日(土)、第 2 週 8 月 28 日(月)～9/2 日(土)、第 3 週 9 月 4 日(月)～9 日(土) 第 4 週 9 月 11 日(月)～16 日(土)、第 5 週 9 月 18 日(月)～23 日(土)		

## 4 学長裁量教育研究費 応募要領

※P47～P48 参照

### 平成29年度 学長裁量教育研究費 応募要領

#### I 学長裁量教育研究費配分の基本方針と種類等

##### 1. 配分の基本方針

(1) 学長裁量教育研究費は、大学が本来持つべき教育・研究機能について着実な質の向上を図るとともに、長崎県の地方創生に寄与することを目的とする。より具体的には、教育の質向上への貢献、独自性ある高水準の研究の促進、大型の競争的外部資金獲得の増加、地域への貢献等を目的とする。

(2) 交付の対象となる研究課題の種類は、「離島」・「東アジア」・「長崎の地域課題」・「挑戦的研究」・「学長が掲げる大学の目標に合致する研究」並びに「科研費獲得支援部門」を対象とする。

(3) 研究体制として、学部横断的あるいは他大学等の協力を得て行う研究であることが望ましい。

##### 2. 研究課題の種類と領域

###### ①「離島」に関する研究

- 離島における固有の課題解決に関するもの
- 「しまなびプログラム」の推進に関するもの など

###### ②「東アジア」に関する研究

- アジア・国際戦略に関するもの など

###### ③「長崎の地域課題」に関する研究

- 住民協働で地域を支える人材育成に関するもの
- 産業・雇用創出、産業振興に関するもの
- 保健・医療・福祉、健康増進に関するもの
- 地域の伝統文化の継承とその活用
- その他本県の抱える政策課題 など

###### ④挑戦的研究

- これまでの学術の知見や考え方を大きく変えることを志向する、新規性・独創的・先駆的な研究
- 地方創生等の挑戦的で実効性の高い目標を掲げるもの

###### ⑤学長が掲げる大学の目標に合致する研究

- 本学の教育・研究機能について着実な質の向上を図る実効性の高い研究

#### ⑥科研費獲得支援部門

- 平成29年度科研費審査結果がAランクで不採択だった者が、平成30年度での採択に向けて、研究課題のブラッシュアップをするための調査研究

## II 申請要領

### 1. 申請数と申請上限額

#### (1) 申請数

- ①研究代表者（個人研究または共同研究代表者）としての応募

i) 原則1研究課題

ii) ⑥科研費獲得支援部門のみ①～⑤への申請に加えて応募可。

※ただし、2つの申請内容に明確な違いが見られない場合は受理不可。

- ②研究分担者としての応募

i) 2研究課題以内（研究代表者としての応募研究を除く）

※⑥科研費獲得支援部門への応募は、平成29年度科研費申請における代表者のみ可

#### (2) 申請上限額

1件当たり	共同研究（学部横断）	500万円以内
	共同研究（上記以外）	300万円以内
	個人研究	200万円以内

### 2. 研究期間

研究期間3年以内とすることができる。

複数年の計画であっても、採否は単年度ごとに決定するので、年度ごとに申請が必要となる。※⑥科研費獲得支援部門については、単年度（科研費申請期限まで）のみとする。

### 3. 申請者等の範囲

当教育研究費の申請者（研究代表者）及び研究分担者は本学の教員（特任教員を含む）でなければならない。また、大学院学生及び学外の研究者を研究協力者とすることができる。

### 4. 申請の条件

以下①～④の要件を必ず満たすこと

- ① 競争的外部資金への申請・継続（以下のいずれかに該当）

- 平成28年度中に研究代表者として競争的外部資金への申請を行っていること
- 平成29年度に研究代表者として競争的外部資金の継続課題があること
- ※1 平成28年度の学長裁量教育研究費の申請締切日以降に採用された教員及び育児休業等により平成28年度に競争的外部資金への申請を行うことができなかった教員が申請する場合は、この限りではない。
- ※2 競争性のない受託研究及び共同研究は上記の競争的外部資金には含まない。
- ② 研究費使用にあたっての誓約書提出（長崎県立大学競争的資金等不正防止計画に規定）
- ③ 平成28年度コンプライアンス教育研修(CITI Japan プロジェクト:e-learning)受講及び修了証提出（平成29年4月1日採用者を除く）
- ④ 年度計画に定める平成29年度の長期研究計画書の期限内提出

## 5. 申請方法と申請期限

### (1) 申請方法

「学長裁量教育研究費申請書（様式1号）」により、E-mailで事務局へ提出する。申請書の提出はPDFとする。提出の際は文章の切れや記入漏れがないか十分に確認すること。

なお、平成28年度中に科研費以外の競争的外部資金へ申請した場合は、申請書の写し及び受領通知や採否決定通知の写し等、申請したことが確認できるものを提出する。

※ 共同研究の場合は、各研究分担者の「承諾書（様式1号）その5」を提出する。

### (2) 申請期限

平成29年4月21日（金）

（平成29年4月1日付新規採用教員は、平成29年4月28日（金）まで）

### (3) その他 申請書の使用言語は日本語とする。

### (4) 科研費獲得支援部門の申請について

#### ①申請書類

##### (i) 「学長裁量教育研究費申請書（様式1号）」

- ・内容は、「平成29年度科研費申請書」と同一の研究内容・計画ではなく、平成30年度科研費申請期間までに、採択に向けて再度挑戦するにあたり、補強をしたい点が明確に記載されていること。

##### (ii) Aランクでの不採択となったことが分かる証拠書類

- ・電子申請システム上での結果画面写し

#### ②申請期間（予定）

平成29年4月24日（月）～5月12日（金）

※科研費採択結果開示後、概ね3週間とする。

### Ⅲ 選考方法及び採択

別紙「平成29年度 学長裁量教育研究費の審査方針」「申請に関する注意事項」に基づく。

### Ⅳ 研究内容の変更

研究者の役割、研究目的、計画、研究分担者の分担内容・研究費配分額等の変更及び予算の大幅な変更がある場合は、「学長裁量教育研究費 変更申請書（様式1号）その6」を事前に事務局へ提出をすること。研究内容変更申請の諾否については学長・副学長・事務局長が審査のうえ、学長が決定する。（場合によっては面談等を行うことがある。）

### Ⅴ 研究成果の報告と公表

#### （1）報告・提出方法

「学長裁量教育研究費成果報告書（様式2号）その1～その3」を下記期限までに提出することを必須とする。（使用言語は日本語：提出方法：E-mail）  
共同研究の場合は、研究代表者が取りまとめのうえ報告する。

#### （2）公表形式・方法

##### ①本学HP

- ・「学長裁量教育研究費成果報告書（様式2号）その1 ⑦研究内容及び成果」（別添書式）

##### ②本学リポジトリ

- ・「学長裁量教育研究費成果報告書（様式2号）その1，その2」  
その2は抄録（研究概要）2～4枚にまとめること。
- ・（様式2号）その2については、掲載可能な論文形式での提出をもって替えることができる。

提出期限 ①～⑤ 平成30年 4月13日

⑥ 平成29年11月30日

- ※ 学長が特に優れた研究と判断するものについては、公開講座等での研究成果の報告を実施する。
- ※ 研究成果は、査読付論文として投稿することが望ましい。
- ※ 提出された報告書は、次年度以降の学長裁量教育研究費審査の参考とする。

## 5 「しま」のコーディネーター設置要綱

※P50～P52 参照

### 長崎県立大学「しま」のコーディネーター設置要綱

#### （趣旨）

第1条 この要綱は、「しまなび」プログラムに基づく科目の履行に際して、学生の活動を支援し、充実させるため配置する「しま」のコーディネーター（以下「コーディネーター」という。）に関して必要な事項を定めるものとする。

#### （役割）

第2条 コーディネーターは地域のことを把握している者で、その役割は次のとおりとする。

- (1) 「しまに学ぶ」科目の履行に関する学生からの相談に対する対応
- (2) 現地（各離島）の実習先の調整と学生への紹介
- (3) 現地報告会への出席及び学生に対するアドバイス
- (4) その他必要な事項

#### （定数）

第3条 コーディネーターは、対馬市、壱岐市、五島市、佐世保市（宇久町）、平戸市（大島村）、北松浦郡小値賀町、南松浦郡新上五島町に各1名設置するものとする。

#### （委嘱）

第4条 学長は、第2条に該当する者を決定したときは、委嘱状を交付する。

#### （任期）

第5条 コーディネーターの任期は、2年とする。ただし、再任は妨げない。

2 特別の事情があると認められるときは、前項の規定にかかわらず、学長は、コーディネーターを解職することができる。

#### （謝金）

第6条 コーディネーターに対する謝金（活動費を含む）は、予算の範囲内で別に定める。

#### （守秘義務）



第7条 コーディネーターは、職務上知り得た個人情報等を第三者に漏らしてはならない。その職務を退いた後も同様とする。

(その他)

第8条 この要綱で定めるもののほか、必要な事項は別に定める。

附 則

この要綱は、平成27年4月27日から施行する。

附 則

この要綱は、平成28年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成29年4月1日から施行する。

V

その他

「長崎のしまに学ぶ  
— つながる とき・ひと・もの —」

平成29年度  
地(知)の拠点整備事業  
【最終年度 事業経過報告書】





平成 29 年度

長崎新聞（平成 29 年 4 月 15 日）掲載記事

## 県立大と県教委 人材育成で協力

協定締結

県立大と県教委は14日、教育の充実に関する協定を締結した。県内の小中高生、同大学生、教員の交流事業



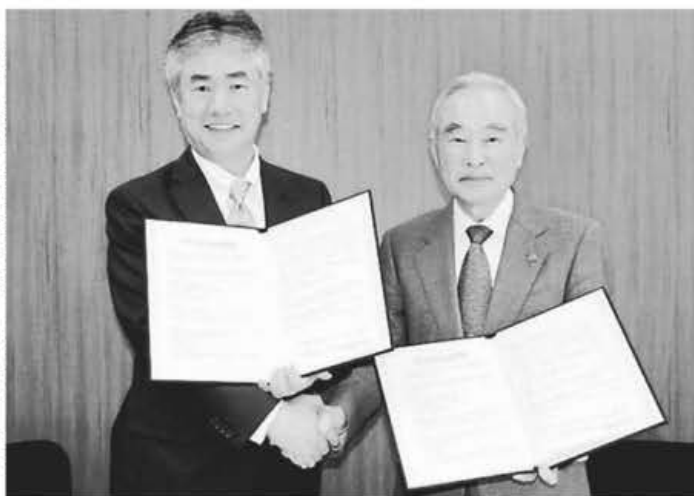
などを通し、人材育成の面で協力を図る。協定では、県立壱岐高の

協定書に署名し、握手を交わす  
池松教育長（左）と太田学長  
長与町、県立大シーボルト校

東アジア歴史・中国語コースと同大国際社会学部の双方の学生や教員の交流、離島でのオープンキャンパス実施などで連携。同大が学生を県内の離島に一定期間滞在させて体験学習させる「しまなびプログラム」で、離島の高校生と共に地域活性化策を探ることなども考えているという。

同日、西彼長与町の県立大シーボルト校であった締結式では、県立大の太田博道学長と池松誠二県教育長が協定書に署名。太田学長は「次代を担う若者を育成するという観点から相互で連携や議論を深め、さまざまなかたちで協力したい」とあいさつ。池松教育長は「大学の専門性の高い人的、知的資源を活用させてもらいながら、本県教育の充実につなげたい」と語った。

（猿渡利子）



協定書を交わした眞銅理事（左）と太田学長（右）と県立大

## 地域創生へ連携協定

### 企業の海外展開など促進

県立大と日本貿易振興機構（JETRO）は25日、地域創生を目指す包括連携協定を結んだ。県内企業の海外展開の促進とグローバルな人材の育成が狙い。JETROと九州の大学が包括協定を締結するのは初めて。県立大が受託研究や共同研究などで関わりがある企業のうち、海外展開を希望する企業にJETROが貿易実務や商習慣を助言したり商談の機会を紹介したりする。同大のインターシップ（就業体験）でも協力し、今年の夏にベトナム・ハノイのJETROの事務所です学生を受け入れる調整を進めている。調印式で太田博道学長は「キャンパスの中にもっていても活力のある人材は育成できない。JETROと協力できるのはありがたい」とあ

いさつ。JETROの眞銅竜日郎理事は「地域創生への貢献に主眼を置く点で重要な協定。国内外に張り巡らせたネットワークをフルに活用して長崎のために役立ちたい」と話した。（嘉村友里恵）

## 県立大とジェットロ

長崎新聞（平成29年7月22日）掲載記事

## 県立大生販路拡大へ市場調査

安定した販売額と生産量が見込める農産物を集中的に支援し、さらなる販売額増を目指す佐世保市の「1億農産物振興事業」で、県立大流通・経営学科の3年生がイチゴの市場を調査。川下町の同大佐世保校で19日、市の担当者らに結果を報告した。

市農業畜産課によると、市の地方創生施策の一環。年間販売額1億円規模の▽イチゴ▽ハウスナス▽アスパラガス▽菊一の4品目を昨年度からの3カ年集中的に支援。西海みかんや長崎和牛と肩を並べる20億円規模に育てる狙い。

### イチゴ小分けにパックはかわいく



調査結果を踏まえ、販路拡大に向けたアイデアを語る学生。県立大佐世保校

販路拡大のアイデアを生産現場に提案しようと包括連携協定を結ぶ同大と共同研究した。

安達彩乃さん(20)ら大田謙一郎講師(マーケティング論)のゼミ生9人が調査。直売所などを展開する県内の人気施設への聞き取りや学生ら183人への消費者アンケートに取り組んだ。学生はアンケートで「価格を重視する」との回答が多かったことを説明。「小分けパックで個数を少なくし、パッケージもかわいいものにする事で手に取りやすくなる」と提案した。

(養川裕之)

## 人材育成で協定

### 県公立大法人と越ダナン市



協定書に署名し、握手を交わす稲永理事長（左）と市局長  
佐世保市川下町、県公立大佐世保校

県立大を運営する県公立大法人（稲永理事長）は26日、本県とゆかりの深いベトナム・ダナン市人民委員会外務局と教育・文化振興や人材育成に関する包括連携協定を結んだ。

ダナン市はベトナム中部の中央直轄市で人口は約100万人。近年はIT関連企業の集積が進む。16世紀の長崎の朱印船貿易家、荒木宗太郎が妻を迎えた安南国王女アニオー姫の出身地とされる。人民委員会は地方政府に当たり、外務局は外交全般を担当する。県立大は昨年度の学部学科改編に先立ち、2014年度から3年生の海外ビジネス研修を試行。学生が現地企業などでインターンシップに取り組み、外務局も受け入れに協力している。来年度から研修が本格実施されることや、同大が国内で初めて設置した「情報セキュリティ学科」を生かした人材育成の面などから協定の話が持ち上がった。佐世保市内であった締結式では、稲永理事長とラム・クアン・ミン外務局長が

協定書に署名。稲永理事長は「学生が相互の発展に尽くしてくれることを期待する」、ミン局長は「文化交流も進め、市民レベルで互いのことをもっと知ってもらえたら」と述べた。ミン局長らは同日、県庁を訪れ、瀧本磨毅総務副知事と懇談した。（藤川裕之）

# 「準島民」県内1200人

国境離島新法の「準島民」 運賃引き下げ対象者	対象者数			年間対象人数 (見込み)
	島外に進学した 高校生ら	自治体の移住定住 政策での来島者	自治体の交流拡大 政策での来島者	
市市市市市市市市市市市市	○	○	○	約340人
市市市市市市市市市市市市	○	○	○	220人
市市市市市市市市市市市市	○	○	○	約470人
市市市市市市市市市市市市	○	○	○	約60人
市市市市市市市市市市市市	○	○	○	約50人
市市市市市市市市市市市市	○	○	○	約70人
市市市市市市市市市市市市	○	○	○	6人
計				計約1200人

### 国境離島新法の運賃引き下げ

国境離島新法に基づき10月から離島の航路・空路運賃が引き下げられる「準島民」が、法の適用を受ける県内7市町で年間約1200人になる見込みであることが29日、本紙の取材で分かった。

「準島民」は、内閣府の要請で①島外に進学した18歳以下の高校生ら②離島市町村の移住定住政策による来島者③離島留学制度など離島市町村の交流拡大政策による来島者と規定している。内閣府が29日、運賃引き下げの対象となる政策を各自治体に通知。本紙が各政策に関わる人数を取材し、それを基に運賃引き下げの対象人数を積み上げた。

県内で最も対象者が多かったのは五島市の約470人。このうち②の交流拡大政策が357人を占めており、県立大の学生が一定期間滞在し食文化や産業などを体験学習する「しまなびプログラム」の160人と、長崎大の学生による「離島医療・保健実習」の115人が含まれる。約340人が対象の壱岐市では、今春開校した介護福祉士を養成する専門学校で、未成年の生徒の保護者やきょうだいが来島する場合も③の対象となった。7市町でいずれも対象となったのは島外に進学した高校生らで、約290人。「準島民」の運賃引き下げの適用を受けるには「準住民カード」が必要。各自治体が10月以降、順次発行を受け付ける。（まとめ・緒方秀一郎）

長崎新聞（平成29年10月25日）掲載記事

## 県立大看護学生 五島で被害者に聞き取り



実習について振り返る柏さん（右から3人目）や長友さん（右から2人目）ら＝長崎市内

## 油症の苦しき今なお

県立大看護栄養学部の4年生6人が今夏、同大の「しまの健康実習」で、五島市に暮らすカネミ油症被害者に生活史全般を聞き取った。結婚、子育て、老い。誰もが経験しうる場面の中で、被

害者はそれぞれ壮絶な健康被害と生きづらさを抱え、後悔や葛藤は今なお続いていた。「決して過去の出来事ではない」。看護師や保健師の卵たちは、そう気付いた。

## 続く症状、後悔、葛藤

カネミ油症は、1968年に西日本一帯で発覚した食中毒事件。本県では五島市に被害者が多い。6人は、離島の健康問題を学ぶ看護学科の実習で同市担当になり、新上五島町出身のリーダー、柏論実さん(22)が中学時代に油症被害者の講話を聞いたことがあったため、テーマとして提案した。

5、6月の計7日間、島に泊まり込み、50、80代の10人（女性7人、男性3人）に聞き取り、健康被害が就職や結婚、出産などの表現にどんな影響を与えたかや、その時々々の思いを尋ねた。「『壮絶な体験』という言葉だけでは言い表せない」。学生たちは被害者の話に強い衝撃を受けた。

カネミ倉庫（北九州市）製の米ぬか油を食べた当時妊娠していたという女性。「私の子もねえ……」。話の途中でおもむろに、誕生したわが子が生後数カ月で油症の影響によって亡くなったことを語ってくれた。「かわいそうと思うばかりで。丈夫に生んであげられなかった」。後悔の念を涙ながらに語った。学生たちはその姿に、油症問題の根深さを感じた。

それぞれ聞き取った話は世代に分け、健康問題や生活への影響、思いをまとめた。例えば、青年期（13、17歳）に下痢や倦怠感で「進学、就職活動に支障があった」。壮年初期（18、30歳）には皮膚症状で容貌が変わり、次世代影響の不安も相まって「結婚できない、（あるいは）婚約を破棄される」人がいた。聞き取りを通して、働くことが難しくなったり、結婚や妊娠、出産を諦めたりするなど、人生の節目に大きな困難があったことが分かった。

学生の長友夏海さん(22)は「被害者は、症状と折り合いをつけて暮らしている。生活の中に油症の苦しきがあるという視点が重要だと思う」と語る。

学生たちは、差別や偏見に苦しんだ被害者が「知ってほしいけど、知られたくない」という葛藤を抱えていることにも気付いた。保健師を目指す柏さんは「看護学生だから伝えたい」と話してくれた人もいた。これから医療職に就く人間として、いろんな分野で正しい知識を身に付け、目の前の患者に対し、寄り添う気持ちを誠実に伝えていきたい」と決意を語った。

（三代直天）



長崎新聞（平成29年11月25日）掲載記事

地域課題の解決策提案「しまなびプログラム」

## 学生ら島での活動報告

しまなびプログラムでの活動を報告する学生ら  
佐世保市、県立大佐世保校

県立大佐世保校でシンポジウム



佐世保市川下町の県立大佐世保校などで23日、学生が県内の離島に滞在し地域課題の解決策を提案する「しまなびプログラム」に

2015年に本格的に始

めたしまなびプログラムでは、学生が県内の七つの離島に4泊5日で滞在。住民への聞き取り調査や意見交換を通じ、人口減少や産業衰退といった課題の解決を図るアイデアを考案する。

シンポジウムではこれまでに受講した佐世保校とシールホルト校の学生6人が登壇し、香岐の特産品を使用したカツサンドの開発や小値賀島での農業ボランティアなどの活動を報告。島民との出会いやリーダーシップの向上を成果とする一方、「夏のフィールドワークだけでなく授業が始まる春から島の人と関わりたい」と話を聞くだけでなく、交流を深め島民から本音を言ってくれる形がしまなびの本来の姿」など今後の課題も投げ掛けた。

本年度の受講生の活動報告もあり、両校の10チームが発表。計4チームが学長賞を受賞した。

（嘉村友里恵）

長崎新聞（平成29年12月2日）掲載記事

香岐の食材で作るカツサンドの開発に同級生と取り組む。「香岐はいい素材がそろっている」「自分たちもやってみよう」と島が動きだすきっかけにした。

昨年、学生が離島に滞在し振興策を考案する県立大の「しまなびプログラム」で訪問。活性化策として香岐牛やアシ、アスパラを使ったサンドイッチを発表し学長賞に選ばれた。その後「世間の評価を知りたい」と商品化

香岐の特産品を使ったカツサンドを開発する県立大生 堀 拓真さん



### いい食材そろっている

を決意。4月から試作を重ねてきた。10月に長崎市のスーパーで2種類を販売してすべて売り切った。「安く

なかったで、売れるか不安だった」と打ち明ける。それでも売れという結果に「香岐に力があるからこそ」と手応えをみしめる。

パッケージの考案や島内のバスツアーとの連携などやりたいことは山積み。しかし就職活動のため今後は相談役として後輩を支える。「カツサンドが香岐の役に立つ存在になってほしい」。兵庫県出身、同大3年の20歳。

（嘉村友里恵）

長崎新聞（平成29年12月16日）掲載記事

**県公立大学法人  
教育研究で協定**

自然科学研究機構と  
県立大を運営する県公立  
大学法人（稲永忍理事長）  
は15日、国立天文台など国  
内五つの研究所を運営する  
大学共同利用機関法人「自  
然科学研究機構」（東京、  
小森彰夫機構長）と、研究  
者が組織の枠を超えて教育

研究活動に取り組み「クロ  
スパポイントメント制度」  
に関する協定を結んだ。  
協定は来年4月から2年  
間。これに伴い同機構分子  
科学研究所の倉橋拓也助教  
（45）が来年4月から県立大  
にも栄養健康学科准教授と  
して在籍。基礎化学などの  
科目を担当する。県公立大  
学法人での同制度の活用は  
2例目。




佐世保市内で開かれた締  
結式で小森機構長は「将来、  
機構で働きたいという夢を  
持った学生が現れることを  
期待している」とあいさつ。  
稲永理事長は「世界最先端  
の研究をする教員に学生が  
直接教わる絶好の機会で、  
県民にも情報発信したい」  
と述べた。

小森機構長と、国立天文  
台子り観測所の伊王野大介  
准教授の記念講演もあった。  
（荻川裕之）

長崎新聞（平成30年1月15日）掲載記事


**石だたみ**  
県立大3年の有  
志5人が北松小  
値賀町のお薦め  
スポットなど魅  
力を紹介する冊子「写真」  
を約千部製作し、県内の大  
学で配布している。島民の  
視点を生かそうと、県立北  
松西高（同町）の協力を得  
て、2年生12人に記事を得  
依頼した。

○：学生の自主的な活動  
を支援する同大の事業に採  
択され、昨年10月に同町を  
訪問。高校生と一緒取材  
し、文章の校正などを助言  
した。冊子はカラーA3判  
を四つ折りにした。増刷し  
て長崎、佐世保両港のター  
ミナルにも置きたい考え。



○：釣り場など想定外の  
アイデアが高校生から出た  
という大学生のリーダー、  
池田未来さん（21）は「今回  
だけでは紹介しきれないの  
で第2弾、3弾と続けられ  
れば」と続編への意欲を語  
る。（山本陽一）

長崎新聞（平成30年1月31日）掲載記事

<p>県立大と3高専 人材育成で協定</p> <p>情報セキュリティ教育 県立大と佐世保高専、熊 本高専、沖縄高専は30日、 情報セキュリティに関する 人材育成の強化や教員間 の共同研究を推進するた めの連携協定を締結した。 県立大は、昨年度に国家機 関や大手企業へのサイバー 攻撃などに対応できる専門 家を育成する国内初の「情報 セキュリティ学科」を設置。 入学者は定員40人に対し、 2016年度に42人、17年 度に43人が入学している。</p> <p>全国51の高専では、国の 事業の一環で、サイバー攻 撃やその対策など基礎知識 を体系的に学ぶ教育を導入 している。全国5ブロック のうち、九州・沖縄地区で は、佐世保高専が拠点校と して中心的役割を果たし、 実践校の熊本高専と沖縄高 専が連携している。</p> <p>同日、西彼長身町の同大</p>	 <p>長崎県立大学と佐世保工業高等専門学校、 熊本高等専門学校及び沖縄工業高等専門学校との 情報セキュリティに関する連携協力に関する協定締結式</p> <p>県立大の太田学長、佐世保高専の東田博道 学長、熊本高専の長谷川校長、沖縄 高専の安藤校長</p> <p>↓長身町、県立大シーボルト校</p>	<p>シーボルト校で協定締結式 があり、県立大の太田博道 学長、佐世保高専の東田博 道学長、熊本高専の長谷川 二校長、沖縄高専の安藤安 則校長が協定書に署名。</p> <p>太田学長は「九州・沖縄 地区で情報セキュリティ 教育に熱心に取り組む三つ の高専と協力できるのは心 強い」、高専を代表して佐 世保高専の東田校長は「早 期専門教育ができるのが高 専の特長。協定を生かして 専門的な人材の育成に力を 注ぎたい」と語った。</p> <p>協定では、日々進化する</p>	<p>サイバー攻撃の手段を共有 し、学生に周知。対策に生 かす。県立大の教員が各高 専へ出向き、講演するなど 情報セキュリティ教育の 充実を図る。（猿渡利子）</p>
---	--	---	---



# 「しま」と向き合い、「しま」に学ぶ

文部科学省／地(知)の拠点大学による地方創生推進事業「COC事業総合シンポジウム」

## 地(知)の拠点 「しまなび」プログラムの未来に向けて—長崎のしまに学ぶ—

**実況速報**

**学びが生きているのは現場**

潮水忍理事長、太田博道学長をはじめ、文部科学省の大臣やCOC事業および地(知)の拠点大学による地方創生推進事業「COC事業総合シンポジウム」の開催を機に、長崎のしまに学ぶ。現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。

文部科学省 高等教育局 大学政策課長 平野博紀氏

「しまなび」プログラムの重要性を強調し、現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。



中島中道理事長、朝水忍理事長、太田博道学長らによる「しまなび」プログラムの意義などについて述べたシンポジウム。会場は長崎県立大学大会場。

島の魅力や課題について学び、県立大学(太田博道学長)のプロジェクト「しまなび」に学ぶ。現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。

シンポジウムでは昨年度実施した「しまなび」プログラムの成果や、現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。

**「しまなび」プログラム**

「しまなび」プログラムの意義や、現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。

**セッション**

**体験後の学生が語る 成果と課題について**

中島 中道理事長、朝水忍理事長、太田博道学長らによる「しまなび」プログラムの意義などについて述べたシンポジウム。会場は長崎県立大学大会場。

中島 中道理事長、朝水忍理事長、太田博道学長らによる「しまなび」プログラムの意義などについて述べたシンポジウム。会場は長崎県立大学大会場。

**中島「しまなび」プログラム**

「しまなび」プログラムの意義や、現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。

現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。

**中島「しまなび」プログラム**

「しまなび」プログラムの意義や、現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。

現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。

**「島を使って」「フォローアップを」発言相次ぐ**

長崎県から長崎県立大学長 朝水忍氏

「しまなび」プログラムの意義や、現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。

**「しまなび」プログラムの未来に向けて**

現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。

**今年度の「しまなび」活動報告**

「しまなび」委員各グループを代表して、現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。現場での学びが、現場で生きているのは現場。

国際経営学科の2年生(59名) 全員が入学から1年半でTOEIC® 600点以上達成!!

長崎県立大学 UNIVERSITY OF NAGASAKI

長崎県立大学 国際経営学科 2年生のTOEIC® 600点以上達成!!

大学広告

# 長崎県立大学で、成長実感!

学生の成長のためのカリキュラムが充実している長崎県立大学。常に先を見据えて前進している大学の学びの特色を「地域性」「国際性」「専門性」のテーマで、3回にわたってご紹介します。

## 「しま」を通して、地域の

**多くのことを  
学ぶことができた  
プログラムに  
感謝しています。**

個人的に「しまなび」プログラムで得た最大の収穫は、リーダーとしての経験です。グループの意見の集約はもちろんです。が、個々の能力を生かすことができるような方針を立て、全員が足並みを揃えられているか、つまり、役割だとは思いません。このことに気付くことができたのは、これまでリーダーをサポート

「昨年、私が「しまなび」プログラムで参加した「しま」は、「五島」です。観光客や若者にこの島の伝統文化をPRするため、特産品でありながらあまり知名度がない。かんころ餅に焦点を当て、新しいパッケージづくりをテーマに選びました。11人いるグループのリーダーとして、聞き取りやアンケートを実施するなど、全員で努力を重ね、若者にも受け入れられるパッケージが完成しました。そのパッケージを実際に使っていたところ、「五島」の餅屋さんに依頼したところ、「面白い」と採用していただきました。

学生コメント  
Yukiko's Voice



国際社会学部 国際社会学科 2年 岡本 裕里子

するような立場が多かった私にとって、たいへん意義深いことでした。  
また、プロジェクトマネジメントとは何か、相手のニーズに応えることとは何か、そして人と人の繋がりを大切にすることはどういうことかなど、多くのことを学びました。私自身、プロジェクトを通してコミュニケーション力が高まったと感じていますし、チャレンジした日々は、これからもっと成長していくためのベースになったと思います。



長崎県立大学  
UNIVERSITY OF NAGASAKI



ホームページ



Facebook

## 大学広告

## 地域性

(6月号)

## 国際性

(8月号)

## 専門性

(10月号)

国際経営学科の語学力向上に関する学びを中心に紹介。

日本の大学で唯一専門的に情報セキュリティが学べる学科を中心に紹介。

## 課題と向き合う。【長崎県立大学独自の「しまなび」プログラム】

「しま」を舞台に  
学生たちは  
自主的に学び  
成長しています。

## 教授コメント

Professor's Voice

本学では、事前に計画を作成したうえで、県内の7つの「しま」でフィールドワークを実施する「しまなび」プログラムを導入しています。「しま」を佐世保校、シーボルト校に次ぐ第3のキャンパスとして位置づけ、4泊5日のフィールドワークを通じて学生が地元住民と交流しながら課題を発見し、解決策を模索、提案する独自の授業です。

「しまなび」プログラムの特徴は、始めから終わりまでの全期間を学生自らが考えて学ぶところにあります。学生の活発なディスカッションを通して、自主的に取り組むプログラムになっており、課題に対して学生自身が解決策や対応方法を考えることで、課題発見力、分析力、積極性など社会人として求められる能力を養うことを目標としています。

3年目となった昨年度は計530名の学生が履修し、アンケートでは約98%の学生が参加して良かったと回答しています。学生たち

が楽しみながら学んでいることは、たいへん意義があることだと思いますし、実施後の「しま」の関係者との意見交換会でも、「一年を経ることに洗練されてきて優秀な取組がなされている」など、高い評価をいただいています。

長崎県には約600もの「しま」があり、そのうち有人島は72島あります。長崎県の多くの「しま」は、急激な人口減少や少子高齢化が進行しており、今後、日本に生じるであろう問題にいち早く直面しています。離島が多い長崎だからこそできる「しまなび」プログラムは、地域のことを深く学ぶことを通じて、日本の将来をも学習する教育プログラムです。「しま」の方々からもプログラムの継続を歓迎されていますし、本学としても、学生の成長のため、地域貢献のため、長期的な視点で取り組んでいきたいと考えています。



地域連携センター  
中島 洋 特任教授

## 経営学部／地域創造学部（佐世保校）

〒858-8580 長崎県佐世保市川下町123 TEL.0956-47-2191 FAX.0956-47-6941

## 国際社会学部／情報システム学部／看護栄養学部（シーボルト校）

〒851-2195 長崎県西彼杵郡長門町本町2丁目1-1-1 TEL.095-813-5500 FAX.095-813-5220

- 経営学部 [経営学科 / 国際経営学科]
- 地域創造学部 [公共政策学科 / 実践経済学科]
- 国際社会学部 [国際社会学科]
- 情報システム学部 [情報システム学科 / 情報セキュリティ学科]
- 看護栄養学部 [看護学科 / 栄養健康学科]

答えのない中で“物事を深く追求する”ことの大切さを知りました



横町 美咲  
（よこまち みさき）  
経営学部経営学科2年

「しまなび」プログラムでは、グループのリーダーを務めた。メンバーそれぞれの個性を生かした役割分担をしたことで、内容の濃い提案ができたと思います。」と語る。

事前の計画では、しまを訪れた人たちが郷土料理を作って味わえる体験型プログラムを提案する予定でした。しまの魅力が伝えることが、現地の活性化につながるかとシンプルに考えていたんです。

ところが、フィールドワークで新上五島町に行き、住人や役場の方たちにヒアリングすると、例えば働き口がなく若者が減っていくことに不安を持ちながら、生活自体には満足している人も意外多い。ただ本土から観光客を呼び込めばいいわけではないことがわかりました。

そこで現地2日目に急速新たなプランも考えることに。グループ全員で知恵を出し合い、「高校での板前コースの新設」「魚カフェの新店」などを提案に加えることを決めました。プランを再検討する中で実感したのは、私たちが主に「しまの現状」だけを見ていたということ。そこに暮らす人たちにとっては、「これから」が重要なんだと気付かされました。

「しまなび」プログラムを通じて感じたのは、何より「物事を深く追求する」ことの大切さです。高校までの学びには、ある種の枠組みや決ま

った答えがありました。しかし今回の学びは、まったくの白紙から「しまのために何ができるか」を考えなければならぬ。人口減少、少子高齢化という問題の奥にある「しまの方たちの思い」に目を向ける必要がありました。

うれしいことに新上五島町では、私たちの提案を具体化する動きもあるとのこと。 「しまなび」プログラムを通じて知った、現場の生の声をもとに考え、相手のニーズに応えることの大切さを社会に出てからも意識していきたいと思っています。



新上五島町で現地視察や役場の人々へのヒアリングを行う学生たち。誰に何を聞くか、どこを見に行くかなども、基本的に自分たちで考える。このフィールドワークが、学生たちの学びへの意識を高めるのに重要な役割を果たしている。

中島 一言でいえば、学生たちが自由に考え、行動できる場を大事にする。仮に学生たちのアイデアが現実的でないと感じて、それを正すようなことは決してしません。これまでの取り組みを間近で見えてきて感じるのは、学生たちが本来的に自主性や自立心を持っているということです。高校までの学びは必然的に受け身のため、なかなかそれを發揮する機会がなかった。そうした潜在的な力を引き出すことが教員たちの役目なのです。

人のため、という視点を社会で生かしてほしい

一方で、学生たちに自由な場だけを与えてしまうと、議論の方向性が定まらず、話し合いが空転したり、停滞したりしてしまいます。そこで「しまなび」プログラムでは、スマートフォンやPCなど運動した独自のeラーニングシステムを活用し、グループワークの進め方についてサポートしています。その中で、一人一人が必ず何らかの役割を担うような仕組みも設け、全員が主体性を發揮できるように工夫しています。

例が複数出てきています。もちろんそれ自体素晴らしいことですが、より大きな意味を持つのは、しまのために、と本気で考えた提案が評価されている事実です。学生たちにはぜひ、人のため、社会のため、という視点で課題に立ち向かった経験、それによって得られた達成感を社会で生かしてほしいと思います。

「しまなび」プログラムで扱う課題は、広く社会に共通するものです。その意味でも、学生たちにとってしまでの実体験は貴重なはず。履修後、学生たちから「多面的にものを考えられるようになった」という声が多く聞かれることは、私たち教員にとって大きな励みです。これからも、独自の解決策を生み出せる創造性豊かな人材の育成に力を注いでいきたいと思っています。

「課題ではなく、協議することが大切」という主旨の発言が印象的だった。二つは似ているようで、別のものだ。今、企業においてダイバーシティの重要性が叫ばれている。多様な個性を持つ者同士が連携することで、組織は強くなる。今年度も707名が受講した「しまなび」プログラムは、自分と他者の違いを理解し、自分自身を再発見する体験としても有意義なものといえるだろう。

取材を終えて

取材を終えて

取材を終えて

取材を終えて

特別広告企画 注目の大学

## 長崎県立大学

実践的な学びを追求し、自ら考え、行動できる人材を育てる①

独自の「しまなび」プログラムは  
学生たちをどう変えるか？

中島 洋

〔ながしま・ひろし〕

長崎県立大学 地域連携センター  
特任教授

長崎県内の高等学校において教諭、校長を務める。また、県教委高校改革推進室長、教育次長を務めた後、2014年4月就任。

## 学生たちが潜在的に持っている力を引き出すのが教員の役目

**全**国で最も離島が多い……。そんな地理的特性を生かした長崎県立大学独自の「しまなび」プログラム。県内の七つの離島を、もう一つのキャンパスに位置付け、全学必修のPBL「課題解決学習」として実施される。学生は講義科目と4泊5日に及ぶ「しま」でのフィールドワーク（交通費・宿泊費等は大学負担）を通じて現地の課題解決を手助けする。人口減少や高齢化など、しまにおける課題は単に離島の問題ではなく、日本全体、ひいては世界にも共通するものだ。文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に採択され、履修学生の約97%が「有意義だった」と答えるこのプログラムの真価とは……。地域連携センターの中島洋特任教授に聞いた。

「しまなび」プログラムの特徴はどんなところにありますか。中島 学生たちは10人ほどのグループで、担当するしまについて事前にリサーチし、例えば観光誘致や特産品の販売といったプランを立案します。その後フィールドワークに臨むのですが、実は多くの場合、計画の変更や調整を迫られることになります。実際にしまの人たちの声を

### コミュニケーションが 課題発見には欠かせない

聞くと、頭の中で考えていたプランと現実とのギャップに気付くのです。リアルな体験に基づき、本物の課題を見いだし、柔軟に対応する。まさにこの過程こそが重要だと考えています。自分たちのやりたいことではなく、しまの人たちが求めていることを真剣に考えるためには、想定していなかった事態と向き合う必要があり、学生たちは現地ですぐに話し合いを始め、プランを繰り返します。「課題発見力」は社会人基礎力の一つとして重視されています。中島 社会の急激な変化に伴い課題自体が刻々と変わる中、不可欠な力だと思えます。そして、その前提となるのがコミュニケーション力。自分の意見をきちんと発信し、相手の意見を聞いたうえで、自らの考えを修正し、再び発信する能力です。ともすると今の学生は、周囲を気にするあまり、人に合わせることに意識が向きがちです。しかし、そうした「同調」の中で真の課題や解決策を探るのは難しいと思います。互いに意見を戦わせ、認め合ったうえで、協調することが本当の意味でのコミュニケーションであり、そうした中でこそ議論は深まります。「しまなび」プログラムでグループ活動を大事にしているのはそのためです。――指導する先生方が心がけていることはありますか。

地(知)の拠点 00



平成25年度～平成28年度

長崎新聞（平成25年9月17日）

### 県立大 県内離島で体験学習

#### 人材育成事業 来年度にも必修化

県立大太田博樹学長は、問題に直面し、主体的に度入学生が必修化する。本年度、学生が県内離島に、基づいた解決策を考へ、社

一定期間滞在して体験学習 会を通用する人材を育成す。1週間あたり五島、志賀を学ぶ試み始める。人口 文部科学省の本年度新対島に滞在、関係課減少や少子高齢化が急的 事業にも採択早ければ来年の開催を考へたり、伝説

的な文化の掘り起し、 島民の幸福度調査をする。離島の活性化を図るため、開始する時期は検討中。

離島各地にサテライトキャンパスを設置する方針。タブレット型端末などを用いた情報通信技術（ICT）教育を導入し、フィールドワークで活用する。

文科省は8月、地域コミュニティの中核を担う大学などの機能強化を図る「地（知）の拠点整備事業（大学COE事業）」に、319件の応募から5件を採択。同大は県内唯一選ばれ、関連経費として5年で約2億円の助成を受ける予定。

同大は「地域を通じて広い視野を身に付ける。グローバル人材育成」という考え方で、島を在学中、シボルト校に次ぐ第3のキャンパスと捉え、学びの場とした」としている。

（中島道）

読売新聞（平成25年10月31日）

### 県立大、「しま」体験必修化

#### 離島に滞在し課題解決考える

県立大（佐世保市、長門町）は、全学生を対象にした必修科目「しま」体験学習プログラムを、来年度から段階的に開始する。同大では10年度から1階のゼミや学部に所属する学生が離島学習を行っているが、全学生に必修を義務づけるのは初めての試みで、全体的にも珍しいという。同大は「長門の特色である離島を佐世保、長門に繋ぐ第3のキャンパスとして、新たな学びの場を提供したい」としている。

同プログラムでは、グループまで学生が主体となつて1泊2日間の滞在がある。問題解決学習を自覚することについて調べたり、討議したりしてその課題を再考する。対象の離島は船や航空機で約1時間、約1泊2日、島に限定。現在、学生が「しま」の体験として、約1週間、島に滞在し、学生が「しま」の課題を再考する。対象の離島は船や航空機で約1時間、約1泊2日、島に限定。現在、学生が「しま」の体験として、約1週間、島に滞在し、学生が「しま」の課題を再考する。

佐世保、平戸市、新上五島町と連携

文科省の「地（知）の拠点整備事業」採択されており、同大は年間での約2億円の助成を受ける予定。

同大総長は「離島は少子高齢化や伝統文化の継承不足など、数百年に亘る課題を抱えている。学生は時代に先駆けるべき。その力を発揮してほしい」と話している。

長崎新聞（平成25年10月6日）

### 論説 (2013-10-6)

#### 県内大学と地域

#### 連携し新たな可能性を探る

平戸市、県立大、長崎国 伝説並の保存継承、変遷 にも取り組んできた。 県大は10月、人口減少や少 家の活用など見直し、 こうした実績が評価され、今年8月、同大の離島 子高齢化を同時に抱える 協定締結して、里山地域 大はそれぞれに地域と連 さまな地域課題について 市長が、これからの地域 築努力を「長崎しま して、その解決策を共同研究 くりには第三者の目と、に学び」が文科省の エネルギが、ぜひ必要」と する役割を担うことになり、 と大学への期待を込める。 に採択された、本県離島 学生が地域に入って調査研 究を進め、提言をまとめて、 長崎国際大の安部直樹学長 を自任した、前期事業で、

同大では離島全域を在学中 校、シボルト校（西彼杵 島町）に次ぐ、第3のキャンパスと位置付け、学びの場とした」と話している。

長崎国際大も、本県観光振興の策に力を入れている。 いるほか、留学生の県内小 中、高校に派遣する。国交 化国際教育」を掲げ、国際 止安部という方面から地域 振興に貢献している。

また、長崎大は10年11月 戸市と包括連携協定を結ん っており、県内10の大、短 大はそれぞれに地域と連 携協力を進めている。

県内大学の知性と若いエ ネルギーが、地域と結んで 前進すれば、本県の未来は 大々開けるはずである。

（高橋信雄）

長崎新聞（平成25年12月18日）

## 22日にシンポ「長崎のしまに学ぶ」

県立大（太田博道学長）は本年度から取り組んでいる「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」の開始記念シンポジウム「長崎のしまに学ぶ」を22日午後1時から、新上五島町有川郷の鯨賓館ホールで開く。

文科省は8月、地域コミュニティーの中核を担う大学などの機能強化を図る同事業に、県内では唯一、県立大を採択。同大は早ければ来年度入学生から、県内離島に一定期間滞在する体験学習を必修

県立大「地の拠点整備事業」記念

幸福度調査など  
学生が事例報告

新上五島

化し、学生が学んだことを地域に還元し活性化につなげる考え。

シンポジウムでは、同大学生が11月から同町に滞在し調査した「上五島の幸福度調査」「郷土料理の伝承について」などの事例を報告するほか、地域おこしグループの代表らと交え「しまが伝えたいこと・しまに学ぶこと」と題したパネルディスカッションも開く。

入場無料。参加申し込み不要。同シンポジウム校総務企画課（電095・813・5500）。

（佐藤武郎）

長崎新聞（平成25年12月23日）

県立大生が伝統芸能  
伝える大切さを訴え

新上五島でシンポ

県立大（太田博道学長）は22日、本年度から取り組んでいる「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」の開始記念シンポジウム「長崎のしまに学ぶ」を新上五島町有川郷の鯨賓

館ホールで開いた。

文部科学省は8月、地域コミュニティーの中核を担う大学などの機能強化を図る同事業に県内では唯一、



学生による事例発表もあったシンポジウム「長崎のしまに学ぶ」  
新上五島町、鯨賓館ホール

同大を採択。同大は早ければ来年度入学生から、県内離島に一定期間滞在する体験学習を必修化し、学生が学んだことを地域に還元して島の活性化につなげていく。

町民ら約170人が来場。学生の事例発表では、10月から今月にかけて、同町で実施した「上五島の幸福度調査」の結果などを報告。

地域おこしグループの代表ら5人が登壇したパネル討論「しまが伝えたいこと・しまに学ぶこと」もあった。

「地域コミュニティーの形

（佐藤武郎）

### 五島市と県立大 包括連携協定を締結



協定書を取り交わし、握手する太田学長(右)と野口市長

#### 人材育成と活性化目指す

五島市は6日、県立大(太田博道学長)と人材育成や共同研究などの面で互いに協力し合う包括連携協定を結んだ。同大は新年度から県内離島での実習を必修化する科目を始める予定で、学生を受け入れる側の市は地域の課題解決や離島の活性化につなげたい考え。

同大は同様の協定を県内4市町と結んでいる。新年度からは佐世保校(佐世保市)とシーボルト校(西彼長与町)の全学部の新入生は離島の現状について学習。テーマ設定は学生に任せ、2年生からは五島や対馬など現地でフィールドワークに取り組むという。市役所であった協定書の調印式で、野口市太郎市長は「五島は人口流出や少子高齢化など将来の日本が遭遇する課題がすでに現れており、大きな勉強の場になるはず」とあいさつ。太田学長は「都市部との違いを感じるだけでも学生の刺激になる。若者、よそ者の視線で活性化を考えたい」と述べた。

(後藤洋平)

### 五島市と包括連携協定

県立大  
必修科目  
新開講  
離島の現状学ぶ場に



協定書を取り交わす野口市長(左)と太田学長

新年度から1、2年生を対象に必修科目「しま」体験教育プログラムとなる五島市と「包括連携協定」を結んだ。

佐世保市、平戸市などに続いて5番目。同プログラムは離島の現状や課題を学ぶ講義科目と希望する離島に約1週間滞在し、体験を通して島の現状を学ぶ演習科目を義務化している。協定では相互の資源を活用して同プログラムによる①共同・受託研究②地域貢献③人材育成と交流④などに協力するとしている。

太田博道学長は「学習は学生の自主性に任せるが、若い発想で地域づくりに貢献でき

ば」。野口市太郎市長は「島外の視点で問題提起してもらえば、市民の刺激にもなる。更に連携を強化したい」と期待を語った。

【椿山公】

西日本新聞（平成26年2月7日）

## 県立大と五島市 島活性化へ協定

### 学生、現地で体験学習

県立大と五島市は6日、役所であった調印式で、地域活性化へ向け連携する協定を結んだ。田博学長は「離島が多い長崎県の大学ならではの協定を結んだことは、研究者や学生が五島で社会貢献をしたい」と語り、人口減少などの課題を学ぶ。また、離島を学ぶ講義を10人、解決策を探る。五島市は、県立大は新年度入学生から2年生の必修にする。



一組で県内の離島の現状を調べ、1週間ほど五島市などに滞在して活性化策を考える。県立大の学生が離島で体験学習をして、地域活性化を支援する教育は文部科学省の「地・短」の拠点整備事業に採択されている。県立大は平戸市や新上五島町など4市町と同様の協定を結んでいる。

西日本新聞（平成26年2月19日）

## 県立大 志岐市と連携協定 離島課題解決へ協力

長崎県立大は18日、離島年次の履修を義務づける。が抱えるさまざまな課題のプログラムは、島の現状や解決を目指す、志岐市と包摂課題を学ぶ講義科目と島に括連携協定を結んだ。約1週間、10人1組で滞在。共同研究や人材育成などして課題を調べる演習科目などで協力する。連携協定は、島経済の活性化や佐世保市や五島市などに続くコミュニティの形成などをいって6自治体目。研究していく。



県立大は新年度から、必修の志岐文化ホールでの調印式で、志岐をキャンパスに見立てたプログラムを導入し、全学生が自分の発想で活動し、力を注ぎたい」と話し、学部を対象に1、2島の課題解決に向けて知恵を絞る。地域貢献できればと抱負。白川博一市長は「志岐をキャンパスに見立て、一緒に活動していきたい」と話し、志岐市は18日、県立大と協定を結んだ。田博学長と入材育成や共同研究などの分野で互いに協力する。包摂連携協定を結んだ。同大が同様の協定を締結するのは県内でも6市町目。同大は新年度から県内離島での実習を盛り込んだ。志岐市郷ノ浦町の志岐文化ホールで、長崎のしまに学ぶ（仮称）を始め予定。学生は講義を受講した後、2015年度から、協定を結んだ。離島に1週間程度滞在。現地で地域の課題を見つけて学習する。志岐市郷ノ浦町の志岐文化ホールで、白川市長と田博学長が協定を調印する様子。

長崎新聞（平成26年2月20日）

## 志岐市と県立大 人材育成などで協定

志岐市は18日、県立大と協定を結んだ。田博学長と入材育成や共同研究などの分野で互いに協力する。包摂連携協定を結んだ。同大が同様の協定を締結するのは県内でも6市町目。同大は新年度から県内離島での実習を盛り込んだ。志岐市郷ノ浦町の志岐文化ホールで、長崎のしまに学ぶ（仮称）を始め予定。学生は講義を受講した後、2015年度から、協定を結んだ。離島に1週間程度滞在。現地で地域の課題を見つけて学習する。志岐市郷ノ浦町の志岐文化ホールで、白川市長と田博学長が協定を調印する様子。



協定を交わし、握手する田博学長（右）と白川市長  
—志岐市、志岐文化ホール

志岐市は18日、県立大と協定を結んだ。田博学長と入材育成や共同研究などの分野で互いに協力する。包摂連携協定を結んだ。同大が同様の協定を締結するのは県内でも6市町目。同大は新年度から県内離島での実習を盛り込んだ。志岐市郷ノ浦町の志岐文化ホールで、長崎のしまに学ぶ（仮称）を始め予定。学生は講義を受講した後、2015年度から、協定を結んだ。離島に1週間程度滞在。現地で地域の課題を見つけて学習する。志岐市郷ノ浦町の志岐文化ホールで、白川市長と田博学長が協定を調印する様子。

化ホールであった調印式で、白川博一市長は「人口減少や1次産業の不振など課題は多い。島全体をキャンパスとして使ってもらいたい」と歓迎。田博学長は「社会貢献も大学の使命の一つ。学生には、自分できき課題を解決できる力を付けさせたい」と述べた。（立場川大術）

西日本新聞（平成26年2月25日）

### 対馬市と県立大が協定 離島活性化へ連携

対馬市は21日、長崎県立大と、2015年度から本学と包括連携協定を結んだ。離島が抱えるさまざまな問題解決を目指す。学生は大学で受調後、育成や学術研究の分野で双方向に協力を進め、島に在る人材の活用を図る。協定は、対馬市役所であった調印式で、太田博道学長は「対馬市は、社会貢献が求められる。大学の持つ力を、地域の活性化に役立てたい」とあいさつ。財部能成市長は「県立大とハイブが連携することで、地域の活性化に貢献できることをうれしく思います」と述べた。



調印式で握手する太田学長（左）と財部市長

長崎新聞（平成26年2月26日）

### 対馬に役立つ人材を

#### 県立大、市が連携協定

対馬市は21日、長崎県立大と包括連携協定を結んだ。協定は、対馬市が抱えるさまざまな問題解決を目指す。学生は大学で受調後、育成や学術研究の分野で双方向に協力を進め、島に在る人材の活用を図る。協定は、対馬市役所であった調印式で、太田博道学長は「対馬市は、社会貢献が求められる。大学の持つ力を、地域の活性化に役立てたい」とあいさつ。財部能成市長は「県立大とハイブが連携することで、地域の活性化に貢献できることをうれしく思います」と述べた。



影響を受け、離島活性化に貢献する。太田学長（左）と財部市長

長崎新聞（平成26年3月29日）

### 対馬に役立つ人材を

#### 県立大、市が連携協定

対馬市は21日、長崎県立大と包括連携協定を結んだ。協定は、対馬市が抱えるさまざまな問題解決を目指す。学生は大学で受調後、育成や学術研究の分野で双方向に協力を進め、島に在る人材の活用を図る。協定は、対馬市役所であった調印式で、太田博道学長は「対馬市は、社会貢献が求められる。大学の持つ力を、地域の活性化に役立てたい」とあいさつ。財部能成市長は「県立大とハイブが連携することで、地域の活性化に貢献できることをうれしく思います」と述べた。

元々、対馬市は、島に在る人材の活用を図る。協定は、対馬市役所であった調印式で、太田博道学長は「対馬市は、社会貢献が求められる。大学の持つ力を、地域の活性化に役立てたい」とあいさつ。財部能成市長は「県立大とハイブが連携することで、地域の活性化に貢献できることをうれしく思います」と述べた。

同町役場であった締結式には、太田学長や西郷三町長ら約10人が出席。太田学長は「学生の取り組みなどが今後、島の活性化に発展してくれることを願う」と話した。西郷三町長は「若者たちの目標が、まちづくりに大きく寄与してくれることを期待する」と述べ、締結書を書いた。

（佐藤武郎）

日本農業新聞（平成26年9月19日）

### 離島の農業 大学生学ぶ

JACの管内  
「夏場・ごとう」長崎県  
立大学の2年生5人が、

五島市の農業を学ぶため JACごとう本店や管内の農場（ほしよ）などを訪れた。県内の離島を訪れ、地域を学習し、実践のフィールドとする「しま」体験教育プログラムの一環として初めて行われた。

農業をテーマに現地調査を行ったのは同大学経済学部経済学科木村務教授の学生グループ。JAC本店での管内概況説明の後、特産のタコ、肉用牛、パプリカの生産者について話を聞いた。

パプリカの収穫を見学する大学生と生産者

パプリカの生産者を行う 五島パプリカの園主吉野社長が「夏場の玉と冬場の玉とでは価格設定などを参考にしたい」と話した。学生からは「夏場の作物なので、台風対策はどうしていますか？」などの質問があった。



長崎新聞（平成27年8月11日）

### 大卒者の県内就職率50%超に

#### 長崎大など今秋事業着手

長崎大・長崎市片峰茂学長は、国の地方創生関連事業を活用し、大卒者の地元就職・定着を促進する事業に今秋着手する。県立大、長崎国際大、長崎短期大以上佐世保市、長崎純心大、長崎市も参画。来年度からのカリキュラム改編などで、5大・短大全体で41.8%の県内就職率を5年後に10%上げ、51.8%にする計画だ。

長崎大が現在計画しているカリキュラム改編では、県内企業や自治体などが長崎の経営、歴史文化、自然などを講義するほか、「観光」「海洋再生エネルギー」といった本県の強みを生かしたテーマを総合的に学ぶ地域課題横断科目を設ける。長崎国際大では、国際観光学科で学外ボランティアの参加を強化する。学科ごとに取り組みを拡充し、ほかの大学、短大も独自の取り組みや学科改編などを検討する。県内全大加盟の単位互換制度NICEキャンパス長崎も活用し、学生は5大・短大提供の授業科目を自由に選択できる。

#### 産学官連携 地元定着を促進

長崎大は事業化に向け、文部科学省の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」（COC+）に申請中で、9月上旬の採択を見込んでいる。今後、学内に事業を統括する「地方創生推進本部」を設置。関係大学、経済団体、自治体でつくる「COC+事業推進協議会」を組織し、具体的な取り組みを模索する。事業を管理し改善策を提案する「COC+推進コーディネーター」を外部から雇う。地元就職後も、実務能力とリーダーシップを養う研修などを通して、管理職にもなれるような人材を育てる財団法人「県産学官人材育成機構」を経営団体や自治体と連携して新設することを目指す。

5大・短大の昨年度の卒業生約3200人のうち、県内就職者は約千人。人材の地元定着は本県にとって喫緊の課題となっている。片峰学長は「地域を愛し、よく知り、地域活性化の中核を担える人材を育てたい」と話している。（猿渡莉子）

長崎新聞（平成27年8月20日）

### 「しまのフィールドワーク」 新上五島、杵岐で始まる

#### 県立大の学生 活性化策を提案

県立大・大田博道学長「18日、新上五島町と杵岐市の学生が県内の離島を訪れ、活性化策を提案する。下町まで向大の1、2年生計約600人を五島、対馬（地「短」）の拠点整備事業（全COC+事業）が、学生が現地の人々と交流する中で課題を発見、発信する力を身に付けることなどを目的に、今年から向大の必修科目となった。同時に選られた学生約100のうち、1割計10人が新上五島（山崎野原小学校、15人）、杵岐（15人）を訪問し、学生はグループに分かれ、1〜3年生が入れ交りながら町内各点や活性化策などの意見を募集した。

生徒からは「島内はバスが1時間に1本で、交通の便が悪い」「観光客を呼び込むために宿泊所を増やすべき」との声が出された。集まった意見は21日、同町有川集会所で関係者との意見交換会で発表する予定。

同日、杵岐市にも学生10人が来島。観光地では、土産品の材料や作り方を活用品からアレンジ、フェリス学院でミニマルでは島民や観光客に対し、島の課題と改善策についてアンケートを行った。（佐藤武樹、植村圭司）




長崎新聞（平成27年10月24日）

西日本新聞（平成27年10月28日）

### 離島活性化策を発表

県立大生「しまなび」プログラム



学生たちが離島の活性化策について発表した報告会  
—県立大佐世保校

県立大の学生が県内の離島を訪れ、活性化策を考える「しまなび」プログラムの学内報告会が23日、佐世保市川下町の佐世保校であり、学生たちがさまざまなアイデアを提案した。

地元住民と交流しながら実践的な学習を積み重ね、課題を発見、解決する能力を養う狙い、本年度から同大の必修科目となっており、佐世保校経済学部3年とシールポート校国際情報学

### 観光や農業、交通課題の解決策探る

この日は、経済学部の44グループが活動内容を発表。このうち、流通・経営学科の中村操井さん（20）ら7人のグループは五島市の観光客増加をテーマに掲げ、現地で住民や観光客にアンケートをし、実際に観光地へ足を運んだことを報告。観光客増加策として、宿泊施設での公衆無線LANサービス「WiFi」や「WiFiファイ」の整備を生か

し、受験生の勉強会場の場として、売り出すことなどを提案した。

国際情報学部の発表はシールポート校で27日に実施。年度内に離島住民向けの報告会も行う。（宮本宗幸）

### 離島活性化 学生が探る

### 県立大プログラム、現地に滞在 新特産品など提案



離島の活性化策について発表する県立大の学生たち

県立大の学生が県内の離島を訪れ交流人口の拡大や活性化への方策を考える「しまなび」プログラムの報告会が、佐世保市川下町の同大佐世保校で23日にあり、フィールドワークを通じた離島の課題や解決策について発表した。

離島が多い長崎の特性を生かし、島での生活や島民との交流を通じて学びを深めてもらおうと、同プログラムが本年度から必修科目になった。学生はグループ

### 佐世保

報告会では志岐や対馬、小値賀などを訪問したグループが新しい特産品や観光マップ作りなどをそれぞれ提案。課題として観光用道路の整備や案内板の不足などを挙げた。「癒や」をテーマに対馬の歴史や自然を生かした観光プランを提案した経済学部3年久保翔平さん（21）は「実際に足を運ぶことで観光地とすることができいい経験になった」と話した。（梅沢早）

長崎新聞（平成27年12月18日）

### 県立大と親和銀、FFG 産学連携協定を締結



協定書に調印した太田学長（右）と吉澤頭取  
—県立大佐世保校

県立大（佐世保市）と親和銀行（同市）、同行親会社のふくおかフィナンシャルグループ（FFG、福岡市）は17日、地方創生の推進を軸とする産学連携協定を結んだ。2016年度に学部学科を再編する同大の研究力や人材育成力と同行のネットワークを生かして、地元企業の活性化や若者の地元定着などを図る。

連携内容は、学生と地元企業のマッチングや大学発ベンチャーの支援、大学の研究を生かした経営相談など。同大卒業生の県内就職率は3割だが、協定を機に親和銀にとっては4件目。（永江倫子）

佐世保市川下町の同大佐世保校であった締結式で、吉澤俊介頭取は「優秀な学生の地元就職に貢献したい。新しい学部学科の研究成果も地元の発展につながると期待している」、太田博道学長は「銀行のノウハウや情報を生かして地域貢献活動を拡大したい」と話した。

同大が金融機関と産学連携協定を結ぶのは初めて。親和銀にとっては4件目。（永江倫子）

長崎新聞（平成27年12月20日）

「少人数向けタクシー観光」  
「廃校舎を公営住宅に活用」

## 活性化策を島民に提案

県立大生



離島の活性化について発表した学生  
県立大佐世保校

県立大の学生が県内の離島でフィールドワークをする「しまなび」プログラム全体の発表会が19日、佐世保校（佐世保市川下町）とシーボルト校（西彼長与町）をメイン会場に開かれ、学生がさまざまな活性化策を提案した。

離島で島民と交流しながら課題を発見、解決する能力を身に付ける目的で、本年度から同大の必修科目。経済学部2年と国際情報学部1年の計約600人が56グループに分かれ、8、9月に4泊5日で五島や吉岐、対馬など計7島を訪れた。発表会は、各島の遠隔会場とインターネット電話「スカイプ」でつなぎ、13グループが報告した。学生は、島民へのインタビュなどを通じて捉えた観光・交通・農業各面での課題を説明。「少人数向けタクシー観光はどうか」「廃校舎はI・Uターナー向け公営住宅などに活用できるのでは、などと島民に提案した。同大は、現地報告会も検討している。（永江倫子）

西日本新聞（平成28年1月28日）

親和銀 × 県立大



### 産学の情報を相互提供

親和銀行（佐世保市）と県立大（佐世保市）は、地元企業と学生の交流促進や、情報の相互提供、進学連携を図る協定を結んだ。親和銀行と大学の協定は長崎大、長崎総合科学大、長崎国際大に続き3年目、県立大との協定は初めて。先月1日に県立大佐世保校の古民家改修施設で親和銀行の代表者と親和銀行の代表者が協定を結んだ。協定内容は、親和銀行が県内企業への就職先を学生紹介し、県内への就職を向上させる取り組みなどを行う。同大は親和銀行の佐世保市

十八銀 × 長崎国際大



### 学生の県内就職アップ

十八銀行（佐世保市）は28日、地方創生を視野に地域の経済活性化や人材育成などを進めるための産学連携協定を結んだ。協定内容は、十八銀行の取引先企業を学生紹介し、県内への就職を向上させる取り組みなどを行う。同大は親和銀行の佐世保市

## 銀行と大学連携へ協定

佐世保

記者会見で、県民開放は優秀な学生を輩出する県立大との連携は光栄と語り、具体的な連携策として「地元企業を紹介し、学生の地元就職を促す」と説明。太田学長も「学生が難関に出向いて課題を研究するなどでも協力できる」と語った。（阿比留北斗）

同大は親和銀行の佐世保市

とも昨年11月協定を締結。県内の主要な行との連携などで、県内企業への就職率を昨年実績の32.6%から30.2%（昨年まで）に引き上げることを目指す。十八銀行と大学の協定は長崎大に次いで2件目。今後、大学の研究成果と企業ニーズのマッチングも協力して進める。

長崎国際大であった締結式で、安藤直樹学長は「地域創生に一体となって取り組んでいく」とあいさつ。十八銀行の森野一昭副頭取は「大学の特色である国際観光学科との連携も図りたい」と述べた。（阿比留北斗）



長崎新聞（平成28年2月19日）

## 県内就職率50%に

### 19年度目標 5大学と県など協定



長崎大など県内の大学・短大5校と県、長崎、佐世保両市は18日、卒業生の県内定着に向けて連携する協定を結んだ。5校は地方創生を担う人材育成に取り組み、学生の県内就職率を2014年度の40%（895人）から19年度に50%（1138人）へ引き上げることを目指す。

文部科学省が進める「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の一環、長崎大が事業申請して採択され、県立大、長崎国際大、長崎純心大、長崎短期大が参加した。大学側は、地元志向を養う教育プログラムや、県内企業でのインターンシップ（就業体験）などを進め、地域が求める人材の育成に努める。県と長崎、佐世保両市は、地元就職を希望する学生と企業との橋渡しや、雇用を創出するため大学と連携した産業振興などに取り組む。

長崎大は、地元就職した学生が卒業後も高度な実務能力やリーダーシップの教育を受けられる財団法人「県産学官人材育成機構」の数年後の設立に向け、県内自治体や経済界の協力を取り付けたい意向だ。締結式は長崎市内であり、5校の学長と中村法道知事、長崎、佐世保両市長が協定書に押印した。長崎大の片峰茂学長は「若者の県内定着にはインセンティブ（動機づけ）が非常に重要。奨学金などの制度を行政、産業界と連携して作り上げることが大事だと語った。」

（松尾潤）

長崎新聞（平成28年2月28日）

## 産官学で地方創生推進

### 人材育成、雇用拡大へ連携

長崎大でセミナー



地方創生に向けた人材育成と雇用拡大に向け、長崎大など県内の大学・短大5校が自治体や企業と取り組む「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」のキックオフセミナーが27日、長崎市文教町の長崎大であった。主導する同大は産官学で連携し、地域産業が求める人材の育成や学生の地元就職意欲を促す教育プログラムを開発、推進する方針を示した。

文部科学省の事業。地方創生の中心となる人材を育てる大学を支援し、本年度に全国42校を採択。本県は、長崎大など5校と県、長崎、佐世保両市が参画し、2019年度の学生の県内就職率を14年度比約10%増の約50%（1138人）に引き上げるのが目標。同大の松坂誠應理事が説明し、事業を統括する地方創生推進本部を同大に置き、地元企業が必要とする人材の把握や学生への情報提供によりマッチングを図るとした。

長崎国際大は県北の拠点校として企業、自治体と連携、長崎純心大は長崎の歴史、文化教育と医療福祉分野の雇用拡大、長崎短期大は保育士や観光業の就職先確保、県立大は観光、情報関連企業、医療介護領域への就職先確保などに取り組む。自治体は雇用拡大政策や企業誘致、地元企業は大学への教員派遣やインターンシップ受け入れなどで協力を。地元企業に就職した学生を地域リーダーとして教育する財団法人「県産学官人材育成機構」を企業や自治体と設立することも提案された。

（六倉大輔）

西日本新聞（平成28年3月16日）

### 県内就職率10ポイント増目標 5大学、県など連携協定



長崎大など県内5大学・短大と県・長崎市・佐世保市は、若者の県内定着と人材育成に連携して取り組み、地方創生を推進する協定を結んだ。産学官連携による人材育成と地元企業への学生のインターシフトなどを通じて、大学生の県内就職率を2014年度の40・2％から、19年度には10ポイント増を目指す。

長崎大を中心に提案した「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」の一環。協定には県立大、長崎大を中心とする5大学・短大と県・長崎市・佐世保市・短大は地域志高性を高める教育プログラムを新しく作り、地元企業が求める人材を育成する。連携する自治体は雇用拡大の政策に取り組み、実務者教員を派遣する。

2月18日に長崎市のホテルで産学官の協議の場となる推進協議会の会合と締結式があり、各大学・短大の学長や知事、長崎市長、佐世保市長などが出席。長崎大の片峰茂学長は「長崎大では観光、海洋エネルギー、医療福祉、教員養成分野で専門的教育プログラムを作り、（県内就職者を）93人と増やす。目標は達成できると思う」と語った。

（北島剛）

長崎新聞（平成28年3月23日）

## 地域活性化のヒント満載

**関係者の座談、講演、寄稿**

### 「波佐見焼ブランドへの道程」出版



江戸時代から陶磁器を日本の食文化に普及させる貢献をしてきた波佐見焼。低かった認知度が近年上がり、東京の大展示会では売り上げ1位を記録するほどの人気という。その背景を関係者がつづった「波佐見焼ブランドへの道程（みちのり）」が出版された。

波佐見焼や産地の東波佐見町が若い人の注目を集めるようになるまでに、立役者ともいえる人たちは何を考え、どんな取り組みをしてきたのかが分かる。業界の関係者、支援してきた県立産業技術センター、県立大の研究者らの座談を講演・寄稿などを「みちのり（つかる）」つなげる。3章に分けて収録。波佐見焼のブランド化のため、文部科学省の「地（知）の拠点創生事業」で地元と連携する県立大が編集した「つくる」では波佐見を代表するメーカー白山陶器の松屋慶二社長、陶器の吉野製器代表らが登場（つかう）では、国内最大級の器の祭典「テンプルウェア・フェスティバル」に出展する業者を指導してきた今

田功プロデューサー、若者に人気のカフェ「モンネ・ルギ・ムック」を主宰する岡田浩典さんを紹介した。中野雄二学芸員、県立大経済学部の中野雄二教授らが文を寄せている。

自身も提言している波佐見焼振興会の尾玉敏夫会長（66）は「脚光を浴びつつある波佐見焼の将来のために、もくろした記録を残すことは必要。さらに計画している」と話す。

地域をどう活性化するかについてのヒントが随所に登場。波佐見焼と波佐見町が好きなら、アタリだけでなく、地域の将来を考えている人たちの参考になる。「波佐見焼ブランドへの道程（みちのり）」は、1600円。（石田謙二）

長崎新聞（平成28年3月25日）

連携協定を結び、握手を交わす  
友広市長（右）と太田学長  
＝松浦市役所



松浦市と県立大（佐世保市川下町）は24日、共同研究や地域活性化、人材育成などの分野で協力していくため、包括連携協定を締結した。

県立大はこれまでも、中小企業振興や行政改革などの市の取り組みに対し、教授や准教授らが助言したり、市内のイベントに学生がボランティアとして参加するな

## 人材育成などで協定

——松浦市と県立大

ど協力しており、協定締結をきっかけにさらに連携を深める。市では、学生向けインターンシップの受け入れ、児童生徒向けの学習支援サポーターとして学生を活用することなどを検討している。

市役所であった調印式で友広郁洋市長は「連携による相乗効果に期待したい。特に、若い世代が松浦に住みたいと思うようならまちづくりを進めており、協力をお願いしたい」とあいさつ。太田博道学長は「地域貢献は県立大のミッション。地域の発展を手伝うとともに、教授らの専門性を生かし、学生の学びの場をつくることにつなげたい」と述べた。

県立大が、県内の市町と連携協定を結ぶのは9件目となった。

（山里悠太郎）

長崎新聞（平成28年7月5日）



まちづくりについて、県立大生による活性化案の提案などがあった報告会  
＝佐世保市中央公民館

## 県立大生が活性化策提案

まちづくり活動報告会 若い世代と意見交換

地域の課題解決に取り組む市民団体による「まちづくり活動報告会」が4日、佐世保市常盤町の市中央公民館であり、県立大の学生が、フェアトレードカフェの運営といった活性化案を提案した。

報告会は、市民と行政が協力してまちづくりを推進する「提案公募型協働事業」や「（市民活動の）自発支援補助」の一環、若い世代も意見を交わそうと、しまなびプログラムなどを通じて地域活性化を模索する同大の学生に初めて参加を呼びかけた。

約50人が参加。経済学科4年、野崎電世さん22歳のグループは、途上国で収穫された製品を適正な価格で取り、生産者の生活向上を支援する「フェアトレード」を活用した学生カフェの運営を提案。

「学生主体の活動で大学を中心に盛り上がる」と述べた。

高瀬経営学科3年の日唯真さん20からは、恋愛などのテーマを持つ観光ルートや土産品などの案を紹介した。

このほか、NPO法人や自治体など4団体が、生活困窮者の自立支援や「地域むすび」の対策事業などについて、2015年度の活動内容や成果、今後の課題を報告した。

（水江優子）

フェアトレードカフェ  
恋愛テーマの土産品

西日本新聞（平成28年7月18日）

### 「離島体験」の講座紹介

#### 県立大オープンキャンパス

県立大のオープンキャンパスが17日、佐世保市下町の佐世保校長身所まなび野のシーホルト校で始まり、必修として昨年度から始まった講座「しまなび」プログラムについて、講師が高校生たちに



「しまなび」プログラムについて説明する中島洋特任教授

と説明。「島は（佐世保）第3のキャンパスだ。県立大とシーホルト校に次ぐと捉えている」と強調し

川原高2年の一瀬瑞貴さん（16）は「離島へ行く機会が少なくて大学が送り出されてくれるのありがたい」と話した。（坂本 公）

西日本新聞（平成28年8月13日）

### 島の魅力ポスターに

#### 県立大生制作、市に20枚贈呈

#### 香岐

県立大（佐世保市）の学生16人が、香岐市のPRポスターを制作し10日、250枚を市に贈呈した。市は、市観光連盟の案内所や民宿、市福協事務所などに配り活用する。

学生たちは離島の現状や課題を学ぶ2年生の必修科目の一環で企画。香岐の魅力を引き出したいと、昨年9月8～12日に島を訪れ古



香岐市のPRポスターを手にする制作リーダーの園分大樹さん（右）

や神社、徳島、博物館などを調査した。ポスターはA判、島の形の中に、観光名所の写真や砂浜、町並みなどの写真をはめ込み「意気がある、香岐にある」というキャッチコピーが添えられている。制作リーダーの園分大樹さん（21）は「多くの人がポスターを見て、香岐に行きたいと思ってほしい」と話した。（田中 辰也）

長崎新聞（平成28年8月19日）

### 香岐市PRのポスター

#### 県立大生が制作、贈呈



制作したポスターを香岐市に贈る園分さん（右）  
＝市役所横ノ浦庁舎

「意気がある、香岐にある」と、県立大の学生がこのほど、香岐市をこころやするポスターを制作し、市に贈った。

同大と市は、人材育成に向けた包括連携協定を結んでいる。その教育プログラムの一環で、学生約180人が昨年9月、4泊5日、香岐を訪れ、研究課題を探した。ポスターは、このうち経済学部地域政策学科3年、園分大樹さん（21）がリーダーを務めるグループ16人が発案し制作した。

A4判、横長、横書き、サイズ、「イキ」で語呂合わせしたキャッチコピー「意気がある、香岐にある」は、現地で島民の優しさに触れ、考え付いたという。香岐島の形をした枠内に、自分たちで撮影した観光地や出会った市民の写真を取りはめた300部印刷し、JR長崎、佐世保駅や福岡市内に掲げ予定。島内の観光地や宿泊施設にも配布する。

園分さんは「香岐に来て良い思い出があった。その思いを表現できて良かった。多くの人に届けてもらいたい」と話した。（植村 圭司）



### 県立大学生作成のPRポスター贈呈式

10日、市役所郷ノ浦庁舎で、長崎県立大学の教育プログラム「しまなび」において学生が作成した市PRポスターの披露と贈呈式が行われた。「しまなび」プログラムとは、県内離島を（佐世保校、シーボルト校に次ぐ）第3のキャンパスと位置づけ、学生が事前学習を行った上で、フィールドワークとして「しまなび」を訪れ、現地の生活や人々との交流

の中で実践的な学習を積み重ね、学生が自ら課題を発見し解決する能力、主体的に行動する能力、チームで協働し、発信する能力を身につけ社会人基礎力を磨養するプログラム。昨年4月〜7月にかけて計画を作成し、9月に4泊5日で老岐を訪れ、フィールドワークを実施した。県立大学3年のポスター作成グループリーダーである國分大樹さん（21・対馬出身）は、「今回の学習の成果を発表するにあたり、PRも出来、観光客にも見てもらえるポスターを作成した。既に佐世保港や大学周辺に持参し、長崎駅なども掲示依頼しようと思う。老岐では色々な方に助けて頂いた。お世話になった方々に見て頂きたい」と話した。

印象をポスターにして頂いた。今後、市のPRと併せて県立大学の取り組みの紹介も含め活用させて頂きたい。本年度も益明けから11チームに分かれて約120人の学生さん連日来て頂く予定となっている。県内の対象7島の中でも老岐を希望して頂く学生さんが多いと聞いている。将来は老岐に住んでも良いよ、という学生さん達が現れてくれたら更にありがたいと思ってる」と挨拶した。贈呈された250枚のポスターは市観光連盟等と相談して島内外に貼る予定との事。

この平成26年度から始まった県立大学の取り組み「しまなび」プログラムは、全学年参加で毎年、対馬、老岐、五島、小値賀、新上五島、宇久、山田島の7島に佐世保校から約450人、シーボルト校から約140人の学生達がフィールドワークを行っている。

## 魅力知り活性化策探る

県立大「しまなびプログラム」試行から3年目

「しまなび」の試行から3年目を迎える。県内各地に点在する離島は、それぞれに特色がある。しまなびプログラムは、その魅力を掘り出し、活性化策を探る。9月上旬に五島市を巡る。この日は、五島市役所にて、県立大の学生と市役所の関係者を交わす。市役所の関係者は、五島市の魅力を伝え、活性化策を探る。



五島滞在の3班に同行

「しまなび」の試行から3年目を迎える。県内各地に点在する離島は、それぞれに特色がある。しまなびプログラムは、その魅力を掘り出し、活性化策を探る。9月上旬に五島市を巡る。この日は、五島市役所にて、県立大の学生と市役所の関係者を交わす。市役所の関係者は、五島市の魅力を伝え、活性化策を探る。



### 目標実現へ調査や意見交換 反応上々、厳しい声も



「しまなび」の試行から3年目を迎える。県内各地に点在する離島は、それぞれに特色がある。しまなびプログラムは、その魅力を掘り出し、活性化策を探る。9月上旬に五島市を巡る。この日は、五島市役所にて、県立大の学生と市役所の関係者を交わす。市役所の関係者は、五島市の魅力を伝え、活性化策を探る。

### 課題解決能力を育てる

中島洋特任教授

「しまなび」の試行から3年目を迎える。県内各地に点在する離島は、それぞれに特色がある。しまなびプログラムは、その魅力を掘り出し、活性化策を探る。9月上旬に五島市を巡る。この日は、五島市役所にて、県立大の学生と市役所の関係者を交わす。市役所の関係者は、五島市の魅力を伝え、活性化策を探る。



「しまなび」の試行から3年目を迎える。県内各地に点在する離島は、それぞれに特色がある。しまなびプログラムは、その魅力を掘り出し、活性化策を探る。9月上旬に五島市を巡る。この日は、五島市役所にて、県立大の学生と市役所の関係者を交わす。市役所の関係者は、五島市の魅力を伝え、活性化策を探る。

その他（平成25年度～平成28年度）

長崎新聞（平成28年12月28日）

**酒かす使い新産業 / 海岸で水切り大会**

## 島民に活性化策を提案



遠隔会場とつなぎ、離島の活性化策を提案した発表会＝県立大佐世保校

### 県立大生、4泊5日交流し発想

県立大（太田博道学長）の学生が県内離島でフィールドワークをする「しまなび」プログラムの全体発表会が27日、佐世保校（佐世保市川下町）とシーホルト校（西彼長与町）をメイン会場に開かれ、学生が島の活性化策を提案した。

離島を第3のキャンパスと位置付け、4泊5日の日程で住民と交流しながら課題を見つけ、解決案を採る授業。経済学部

島民投票で、最高位の「しまなび賞（学長賞）」は▽かんころ餅パッケージの作成した五島11班▽島の産品を使った観光客向け弁当を考案した豊岐11班▽インターネットを通じて資金を募るクラウドファンディングの活用を提案した対馬16班の3グループが選ばれた。

（永江倫子）

小値賀町）で水切り大会をやったかどうか」などと提案した。島民からは「新しい発想だった」「継続した取り組みやアイデアの実現のために、島の地域おこし協力隊をもっと活用して」などの意見が出た。

島民投票で、最高位の「しまなび賞（学長賞）」は▽かんころ餅パッケージの作成した五島11班▽島の産品を使った観光客向け弁当を考案した豊岐11班▽インターネットを通じて資金を募るクラウドファンディングの活用を提案した対馬16班の3グループが選ばれた。

（永江倫子）

2年と国際情報学部1年の計530人が履修し、五島や豊岐、対馬など計7島を訪れた。各島の遠隔会場とインターネットで作成、林業、観光プラン作成、林間学校開催などのテーマで「酒かすを使った新産業はどうか」「島民、学生、観光客の要望を組み合わせ、赤浜海岸（北松

ターネット電話「スカイプ」でつないで実施。学内予選を通過した12グループが、移住策や婚活事業、観光プラン作成、林間学校開催などのテーマで「酒かすを使った新産業はどうか」「島民、学生、観光客の要望を組み合わせ、赤浜海岸（北松

長崎新聞（平成29年2月25日）

## 『斬新』包装紙 かんころ餅売り込め

**県立大生が製作**  
五島・真鳥餅店 28日から浜屋で販売

県立大の学生が、離島の振興策として、五島市の特産品かんころ餅の包装紙を製作した。五島に伝説が残るかっぱや特産のツバキをデザインしており、地元の実業家が採用した。同店は28日から長崎市の浜屋百貨店で開かれる「五島の観光とよか産品まつり」で新たな包装紙をまたったかんころ餅を売り込む。

包装紙は県立大国際社 装紙をデザインした。紙会学科1年の岡本裕里子には「かっぱが愛したかさん2011年が手掛けた。かんころもち」などと書いた。11人は離島の振興策でPRしている。

などを採る同大の「しまなびプログラム」に参加。包装紙を学内の発表会で終わらせず現地の業者に依頼して印刷してもらった。昨年8、9月に福江島餅店に依頼。その意欲に「面白そう」と呼んだ。若い視点で斬新な包装紙を、今月再び来島した岡本さん。

（石田慶介）



岡本さん（左）ら学生が手掛けた包装紙と真鳥餅店のかんころ餅

＝五島市

## 他大学来訪

## 1. 元智大学（台湾）COC に関する来訪について

日時：平成 29 年 7 月 10 日（月）13:00～16:30

場所：シーボルト校 特別会議室

来訪者：通識教学部学部長 梁家祺  
 芸術センターセンター長 鄒淑慧  
 通識教学部助理教授 麥麗蓉  
 通識教学部助理教授 王怡云  
 通識教学部助理教授 糠明珊  
 通識教学部助理教授 李曉菁  
 通識教学部講師 林焯舒  
 通識教学部職員 江鴻津  
 応用外国語学科 学生 曾佳瑩  
 台湾芸術大学 学生 林健綾

本学対応者：国際交流センター長 鈴木 暁彦  
 地域連携センター 特任教授 中島 洋  
 東アジア研究所 職員 黄 淑慎  
 企画広報課課長 政野 誠一郎  
 企画広報課グループリーダー 前田 士  
 総務企画課グループリーダー 藤井 祥二

## 実施内容

- 本学の「しまなび」プログラムの説明・質疑応答
- 元智大学より「桃園文化ロード」プログラムの説明・質疑応答
- 意見交換

## 2. 岐阜大学 COC に関する来訪について

日時：平成 30 年 1 月 22 日（月） 13：30～15：10

場所：シーボルト校 西棟 4 階会議室 3

来訪者：岐阜大学応用生物科学部 教授 岩澤 淳  
岐阜大学地域協学センター副センター長（兼任）

本学対応者：地域連携センター 特任教授 中島 洋  
企画広報課グループリーダー 前田 士

### 実施内容

- ・本学より別紙質問事項に基づき回答。地域（離島）の特徴、実施体制、「しまなび」プログラム、学生の評価、波及効果等についてディスカッション



# おわりに

## 『プログラム体験は、将来の進路を決める転機になりました』

平成 27 年度の「しまなび」プログラムに参加し、長崎の離島である壱岐について、「壱岐の体験・観光について調査し、PR する」をテーマに、リーダーとして研究をまとめました。

最初はお互いのことをあまり知らない学生同士でしたが、壱岐に暮らす人々と触れ合う 4 泊 5 日のフィールドワークもあり徐々にチームワークは良くなりました。最終的にはポスターを制作。壱岐の方々にとっても喜んでいただき、やりがいをもって取り組むことができました。

このプログラム体験は、地域の人々の役に立つ公務員になりたいという目標を持つ私自身の転機にもなりました。

地域政策学科 4 年 國分 大樹 (長崎県/諫早高等学校出身)

## 『多くのことを学ぶことができたプログラム』に感謝しています。

平成 28 年度の「しまなび」プログラムに参加し、長崎の離島である五島市について、観光客や若者にこの島の伝統文化を PR するため、特産品でありながらあまり知名度がない“かんころ餅”に焦点を当て、新しいパッケージづくりをテーマに選びました。

グループのリーダーとして、「しまなび」プログラムで得た最大の収穫は“リーダーとしての経験”です。グループの意見の集約はもちろんですが、個々の能力を生かすことができるような方針を立て、全員が足並みを揃えられているか、つまづいている人はいないかを見守るのがリーダーの役割だと感じました。

さらに、プロジェクトマネジメントとは何か、相手のニーズに応えることとは何か、そして人と人の繋がりを大切にするとはどういうことかなど、多くのことを学びました。

チャレンジした日々は、これからもっと成長していくためのベースになったと思います。

国際社会学科 2 年 岡本 裕里子 (静岡県/浜松北高等学校出身)

長崎県の多くの「しま」は、急激な人口減少や少子高齢化が進行しており、今後、日本に生じるであろう問題にいち早く直面しています。離島が多い長崎県、その県が運営する長崎県立大学だからこそ取り組みに意義がある「しまなび」プログラムは、「しま」のことを深く学ぶことを通じて、日本の将来をも学習する教育プログラムです。

これまでに延べ 2,113 名の学生が「しま」を訪れました。多くの学生が共に抱いた感想は、『私にとって、「しま」はただの島であり、関係の無い遠いところだと思っていました。しかし、実際に行ってみると人々のあたたかさや、やさしさを痛感し、もっと活気ある「しま」を作っていきたいと思うようになりました。私にとって得られたものは、行動の原動力となる人と人とのつながりです。』との言葉に取れんされると思います。

このような高い教育効果がある「しまなび」が展開できたのも各「しま」の関係者のご理解とご協力があったからこそだと思います。

これまで「しまなび」に対する各「しま」の関係者のご厚意に心から感謝いたします。

今後とも、学生の成長のため、地域貢献のため、長期的な視点で取り組んでいきたいと考えています。

長崎県立大学 地域連携センター 特任教授 中島 洋

「 長崎のしまに学ぶ ― つながる とき・ひと・もの ― 」

平成 29 年度

地（知）の拠点整備事業

【最終年度 事業経過報告書】

【お問い合わせ先】

長崎県立大学企画広報課

TEL : 0956-47-5856

FAX : 0956-47-8047

e-mail : kikaku@sun.ac.jp

【長崎県立大学】

佐世保校 〒858-8580 長崎県佐世保市川下町 123

シーボルト校 〒851-2195 長崎県西彼杵郡長与町まなび野 1-1-1

2018 年 3 月 制作

編集・発行 企画広報課企画広報グループ



